



ポートタウン・ジュリエット

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

- act.1 Lonely Sniper*
- act.2 Honky-tonk Girl*
- act.3 Scared Virgin*
- act.4 Awaken Heroine*
- act.5 Ferris-wheel Beauty*
- act.6 Stylish Ma'am*
- act.7 Death Nurse*
- act.8 Cornered Lady*
- act.9 Mourning Daughter*
- act.10 Trapped Bunny*
- act.11 Drifting Lover*
- act.12 Heavenly Woman*

★タップすれば各章へジャンプします

act. 1 Lonely Sniper

夜の寒気を伝って、遠くの街区からスイングジャズが流れてくる。

それがとぎれとぎれになるのは、倉庫と倉庫に挟ま

れた五十センチほどしかない隙間を、時折、突風が吹き抜けるからだ。乾いた革ジャンとすすけたコンクリートの擦れる感触が、さらにその風を寒々しいものを感じさせる。

にもかかわらず、ジロウの額には汗がにじんでいた。ジロウは、革ジャンの胸につっこんだ手とは反対の手の甲で、それを拭った。

あと十分か、十五分か。

いくら奴が大食漢のブタ野郎だとしても、食事に二時間はかけないだろう。

フカヒレスープやら北京ダックやらをたらふく食い、肌を脂ぎらせて、もうじきその店から出てくるはずだ。満腹になれば、あとは、今夜抱く女のことくらいしか頭にないにちがいない。

中華料理店の出口から、街路灯のまばらな裏通りに駐車しているベンツまでの距離は、約三十メートル。

この倉庫ビルの隙間からとび出し、背後から狙って、二三発撃ち込む余裕はじゅうぶんにある。

この一週間、ひたすら、こんなチャンスを待ってつけまわしていたのだ。これだけ条件がそろっていけば、いくらまだ人を撃つたことのないジロウにも、殺れるにちがいない。

深夜、子分を二人しか連れず、しかもこんな港のはずれの料理店に来たことが、奴の運の尽きということ

だ。

ジロウは、革ジャンの下に隠したトカレフをもう一度確かめるように握りなおした。

と、入口の回転ドアの向こうに人影が動いた。あのお定まりの黒ダブルは、若頭の海江田にちがいない。

ジロウは、その倉庫の隙間からすぐにも飛び出せるように身構えた。

海江田に次いで奴が、そして、そのあとをガードす

るように、もうひとりの長身の男が店を出てきた。

黒のスラックスにタートルネックのセーター、カーキ色のジャケットというその男は、昨日まで見かけなかった顔だ。今日の昼頃になって突然現れた。まわりの子分たちの態度を物陰から見ている、おそらくは出所してきたばかりの幹部だろうとジロウは踏んでいた。この深夜の会食も、「おつとめ」を終えてきたその男に対する、組長自らのねぎらいの食事会というわ

けだろう。

店を出たところで、その男は、鋭い眼光で周囲を見回した。

ジロウは、あわててまた身を潜めた。

どうやら感づかれはしなかったようだ。

「……湯木沢、まあ、そういうことだから、悪く思わ
んで海江田を助けてやってくれや」

奴の声と、遠ざかる三人の足音が倉庫街に響いた。

今だ。

ジロウは、身を翻して街路に飛び出すと、三人の後を追った。

足音に気づき、最初に振り向いたのは湯木沢と呼ばれたカーキ色のジャケットの男だった。

ジロウはそこで立ち止まり、腰を低く構えて、拳銃を持った手をもう一方の手で支えるようにしてつきだした。

「お命、頂戴！」

つづけざまに三発、銃爪を引いた。

その音が倉庫群にこだました時には、ジロウは、命中したかどうかも確かめず、きびすを返し、走っていた。

「待てっ」

海江田が追ってきた。

「組長ーっ」

湯木沢が叫んだ。

「ジロウ、お前、まさか。……殺ったのか!？」

マンションの部屋に駆け込んだジロウの顔を見るなり、榎本は驚いてソファを立った。

「あ、ああ。兄貴、み、水」

肩で息をしているジロウに取り合わず、榎本は、壁に掛けてあったジャケットを急いで取りながら怒鳴っ

た。

「馬鹿野郎、こんなところに帰る奴があるか。奴らがすぐを探しに来るぞ。来い」

榎本は、入ってきたばかりのジロウを急き立て、部屋を飛び出すと、地下の駐車場に向かった。

ビュイツクを急発進させ、住宅地の狭い道に飛び出した榎本は、片手で器用にハンドルを操りながら、携

帯電話で組への報告を入れた。

「ジロウが鬼頭を殺ったらしい。奴らの襲撃に注意しろ」

車が国道に出ると、榎本はやっと少し安心したらしい、独り言のように言った。

「若頭があんな言い方をしたから、若いもんの誰かが手を出すだろうとは思ったが、まさかお前がやるとはな」

ジロウは人を撃つたという高ぶった気持ちの中で、誇らしげに榎本を見た。

ところが榎本は、苦り切った顔で、思わぬことを言
った。

「ジロウ、いくら相手の組長を撃つたからって、組が
お前のことを守ってくれるとはかぎらんぞ」

「……え？」

「今夜のことは、跳ね上がりのお前が勝手にやったこ

とだ。若頭や組長はきつとそう言うだろう。事実、そのとおりなんだからな」

「でも……」

「ああ、たしかに若頭は『鬼頭が死ねばいっぺんにナシはつくんだ』と言った。だが、『殺れ』とは誰も言つてねえんだ。たとえばもし俺が殺つたんなら言い訳はできんが、お前なら、組はいつさい知らんといくらでも言える。若頭はお前に、すべて独断でやったと自

首させようとするだろうな」

「兄貴、俺、もちろんそのくらいの覚悟ありますよ」
ジロウは気色ばんで言った。

「馬鹿野郎。問題はその後だ。鬼頭組に弱みは見せられんから、組はいつさい知らんぷりだぞ。弁護士さえつけん。親にも見放されてるお前は、やる気ねえ国選の弁護で懲役十五年てとこだ」

榎本の言葉に、ジロウは押し黙るしかなかった。

誰かが鬼頭を殺さなければならぬ。それはまちがいないことだった。そして、そんな勇気があるのは、組の若い者の中で自分だけだと思った。もし自分がやれば、出世頭になれるだろうとも。体つきは貧相で凄みもない自分が頭角を現すには、今、この手で鬼頭のブタを殺るしかないという気がした。

そして、ジロウはそのとおりしたのだ。

これで、組は、鬼頭組の進出からシマを守れるはず

だ。ジロウは英雄になれるはずだった。

それなのに、心酔している榎本は、そんなふうに言う。ジロウは、混乱して、わけがわからなくなつた。

と、榎本が、また口を開いた。

「お前の弾が鬼頭の心臓をぶち抜いたかどうかはまだわからんが、そんなことは問題じゃねえ。どっちにしても、これで戦争が始まるんだ。要するにお前は、そのきっかけをつくつたんだ。当然、鬼頭組の奴らの最

初のターゲットはお前だ。奴らは、お前を捜すことを口実にして、組関係のあらゆるヤサを襲撃してくるだろう。こっちも、それに応戦しながら、一方で、お前のことを血眼になって捜すことになる。戦争の納めどころは、けつきよく、お前を差し出すことにあるんだからな」

榎本は、ジロウが自首せず、身を隠すことを前提にして話を進めていた。ジロウはそのことに気づき、不

可解そうに榎本の顔を見た。

「兄貴、それは、つまり……」

「俺は、お前を隠す。組のもんにも、お前の行方はいっさいしやべらんつもりだ」

「俺、そんな卑怯なまねは……」

「馬鹿野郎。ひとり粋がつてんじやねえ」

「……でも、どうして……」

「舎弟分ってだけじゃねえ。俺は、ガキだが心根の優

しいお前が、極道の道からはずれた政治に利用されるのが我慢ならんのだ」

榎本は吐き捨てるように言うと、また国道をそれ、車をコンテナ埠頭の方へと向けた。

吉井滋郎は、客観的には、恵まれた家庭に育ったと言っている。けっして貧しかったわけではないし、家族関係に特殊な事情があったわけでもない。父は、あ

る大企業に勤めるサラリーマンで、今は、たぶん部長になっているはずだ。東京郊外の新興住宅地に、八十平米のマイホームを持っている。超エリートとは言えないまでも、サラリーマンとしては上流の部類に入るだろう。

ジロウ自身、小学校低学年の頃までは、典型的な「中産階級のお坊っちゃん」だった。素直でおとなしく、学校の成績も悪くはなかったのだ。

しかし、それとはくらべものにならないほど優秀な二歳年上の兄がいた。学校では、つねに頭抜けてトツプ。そのうえ、体格も大きく、サッカーチームのエースストライカーだった。

当然、親の期待は、兄に注がれた。両親にしてみれば、おそらくそんなつもりはなかったのだろうが、ジロウは、幼い頃から自分が家の中で疎んじられていると感じていた。兄を有名私立中学に入学させることに、

また、リトルリーグの応援にと、両親が一生懸命になつてゐる間に、ジロウの心はだんだんにねじ曲がつていった。

最初に暴行事件を起こしたのは、小学校五年の時だった。ジロウの背が低いことをからかった六年生を、通学路の途中の石段から突き落とすたのだ。

その事件はいわば子供どうしのいざこざに過ぎなかつたのだが、相手がひどい骨折をしたことで、一方的

にジロウが悪いということになってしまった。

ジロウは、あつと言う間に「問題児」のレツテルを貼られた。

「あの子、かわいい顔してるけど、相当のワルらしいわよ」

そうなれば、あらゆることが悪い方に転がり出す。

「あの子と遊ぶのはやめなさい」と親から言われ、親しい友達がだんだん離れていき、級友とのちよつと

した悪ふざけが「いじめ事件」視され、……。そして、その結果、ジロウのまわりに残ったのは、親や学校に反感を抱く生徒ばかりになった。

中学に入った頃には、すでに、ジロウとその仲間は、不良グループと見なされていた。なにか学校で問題が起こると――たとえば、ジロウたちに身に覚えがなくなるとも――すべてジロウたちのせいになされた。

たしかにジロウは、仲間といっしょにゲーセンにた

むろし、たばこやシンナーを吸い、時には自動販売機を壊して、金をくすねたりもした。

だがそれは、親身になって、ジロウに「生き方」を教えようとする大人が、まわりに一人もいなかっただけに過ぎないのだ。

両親は、そんなジロウを持って余しているようだった。いや、もしかすると、何度も警察沙汰を起こす粗暴な息子を単に怖がっていただけかもしれない。

問題を起こすと、まるで絵に描いたように型どおりの説教をする父の目の中に、ジロウは、困惑とおびえの表情を読みとっていた。そして、そこにはつねに、「兄とくらべ、この子は本当にどうしようもない」というあきらめとあざけりの眼差しも隠されていた。

「あんたらには、関係ねえだろ！」

ジロウは、父や母をそう突っぱねながら、一方で、それだけで言葉を継げなくなってしまう両親に満たさ

れないものを感じてもいた。

そんなジロウの前に、榎本が現れたのは、高校に入り——と言っても、学校にはほとんど行かず——、暴走族のメンバーとして関東一円を走りまわっていた頃だ。

仲間とふらりとやってきたこの港町で、地元的不良たちと小競り合いを起こした。それが、いつしか、角材やナイフまでも持ち出した喧嘩になった。

深夜だったが、まだ人通りのある繁華街での乱闘騒ぎに、割って入ったのが榎本だった。

「喧嘩のしかたも知らねえガキどもが。堅気の衆に迷惑かけるんじゃないやねえ」

そう怒鳴られ、興奮していたジロウたちは、その矛先を榎本に向けた。

「るせえんだよ、このじじい！」

ところが、いっせいに襲いかかった双方あわせて二

十人近い不良たちを、榎本は一人で、あっという間に打ちのめしてしまったのだ。

自分たちが相手にしたのが「プロ」だということに気づいた頃には、ジロウたちは全員、舗道の上に伸びていた。

そして、そのみっともない姿を、通行人の急報で駆けつけた警察が目にした頃には、榎本はすでに、どこへともなく消えていた。

その事件のすぐ後、ジロウは家出した。事件のことで、父から「勘当だ」と言われたこともあったが、それよりも、榎本を捜し、子分にしてもらおうと思ったからだ。

そして、ふたたびこの街に来た。

何日間か街をうろつき、その筋の人間が出入りしそうな場所を、危険を承知で聞いてまわり——実際、ジロウは何度も組関係者に痛めつけられた——榎本が、

横手組の幹部組員だということをつきとめた。

「おめえか、俺のことを嗅ぎまわってやがるのは」

横手組の事務所の前で待ち伏せ、やっと見つけた榎本は、ジロウに鋭い眼光を浴びせながら、そう言った。

「舎弟にしてください」

そう切り出したジロウを、榎本はまるで相手にせず、突っぱねた。

それでもジロウはあきらめなかった。榎本の住むマ

ンションを探し出し、そこへ日参した。

そんなジロウに辟易しながらも、榎本はなかなか首を縦に振らなかつた。

「おめえみてえなお坊っちゃん育ちに、つとまる世界じゃねえ」

時には、そのあまりのしつこさに腹を立てた榎本が、ジロウを殴ったこともあるが、それでもジロウは榎本に食い下がった。

ジロウがそこまでしたのは、榎本に対して、生まれて初めて、自分に真正面から立ち向かってきてくれる「強い大人」を見たからだ。

けつきよく、ジロウの執念に負けた榎本は、ジロウを自分のマンションに住まわせ、舎弟分とすることに
なつた。

それから三年。昨秋、榎本のひきで杯を交わし、ジロウは横手組の正式な構成員となつたのだ。

「兄貴、ここは……」

車のスピードを緩めた榎本を見て、ジロウは意外そうに言った。

「ああ。鬼頭組のすぐ近くだ。用心しな」

コンテナ埠頭のそばのすすけた感じの小さなスナックの前に車を横付けすると、榎本は、周囲に鋭く目配せしながら車のドアを開けた。

「早くしろ」

つづいて降りたジロウをせかし、榎本は、そのスナツクに入った。

と、ドアについたカウベルの音に、カウンターの中
でかたづけものをしていた女が、顔も上げずに言った。

「お客さん、悪いけど、今日はもう看板なんですよ」
「俺だよ」

榎本の声に、その四十年輩の女は驚いたようにこち

らを向いた。

「あんた。こんなところに来るなんて、珍しいこともあるもんだね。だいじよぶなのかい？」

「だいじよぶなわきやねえだろ。お前にちよつと頼みがあつてな」

カウンターを出てきた女は、急いでドアの鍵をかけるのと、聞き返した。

「やばいことかい？」

「ああ。こいつをここに、かくまっつてほしいんだ」

カウンターの椅子に腰掛けながら言った榎本の言葉に、女は、立ったままのジロウを見た。

「ジロウってんだ」

「だって、あんた、鬼頭組とのいざこざだろ」

「ああ、鬼頭の野郎を撃つたんだ」

「えっ……」

まだじゆうぶんに色気は残してはいるが、世間の裏

も表も知り尽くし、多少のことでは動じそうもないその女も、榎本の言葉にさすがに絶句した。

「他に隠すところもねえんでな」

「あんたも、ほんとにめっちゃくちゃだねえ。鬼頭の組事務所は、すぐ裏なんだよ」

「そんなこたあわかってるさ。灯台もと暗しって言うだろ」

ジロウは、薄暗いスナツクの真ん中に突っ立ったま

まで、榎本と女とのやりとりを、呆然と聞いていた。

榎本が考えていることもよくわからなかったし、その女の存在にも驚いたからだ。彼女はどうかやら、榎本の女のようにだ。それも、しごく親密な間柄のように見える。しかし、ジロウは、この女をはじめて見たのだ。

かつては結婚したこともあるらしいが、榎本は今、独り身だ。だから、ふだんの世話は、舎弟分であり、同居人であるジロウが見ている。ほぼ四六時中いっし

よにいたのだ。それなのに、榎本にこんな女がいることを、この三年間、露ほども感づかなかつた。

たしかに、ときどき、榎本が「女を抱いてくる」と外泊することはあつたが、それは、どこかの商売女にちがいないとジロウは思っていたのだ。

それほど榎本には女の匂いがしなかつた。ストイックな昔気質の極道である榎本に——特にそこに心酔しているジロウには——、特定の女がいることなど想像

できなかつたのである。

「なあ、美佐恵。俺のたつての頼みだ。きいてくれ。

上の部屋、空いてんだろ」

「そりゃ、前勤めてた子がやめてから、空き部屋になつてるけど……。でも、いくらなんでも、危なすぎるんじゃないかい？」

美佐恵と呼ばれた女は、天井を見上げるような仕草をしながら言った。

「ああ、お前に迷惑がかかるのは、申し訳ねえが」

「ううん、あたしが言ってるのは、そんなことじゃないよ。若いんだし、上の部屋にこもりきりってわけにもいかないだろ」

「ほとぼりが冷めるまで一年かかるか、二年かかるか知らねえが、それくらいの我慢はするさ。なあ、ジロウ」

「……へ、へえ」

榎本の言葉に、いまだ呆然としたままのジロウは――納得しているわけではなかったが――、うなずいた。と、女が言った。

「それにだいいち、上にはトイレも炊事場もないんだよ。店やってる最中に、下のトイレに行こうと思ったら、どうしたって客の目に触れることになるだろ。それに、お風呂だって」

「風呂か。トイレは開店中は我慢するにしても、そい

「つあ、困ったな」

「だろ。まさか、鬼頭のシマ横切って、銭湯行くわけにも行かないしさ」

なんだか急に日常的なトーンを帯びてきた榎本と美佐恵の会話に、ジロウはふいにおかしさがこみ上げてきた。トイレだ、風呂だと、ひどく場違いな気がしたのだ。しかも、こわもての榎本が、そんな美佐恵のペースにすっぴん巻き込まれてもいる。

「困ったねえ……」

美佐恵は、そう言いながら、ジロウの方を見た。

そのあけすけな視線に、ちよつとたじろいで、ジロウは目をそらした。

三人が三人ともそんな姿勢のまま、しばらく沈黙がつづいた。

その沈黙を、美佐恵ののんびりした口調が破った。

「この子、かわいい顔してるねえ」

「なに言ってるんだ、おめえ」

さらに場違いな美佐恵の言葉にあきれたように、榎本が言った。

と、美佐恵は、急に何かを思いついたように語調を変えた。

「ねえ、こういうのはどう？　女装するの。そうすれば、お店の客に見られたってだいじょうぶだし、お風呂は、女に化けたまま、あたしのマンションに入り

来ればいいだろ」

「ええっ？」

早口で言った美佐恵の言葉に、榎本はすつとんきよ
うな声をあげた。

「この子の顔つき体つきだったら、女の服着て化粧す
れば、女に見えると思うよ。うまく振る舞えば、絶対
に正体ばれないんじゃないかい」

「お前、それは……」

今度は、榎本が絶句する番だった。

ジロウの方は、相変わらず、まるで自分とは関係のない世界で話が進んでいるように感じていた。

「ねえ、ちよつと試してみようよ。前の子が使ってた服が残ってるしさ」

言うが早いか、椅子から立った美佐恵は、ジロウの革ジャンの袖を引っ張って階段の方へ行こうとした。

その時になって、やっとジロウは、その話題の中心

が自分なのだとということに気がついた。

「あ、姐あねさん、そんな……。勘弁してくださいよ」

「ほらね、声もけっこう高いみたいだしさ」

美佐恵が言った。

あ然としたままの榎本に下で待っているように言い、美佐恵は、尻込みするジロウを押し切って二階へと上げた。

「男だろ。べつに、命とろうってんじゃないんだから
さ」

まるで男のような口調で言いながら、美佐恵は、下の店から持ってきたおしぼりを差し出した。

「そこ座って。まず顔拭きな」

そして、部屋の隅にある鏡台から化粧品の類をあれこれ取り出し、畳の上に並べはじめた。

ジロウは、しかたなく、畳に座ると、革ジャンを脱

ぎ、言われたとおり、顔を拭いた。

と、ジロウの前に座った美佐恵は、顔を寄せ、しげしげとジロウを見た。

「眉剃ってても、全然凄みがないね。あとで描くのにちょうどいいけど。それに、ヒゲも薄そうだし」

ジロウは、ひどく侮辱された気がしたが、ちよつとふてくされた表情をしただけで、なにも言わなかった。

この年頃の女はどうも苦手だし、それにだいいち――

—ジロウの価値観からすれば——、兄貴分である榎本の女に、言葉を返すなどできないことだった。

と、美佐恵は、肌色のクリームの入った瓶を開け、それを指先にとると、ジロウの顔に塗ろうとした。

「こら、じつとしてな」

顔をそむけかけたジロウに、すかさず美佐恵は言った。

その言葉に観念したジロウは、どうとでもしろとい

う心境で、ふたたび美佐恵に顔を向けた。

（さつき、鬼頭のブタ野郎を撃つてきた俺が、なんで、こんなことしてなきやなんねえんだ。）

そうは思ったが、それこそ、鬼頭組のシマの真ん中で、ひとり外に逃げ出すわけにもいかないだろう。

「肌もきれいだねえ。ファンデののりのいいこと」

そのクリームを塗り終わった美佐恵はそう言うと、今度は、先にスポンジのついた小筆のようなものと、

パレットのような化粧品を取り上げた。

その様子は、どこか浮き浮きとして、楽しそうですらある。

どうすることもできないジロウは、美佐恵が自分の顔にしていることを気にしないことにし、目だけを動かし部屋の中を観察した。

部屋は、こんな築何十年という感じのスナックにはいかにもありそうな、住み込み従業員用のものらしか

った。六畳一間に押入があり、それに、階段からつづく板の間がすこし。そこに、ハンガースタンドが置かれ、女物の服が数着掛けられている。前にいた住人が残していったのか、それとも美佐恵のものなのか、さっきの鏡台と整理箆筥がひとつ置かれているが、その他にはなにもない殺風景な部屋である。

話の成り行きからすれば、自分はここにしばらく潜んでいることになるのだらう。しかも……。

部屋を観察することで、あれこれの動揺からやっと落ち着き、ジロウが自らの境遇について思い至った頃、美佐恵が言った。

「ちよつと上と下の唇を合わせてみて」

口紅を塗り終わったところらしい。

言われたとおりとすると、たしかに、唇に、ぬるつとした感触があった。

「さあ、できた。服脱いで」

「えっ」

立ち上がった美佐恵を見上げて、我に返ったジロウが聞き返すと、美佐恵は言った。

「早くしな。あの人だって、前に車停めたまま、いつまでもここに居るわけにいかないだろ」

美佐恵は榎本のことを言っているのだった。たしかに、今、こんな場所に横手組の幹部がいるのは、危険なことにはちがいない。とにかく、早く「こと」を終

わらせ、榎本だけでもここを離れた方がいい。ジロウは、そう思い、しぶしぶ立ち上がった。

「せつかくきれいにお化粧したんだから、触らないように気をつけてよ」

ジロウがトレーナーとアンダーシャツをいっしよに脱ごうとしたとき、美佐恵はそう言った。

「あのう、ズボンもですか」

「そう」

美佐恵が後ろを向いて箆笥の引き出しを開けたので、ためらっていたジロウは、ズボンをおろし、靴下も脱いだ。

と、振り返った美佐恵が手にした白い布きれをさしだした。

「これを着けて」

「……えっ」

ここまでしぶしぶながら美佐恵の言うことをきいて

きたジロウだったが、それにはさすがに抵抗の色を示した。ブラジャーだったのだ。

「それは……」

「だって、胸がなきや服も着れないだろ。バッドがな
いけど、とりあえずパンストかなんか丸めてつめとけ
ばいい」

「……でも」

トランクスひとつの姿で突っ立ったジロウが、ぶ然

とした表情のまま、その白い下着を見てみると、美佐恵は、あせった感じで言った。

「時間がないんだよ。いいわ、あたしがつけたげるから。後ろを向きな」

さっきのジロウの反応から、榎本のことを気にしているそぶりをすることが、いちばん有効だと思ったのだらう。

案の定、その言葉に、ジロウはふてくされた表情の

まま、背を向けた。

美佐恵は、ブラジャーをジロウの体の前にまわし、ストラップを両腕に通して、背中のホックをとめた。

そして、ふたたびジロウの向きを変えさせると、カッ
プの中に、ストッキングを何本かずつ丸めて押し込んだ。
だ。

その胸に顔を寄せて、形を整えている美佐恵に対して、ジロウはただ体を硬くして、されるままにしてい

た。

榎本のことでもあったが、それよりもじつは、突然、自分でも思ってもみないことが起こっていたのだ。ジロウのトランクスの中では、その若い肉体の一部が、急速に形を変え、むくむくと首をもたげていた。

(……な、なんで、こんなもんつけて興奮してんだ、俺は)

ジロウはそう思いながら、美佐恵の目を気にして、

両掌をトランクスの前で交差させた。美佐恵にそれを気づかれることは、なにより恥ずかしい。

しかし、不思議なことに、その「恥ずかしい」という感情が、かえってジロウを興奮させていくようでもあった。

(えっ、なんだよお。俺は変態か……)

「なんだか、このままじゃへんだね。やっぱりそれも替えな」

そんなジロウの動揺がわかっていて、また何かをさしだしたか、美佐恵はそう言いながら、また何かをさしだした。

そのピンク色のショーツを、思わずジロウは受け取っていた。

(……なにやってんだ、俺は)

そう思ったが、美佐恵がまた服を選ぶためにハンガースタンドの方を向いたので、ジロウは急いでトランクスを脱ぎ、そのショーツにはきかえた。動転してい

るジロウには、だぶつとしているトランクスより、ぴ
つちりとしたそのショーツの方が、前を押さえつけ、
立っていることを目立たなくできるような気がしたの
だ。

しかし、もちろんそれは大きなまちがいだった。若
いジロウのものは、ショーツの前を押し上げ、それば
かりか、頭の部分が上からからはみ出してしまふほど
になってしまった。

今度はそのことにおたおたしたジロウは、「これがいいわね」と美佐恵が手に取ったワンピースを、まるで奪い取るようにして、頭からかぶった。

これで、なんとか前を隠せるだろう。

「そのスポーツ刈りもどうにかしなきゃね。前いた子のウイッグがあるから」

美佐恵は、さらに浮き浮きした様子で、押入から円筒形の箱を取り出した。

「えーっ！」

榎本は、大声を上げてカウンターチェアから飛び降りた。

店の外に声が漏れるのは危険なことだったが、そんなことに気がまわらないほど驚きが大きかったのだらう。

「ね、言ったとおりだろ」

ジロウの横に立った美佐恵は、自慢げに言った。

「……うそ、だろ」

ジロウから目を離さず——離せず——、榎本は呆然とつぶやいた。

「じつは、あたしもちよつと驚いてんだ。思った以上だったからね。どう見たって、女の子にしか見えないだろ。それも、そうとう上玉」

「……あ、ああ」

榎本の視線が恥ずかしく、でも先刻からつづいてい
る——「恥ずかしい」と思えば思うほど増してくる——
——高ぶりもあり、ジロウは視線を泳がせた。

「あんたも見たいだろ。こっちおいでよ」

美佐恵は、そんなジロウを店の隅のトイレの前まで
引っ張って行って、その合板づくりのドアを開けた。
ドアの内側が、鏡張りになっているのだ。

「……え！」

ジロウはその鏡を見て、息を飲んだ。

薄暗い室内にトイレの明かりを浴びて浮き出したその姿は――

細い肩に柔らかく掛かる茶色い髪が、白くきめ細かい肌と印象的な目鼻立ちに、不思議なくらいマッチしていた。

パールピンクの口紅が塗られた唇は、驚いたようにぽかんと開いていたが、そのことが逆に、顔全体を無

邪気なかわいらしさに見せていた。

淡いピンクのワンピースの胸の膨らみに不安げに添えられた手も、清楚な感じに見えたし、細いウエストが、その清楚さをさらに倍加していた。

ふわりとふくらんだフレアスカートから伸びた、店のサンダル履きの脚も細く、どこか頼りなげに立っているその角度が、若い女性としてのたまらない魅力を醸し出していた。

全身からは、こんな薄暗いすすけたスナックにいることが信じられないような上品ささえ漂っていた。

「ね、かわいいだろ」

後ろに立って、驚くジロウの様子をおもしろそうに見ていた美佐恵は、そう言った後、榎本の方に向き直ってつぶけた。

「これなら、人に見られてもぜったいにばれないだろ。それどころか、男が黙っちゃいないよ。できたら、こ

の店手伝ってもらいたいくらい。そうだ、源氏名もつけなきやね。ジロウ、ジロウ、……ジュリ……樹里ちやんていうのはどう……」

そんなふうにはしやいでしやべる美佐恵の声も、今のジロウの耳には届いていなかった。

ジロウは、鏡の中の「女」の姿を、さらに食い入るようにつめていた。

けつきよく、この夜、ジロウは二度変身したのだ。一度目は冷徹なスナイパーに。そして二度目は、美しい女に。

ジロウの今後の人生を決定的に変えていくのは、むしろ二度目の変身であることに、当然ながら、この時のジロウはまだ気づいていない。

act.2 Honky-tonk Girl

「あんだ、いつまで寝てんだい」

突然、頭上から降り注いだ女の声に、ジロウはびくりと体をふるわせて目を覚まし、そのあと、眉間にし

わを寄せるようにして、女の顔を見上げた。

びっくりとしたのは、昨夜からつづいている興奮と緊張のせい。そして、女をにらみつけるような表情をしてしまったのは、自分が今寝ている場所とその女の正体が、とっさにはわからなかったせいだった。

「……あつ、姐さん」

見下ろしている女が、榎本の情婦、美佐恵であることに気づいたジロウは、はっとしたように布団から飛

び出て、正座し、拳にした手を畳の上についた。

「おはようございやす」

横手組の構成員の中でも、ジロウは下っ端。しかも、組づきではなく、幹部である榎本の「預かり」という身分だ。つまり、ジロウにとって榎本は、親分と並ぶ直系の兄貴分である。そして美佐恵は、その榎本の女なのだ。あだやおろそかに扱ってはならぬ存在だった。

そんなジロウを見て、美佐恵は苦笑した。

「よしとくれよ、そんな力みかえった挨拶。こっちが疲れちゃうじゃないか。あんただって、いつもそんなふうにしてたら、疲れるだろ」

「いえ、姐さん、仁義通すのが、極道の道ですから。それに、こんな厄介者が、突然転がり込んで、姐さんにたいへんな迷惑かけてんでさ。これくらい、させてやってください」

ジロウの言葉に、美佐恵はため息をついた。

「ふーっ、まったく。あの人の馬鹿なところばっかり真似て。やんなつちやうよ。やめな、そんなの。そりゃ、あの人は、私のいい人だけど、私は、組とは何の関係もないんだからね。それに、あんた、今日からは女の子にならなきゃなんないんだよ。若い娘が、そんな肩怒らせて凄みきかせて、どうすんだい」

「あ、いや……」

ジロウは、美佐恵の言葉に、昨夜、このスナックに

来てからのことをまざまざと思い出し、気まずそうな顔をした。

「女物の服、家から、若めのやつを持ってきたよ。ここにあるだけじゃ足りないだろうからね。ちよつと流行遅れだけど、がまんしな。それから、来る途中、新しい下着とか、ブラに入れるパッドとかも買ってきたから」

美佐恵は、そう言って、手に持った三つほどの紙袋

を箆笥の前に置いた。

それを見たジロウは、さらに気まずそうに、美佐恵を見上げた。

「姐さん、そのことなんです、やっぱり、俺には、女のふりするなんて無理だと思っうんでさ。勘弁してくださいよ」

「なに言っただい。あんなだっつて、ゆうべ、鏡の前で驚いてたじゃないか。あんな、女の子にしか見えな

かっただろ。それも、そうとうな美人」

「いや、でも……」

「あの人だって、あんたの女装姿見て、納得して、『お前に任せる』って帰ってったんだからね」

「……」

心酔する榎本のことを持ち出されれば、ジロウは弱い。思わず、うなずくように畳に視線を落とした。それをすかさず見て取った美佐恵は、重ねるようにつづ

けた。

「私に任せるってことは、つまり、私の言うことは、あの人の言葉ってことだろ」

「……へえ、……」

ジロウは、正座の膝に両手を置き、肩をすぼめるようにした。

それを見て、美佐恵はちよつとほくそ笑み、さらにつづけた。

「ここにいる限りは、私の言うこときいてもらおうよ。さ、ゆうべとおんなじように、そんなもの脱いで、さつさと着替えとくれ」

「……え？」

布団を手早くたたみながら言った美佐恵の言葉に、ジロウは、本来ならそんなことは自分がしなければならぬものも忘れて、また、美佐恵を見上げた。

「なんだい？」

「今から……ですか？」

「さつきも言つたろ。今日からは、あんた、女の子として暮らしてもらうんだからね」

「あの……、お言葉を返すようですが、そりや、下の店に降りたり、外へ出る時はまずいでしようが、この部屋ん中にいるうちは、べつに男のかつこのままでもいいんじやねえですか」

ジロウが言うと、布団をしまうために押入をあけた

ところだった美佐恵は、振り向き、先刻置いた紙袋の
ひとつから、何かを取り出した。

「これ見てごらんよ」

ジロウの前に放り出されたのは、社会面を表にした
まま、たたみ込んだ新聞だった。

ジロウは、はっとした表情に変わり、その新聞を
驚掴わしづかみにすると記事に目を走らせた。

片隅に、三段ほどの記事があった。

『暴力団組長、撃たれ重体』『犯人は対抗する組織の組員か』『抗争拡大のおそれ』

そんな見出しにつづく記事を、眉間にしわを寄せて読んでいると、美佐恵が言った。

「鬼頭は、病院にかつぎ込まれて、意識不明のままらしいよ」

記事によれば、鬼頭の体には、二発の弾が当たったらしい。一発は、心臓脇を通り、背中側の肋骨にめり

込んでとまり、もう一発は、左頭部をかすめて、頭蓋骨に傷を与えたとある。出血と脳の損傷で、危篤状態がつづいているという。ジロウは三発撃ったはずだから、うち一発は、はずれたのだろう。

「……ち、悪運の強いやつだ」

鬼頭を完全にしとめられなかった自分の射撃の腕への負け惜しみもあって、ジロウは、憎々しげに言った。

「鬼頭組の奴ら、いきり立って、あんたのこと探して

るよ。ゆうべのうちから、街のあちこちで発砲事件が
起こってるらしい」

まるで世間話でもするようにながら、布団
をしまうと、美佐恵はジロウの方に向き直った。

「もし、組長の狙撃犯が、ここに隠れてるって、鬼頭
の奴らに知られてごらん。奴ら、大勢で踏み込んでく
るよ。そんなことなかったら、それこそ、こっちは大
迷惑だからね」

新聞を置いたジロウは、ふたたび美佐恵を見上げた。

「それにしても、姐さん、この部屋にいるかぎりは：
…」

言いかけたジロウの言葉を遮るように、窓のそばに
立った美佐恵が手招きした。

「そうはいかないんだ。ちよつと、こつち来てごらん」
ジロウが立ち上がって近づくと、美佐恵は、用心深
げに窓のカーテンの端を持ち上げた。

「のぞいてごらん」

言われるままに、ジロウは、カーテン越しに外を見た。

ジロウの目にまず入ったのは、その窓から出入りできるところになった二畳ほどの広さの物干し台だった。どうやら、裏側に張り出している一階の屋根の上に、造りつけられているらしい。

そして、目を上げると、その物干し台の角の部分か

ら、五・六メートル先という近さで、裏の一角をこちらに向けた三階建ての古いビルが建っていた。

ビルの窓のほとんどはブラインドがおりていて中は見えなかったが、それでも、ブラインドのあがったいくつかの窓から、黒っぽいスーツの男たちが動いているのがちらちら見えた。

「鬼頭の組事務所さ」

「……え！」

ジロウはあわててカーテンを元に戻すと、驚いた表情のまま、美佐恵の顔を見た。

位置関係から言って、このスナックが鬼頭組のすぐそばだということはわかっていたのだが、まさか、背中合わせに地所を接しているとは思っていなかったのだ。

「まったく、あの人は、なんでよりもよって、あんなをこんなとこに連れてきたのか、気が知れないよ」

美佐恵は、ちよつとため息混じりにそう言った。

その言葉に、ジロウも思わずうなずいていた。

榎本がなにを考えてこんなことをしたのか、ジロウにもわからなかった。昨夜、榎本が冗談めかして言った「灯台もと暗し」などということが理由だとは、とうてい思えない。

ただ、よく考えてみれば、思い当たるふしはないでもない。

昨夜、榎本は、ジロウの所在を「組のものにも明かさなかつもりだ」と言っていた。それがなにを意図したのかは、もうひとつ飲み込めなかったが、確かにここなら——鬼頭組に見つかる危険は大でも——、横手組の仲間たちに見られる可能性はないだろう。殴り込みでもないかぎり、抗争相手の本拠のこんな近くまで組の連中がやってくるとは考えられないからだ。

ジロウが、そんなことを考えていると、美佐恵は、
「ね、わかっただろ」と言った。

「三階建てのあのビルから、この部屋は丸見えなんだ。
あんたがここで暮らす以上、時には部屋に風も通さな
きやいけないし、布団とかも、この物干しに干さなき
やいけないだろ。ずっと、カーテン引きっぱなしって
わけにやいかないんだ。それに、ふだんカーテンなん
かしてなかったこの部屋が、四六時中締め切られてた

ら、逆に、ここが怪しいって言ってるようなもんじゃないか」

美佐恵は、カーテンの外をあごの先で指し示すようなそぶりと言った。

「そりゃ、あんたはサンピンだし、鬼頭の連中全部に面が割れてるわけでもないだろう。たとえ見られても、組長を撃った奴だと、すぐにはばれないかもしれない。けど、そのままじゃ、あんた、いかにも組のもんって

感じだろ。奴らすぐに、この部屋におかしな奴がいると気づく。それが、横手の組員だってわかってごらん。それだけで、奴ら大挙して押し掛けてくるよ」

ジロウは突っ立ったまま、美佐恵から目をそらせて考え込んでいた。

「それに、あんた。あんたを狙ってるのは鬼頭の連中だけじゃないだろ。警察だって、すぐに犯人は誰か目星をつけるはずだ。このあたりは、ふだんでも刑事が

張ってんだ。組どうしの抗争となりや、その数はもつと増える。デカにだって、いつ目撃されるか、わかったもんじゃないじゃないじゃないか」

「しかし、とはいっても、ずっと女の格好なんて……」
ジロウがやつと口を挟むと、美佐恵は腕組みして、ジロウを見返した。

「女の腐ったのみたく、いつまでもつべこべ言ってるじゃないよ。ゆうべやってみたように、あんたは女に

化けてりや絶対に正体を気づかれない。ここを開けといたって、だいじよぶさ。それに、どうせ、そのままのかつこじや、外には出られないんだ。ふだんから女装に慣れて、女っぽい仕草とかを身につけといた方がいいだろ。どうすんだい。私の言うことを聞くのかい、それとも、そのままのかつこしてて、ズドンと一発やられるのかい」

ジロウには他に選択肢はないのだという言い方で、

美佐恵は言い放った。

どこか凄みさえ感じさせるその口調に、ジロウは気
圧され、ぽかんと、その顔を見返した。「さすがは、
兄貴の選んだ女だぜ」と、妙な感心もした。

そして、美佐恵の言葉に対抗するため、せいぜい粹
がった極道風の言い方で答えた。

「わかりやした、姐さん」

着替えて、美佐恵に化粧されている間、ジロウは、榎本のことを考えていた。

榎本は、なぜ、ジロウの所在を組の者に秘密にし、自分の胸に秘めようとしているのだろうか。

もちろん、榎本が言っていたように、なによりジロウの身を案じてのことではあるにしても、どうもそれだけでは、もつと別な思惑があるような気がする。

たしか、榎本は、「お前を極道の道からはずれた政

治の道具にはしたくねえ」と言ったはずだ。ジロウの頭では、その意味はもうひとつ理解できなかつたが、もしかすると榎本の不可解な行動は、組の上層部の事情と関係があるのかも知れない。たとえば、榎本と若頭との間の微妙な力関係とかに……。

榎本と若頭の坂木は、ほぼ同じ頃、「親」である横手組長から杯を受けた、いわば、最も近い「兄弟」という関係である。ところが、榎本と坂木には、どこか

そりが合わないところがある。

なにより、二人の、極道としての生き方に違いがあるからだ。

ひとことで言ってしまうえば、榎本は古いタイプのやくざ、坂木の方は、今ふうの経済やくざということになる。

たとえば、地元企業などに取り入り、あるいは脅し、金を引き出してくるのは坂木だったし、また、シノギ

と呼ばれる収入の道、つまり、風俗店の経営や覚醒剤などの売買、地上げなどを取り仕切っているのも坂木である。そのぶん、個人的にも羽振りがいい。

それに比べ、榎本の方は、そういう仕事に必要以上に手を染めたがらない。組内外ににらみを利かせ、組の若い者どうしのいざこざや、鬼頭組との小競り合い、あるいは、組のシマで何か問題が起きた時など、そこに出て行って、争いをおさめてくるという、あまり利

につながらない役割を担っていた。暴走族だったジロウが、はじめてこの街に来て地元のチンピラと喧嘩をした時、そこに割って入ったのも、けつきよくは、それが榎本の「役目」だったからだ。いわば、昔ながらの任侠道そのままに生きているというわけである。

そして、そんな生き方を貫いているという点で、榎本は組員たちからは一目おかれるている存在なのだった。

しかし、現在のやくざは、そんな美意識だけでやっていけないのだろう。

昨年、古くからの幹部が年老いたこともあり、代替わりがあったとき、横手組長が若頭として抜擢したのは、榎本ではなく、坂木だった。

当然のことながら、ジロウはそれを不満に思っている。

いくら時代が変わったと言え、極道は金のために生

きているのではない。金を稼ぐことしか頭のない坂木などより、榎本の方が、本来、ずっと若頭にふさわしいのだ。シノギの額だけで坂木を抜擢した組長も、目が曇っているとしか思えなかった。

もちろん、やくざの上下関係を重んじる榎本自身が、組長の決定に不満を漏らしたことなどないが、自分の置かれている今の立場を面白く思っていないことはたしかだろう。

そして、もしかしたら、今度のことをきっかけに、榎本は、坂木との立場を逆転しようとしているのかも知れないのだ。ジロウには、なんだかそんな気がした。

今や鬼頭組との抗争の最大の焦点となってしまったジロウを、ひそかに手の内に握っていることで、榎本は、何らかの形で坂木の裏をかこうとしているのかも知れなかった。

だとしたら、今の自分という存在は、榎本にとって

も重要なカードなのだ。細かい理屈はよくわからないが、榎本が自分を隠そうとしている以上、自分は首尾よく隠れ通さなければならぬ。

それが、榎本に対する忠義ということだろう。

ジロウが、けっして得意ではない論理的思考というものをして、やっとそこまでたどり着いたとき、マスカラの筆を片手にジロウの顔をのぞき込んでいた美佐

恵が言った。

「あんたって、ほんとに化粧映えする顔だねえ。まつげも長いし」

ぼんやりとその言葉を聞いたジロウは、目を上げ、なんだかちよつと重たくなつた感じのまつげをしばたかせるようにして、美佐恵の顔を見返した。

「あ、そうそう。そんな表情が、女の子らしくてかわいいよ。化粧して凄みきかせてたって、なんにもなん

ないからね」

美佐恵のからかうような口調に、ジロウはふたたび眉間にしわを寄せた。

それにしても、警察や組から追われる狙撃犯をかくまい、事実上すでに、やくざの抗争のまっただ中に巻き込まれているというのに、この女の、まるで、それを楽しんででもいるかのような、妙な落ち着きぶりはなんなのだろう。

つまるるところ、それは、よほど榎本のことを信頼しているからに違いない。

「あの人の気が知れないよ」などと言いながらも、けつきよく美佐恵は、榎本の決めたことにひとつの疑問も挟まず、——少々突飛すぎる方法ではあるが——喜々としてその意に応えようとしている。

それは、榎本にしても、同じだろう。

あれこれ思惑はあるにせよ、わざわざ鬼頭組の間近

に隠すという危険を冒してまで、ジロウをここに置いておこうとするのは、この女が、誰より信用できる人間であると思っっているからに他ならなかった。

どうやら、榎本と美佐恵の間柄は、最初ジロウが思っていた、極道とその情婦という以上の深い関係で結ばれたものようだ。

だとすれば、美佐恵の言った「私の言うことは、あの人の言葉」というのも、まんざら誇張ではあるまい。

やっぱり俺は、この女の言うとおりにしているしかないようだな。

ジロウは、渋々ながらそう結論し、もう考えることをやめた。

「さあ、絶世の美女のいっちよあがりだよ」

美佐恵は、そう言いながら、ジロウにロングヘアのウィッグをかぶせると、後ろに回り、その髪を軽くブラッシングしはじめた。

向かい合って化粧していた美佐恵がどいたおかげで、目の前の鏡台に、自分の姿が映った。そこには、白いニットのワンピース姿で小さなスツールに腰掛け、髪を整えてもらっている「女」がいた。

まだカーテンが引かれているとはいえ、今、この部屋は、昨夜の一階の薄明かりよりずっと明るい。それなのに、鏡の中の「女」には、一分のあらも見えなかった。

いや、逆に、明るいぶん、その美しさがさらにきわ
だったと言っている。全体から醸し出される、どこか
頼りなげで清楚な雰囲気は変わらなかつたが、目鼻立
ちは、昨夜よりずっとくつきりとし、かわいらしさが
増したような気がする。

美佐恵は、昨日より化粧に時間をかけていたようだ
から、もしかすると、目のあたりの化粧の手が込んで
いて、よけいにそう見えるのかも知れない。

「いつまでも私がしたげるわけにもいかないんだから、化粧の仕方くらい、早いとこ覚えなよ」

ブラシを置いて、満足げに鏡を見る美佐恵の目を気にしながらも、ジロウは、ちよつとうつむき加減にマスカラの塗られたまつげをしばたかせるようにしてみた。さつき、美佐恵に「かわいい」と言われた表情を見てみたくなったのだ。

たしかに美佐恵の言葉は嘘ではなかった。どこか恥

ずかしげにこちらをのぞき込んでくる鏡の中の顔は、初々しいかわいらしさに満ちていた。ジロウの実年齢は、今二十歳だが、その顔は、ミドルテイーンの少女のようですらあった。

そんなふうはこちらを見つめてくる「美少女」の視線に、なぜか照れて、そして、自分自身の視線に照れているという馬鹿馬鹿しさに、さらに照れて、ジロウは、肩をすぼめるようにした。

と、膝の上に手を置いた両腕の間隔が自然にせばまった。

そして、そのせいで、ふたつの腕に挟まれた「胸」が、その分の弾力を二の腕あたりに返してきた。それは、ワンピースの下のブラジャーに入れたシリコンラバーのパッドなのだが、ジロウは、その感触にさらにどぎまぎとし、ひとり頬を赤らめた。

「ねえ、あんた、これ、処分しちゃうよ」

美佐恵の声に我に返り、振り返ると、いつの間にか、美佐恵はジロウが脱いだトランクスやズボンを丸めて、紙袋につめようとしていた。

「あ、姐さん、それは……」

「さつきも言ったように、あんたは、今日から女の子として暮らすの。こんなのあったって、じやまなだけだろ」

「……」

おそらく美佐恵は、ジロウが女装をいやがって、ここから逃げ出してしまふことを警戒しているのだ。それで、先手を打って、男物の服を始末してしまおうと思つたに違いない。

それはわかつたが、先刻からのどぎまぎがつづいてゐるジロウは、それに反論する間を失つた。

トランクスにズボン、トレーナーを袋につめると、立ち上がった美佐恵は、壁に掛けてあつた革ジャンを

とろうとした。

「これも捨てた方がいいね。高そうだからもつたいないけど、いかにも男物だし、それに、あんだ、ゆうべ、鬼頭を撃ったとき、これ着てたんだろ。この服から足がつくかも知れないからね」

そういいながら、革ジャンをハンガーからはずした美佐恵は、それを手に持って、ちよつといぶかしげな顔をした。

「……え？」

革ジャンの片方のポケットが妙に重かったのだ。

「……あ」

ジロウも、すぐにそのことに気づき、鏡台のズツールから立ち上がった。

「……あんだ、これ、始末しちまわなかったのかい？」

美佐恵は、そう言いながら、おそるおそるといふ表情で、ポケットから、その拳銃をつまみ出した。

「なんで、昨日のうちに、海かなんかに捨てとかないんだい」

「へえ、……なんせ、ゆうべはあせってたもんで……」
「バカだね、まったく。こんなの持ってちや、あぶないだろ」

「……」

たしかに美佐恵が言うとおり、犯行に使った「チャカ」を身近に置いておくのは危険だった。凶器が見つ

かれば、もう絶対に言い逃れはできない。

もつとも、よく考えてみれば、昨夜の時点では、ジロウは自首するつもりもあつたのだから、必ずしもミスを犯したというわけでもないのだが。

「でも、今となつてはもう、捨てにもいけないし。しようがない。ほとぼりが冷めるまで、この部屋に隠しとくしかないだろうね。鏡台の引き出しの奥にでも入れときな」

ジロウは、美佐恵からそのトカレフを受け取ると、言われたとおり、鏡台の引き出しの化粧品の中に隠した。

「まあ、あるならあるで、もしもの時は、役立つかも知れないし」

それを持ったときは多少怖そうにはしたものの、拳銃にもさほど動じる様子のない美佐恵に感心しながら、ジロウは、美佐恵にさらにもうひとつ厄介者を背

負わせてしまった気がして、素直にあやまった。

「すみません、姐さん」

と、美佐恵は、腰に手を当てるようにしてジロウを見返し、言った。

「あんたね、そんなきれいな娘が『姐さん』は、やっぱりおかしいだろ。あんたは女なんだから、もっと女らしいしやべり方するようにしな。まあ、人のことは言えないけどね」

「娘」とか「女」とか言われ、腹立たしいようなこそばゆいような気がしたが、最後につけ加えた美佐恵の言葉がおかしくて、ジロウはかすかに笑いながら聞き返した。

「でも、なんと呼べば……」

「そうだね、お客からはママって呼ばれてるから、それが、いちばん落ち着くね。それに、あんたに下の店で働いてもらう時には、私のこと、ママって呼んでも

らうことになるんだろうしさ」

「姐さ：：、：：ママ、いくらなんでもそりや：：」

「冗談だよ。人目を逃れて隠れてるあんたを、わざわざ人前にさらしてちゃ、意味ないしね。でも、もったいないよね、これだけの美人を」

ジロウの全身を、もう一度上から下まで眺めながら言った美佐恵の言葉は、言ったこととは裏腹に、まんなら冗談でもないように聞こえた。

その日は、そのあと、まだ開店前の階下で、美佐恵がつくってくれた焼きそばを昼食として食べ、それから、ジロウは二階の部屋で過ごし、美佐恵は開店の準備をした。

夕方頃、開店はしたものの、まだ客がやってこないらしい美佐恵が夕食をつくって上がってきた。

ジロウは、それをゆっくりと食べ、あとはまた、美

佐恵が店じまいする深夜まで、二階の部屋でひとりで
過ごした。

本来ならそのあと、美佐恵とともにマンションまで
行って入浴することになっていたが、まだ冬場でもあ
り、事件のあとの緊張がつづく夜の街には出ない方が
いいだろうという判断から、四・五日の間は、がまん
することになった。

美佐恵がマンションに帰ったあと、ジロウは、やは

り美佐恵が用意したネグリジエを——他に寝間着になるものもないので——渋々ながら着て、床についた。

翌日は、やはり昼すぎ頃、美佐恵がやってきて、前日と同じように一日が過ぎた。

そして、その次の日も同様に時間が過ぎていった。

そのころになると、ジロウはもう、そんな暮らしに辟易していた。

美佐恵には、鬼頭組に怪しまれないためにも、日中

はなるべく窓のカーテンを開けておくように言われたが、女の格好をしているところを他人に——なににより、鬼頭組の人間に——見られることは耐えられない気がして、ジロウは、ほとんどの間閉めていた。

閉め切った部屋で、外の情報といえ、美佐恵が持ってきてくれる新聞しかなく、それを隅から隅まで読む以外——ジロウは、このときはじめて新聞というものをまともに読んだ——、何もすることがなく過ぎし

ていると、息がつまる気がした。

組の仲間が鬼頭組との死闘を繰り広げているというのに——新聞によれば、この間、発砲事件がつづき、双方の組に何人かのけが人が出ていた——、なにもできないう自分が歯がゆい気がした。場所としても、また、意味の上からも、その抗争のさなかにいる自分が、こんな怠惰な日々を送っていていいものかと、情けなくも思えた。

あまりに手持ちぶさたで、他にやることがないので、ジロウはけつきよく、多くの時間を鏡の前で過ごすことになった。

たしかに、自分の変身ぶりだけは、何度見ても感心した。鏡の中の「女」の顔は、この部屋の中で、唯一、飽きることなく見ていられるものだったのだ。

ジロウが表情を変えるたび、その「女」は、じつにさまざまな魅力的な顔を見せてくれた。時には微笑み、

時には甘え、そして時には可愛らしくふくれて、ジロウを見つめてきた。

人にはけっして明かせないことだったが、正直なことを言えば、何度かジロウは、その「女」に欲情し、自分がその女を犯すところを想像しながら、オナニーした。そして、そのたび、鏡の中の初々しい「少女」は、切なそうに身もだえた。

四日目の朝、美佐恵がやってくるよりずいぶん早く目覚めてしまった——なにしろ、ここでは、以前よりずっとたくさんの睡眠時間がとれた——ジロウは、今日の新聞もまだなかったし、他にすることもないので、また、鏡の前に座った。

そして、昨夜寝る前に化粧を落としたその顔を見て、自分で化粧してみようかと考えた。

美佐恵もああ言っていたことではあるし、毎日、こ

んなことで、美佐恵の手を煩わせるのも申し訳ないよ
うな気がしたからだ。

それに、その魅力的な顔を、自分の手でつくり出し
てみたいという興味があつたこともたしかだつた。

階下の店のトイレに行つたジロウは、まず、その流
しで顔を洗つた。

ついでに、この間、入浴していなかつたこともあり、
スポーツ刈りの頭も洗つて部屋に戻ると、鏡の前に座

った。

この三日間、毎日化粧され、二日目からは美佐恵があれこれ教えるように説明しながらしてくれていたから、ジロウにもだいたいの手順は、わかった。

しかし、その作業は、美佐恵の手つきを見ていたとき感じていたほど、簡単なことではなかった。

下地をつくり、ファンデーションを塗るまではまだよかったが、シャドーやチーク、それに特にマスカラ

などは、ちよつと油断すると、濃くなりすぎたり、色が濁ったり、余分なところについてしまったりした。

そのたびにジロウは、美佐恵から教えてもらったクレンジングクリームで化粧を落とし、やり直した。一度は、その失敗が、もう收拾がつかなくなってしまうて、ふたたび階下で顔を洗って、最初からやり直すことになった。

鏡に顔を寄せ、集中してその作業をしていると、い

っしか、何もかも忘れて熱中していた。

最後の口紅に至っても、唇からちよつとはみ出したことが気に入らず、二度ほどやり直した結果、美佐恵がしてくれたのと同じ程度には、魅力的な女の顔をつくることができた。

じつはこれまでの人生で、ここまで熱中して何かをつくり出したことなどなかったジロウは、その結果に、ちよつと感動すら覚えていた。

それで、ウイッグをかぶったあと、その「作品」に昨日までにも増して熱心に、さまざまな表情をさせてみた。階段を上がってきた美佐恵の足音にも気づかないほど、ジロウは、そのことに熱中していた。

「あれっ、自分でやったんだね」

階段からつづく板の間のところ立ち、驚いたように言った美佐恵の言葉に、やっと我に返ったジロウは、恥ずかしそうにそちらを見上げた。

「……あ、ママ」

その仕草と表情に、美佐恵は、さらに意外そうな顔を
をした。

その日の夕方だった。

ジロウは、いつものように美佐恵がつくってくれた
夕食を食べていた。

ただ、昨日までと違ったのは、畳の上にきちんと正

座して食べていたことだ。昨日まではあぐらをかいたりしていたのだが、今日はいているミニスカートであぐらをかくのは、いかにもみっともない気がしたからだった。

ご飯と魚の煮付け、そしてサラダとみそ汁というその食事を終え、盆の上に茶碗と箸を置いたところで、ジロウはちよつと動きを止め、なにかを考えた。

下へ、食器を返しに行こうと思ったのだ。

いつもなら、食べ終えた夕食の食器は、夜、店を閉めた美佐恵が取りに来てくれるまで、このまま置いておくことになる。しかし、食事を作ってもらっている上に、それを下げることまで美佐恵にやらせているのは、なんだか、ひどく厚かましい気がしてきた。

ここ数日、様子をうかがっていたところによれば、下の店に最初の客がやってくるのは、七時を過ぎてからだ。いちおう、店そのものは、五時半の開店のよう

だが、たいてい、最初のうちは、美佐恵しかいない。今は、まだ六時前である。今なら、まだ、客に見られることもないだろう。

ジロウはそう考え、盆を持って立ち上がった。

「……ああ、今のところは何も起こってないから、心配することないよ」

階段を下りかけたところで、誰かと話している美佐恵の声が聞こえ、ジロウはびくりと立ち止まった。

「あの子も、おとなしく言うこときいてるし、もちろん、連中も感づいてないみたいだから」

どうやら美佐恵は、電話で話しているらしい。

その気配にとりあえず安心し、身をかがめ、一階をのぞき込むようにして、ジロウは階段を一步一步降りた。

「……この辺うろついてる奴らの顔見ると、連中、相当いらついでるみたいだけどね。それより、私が心

配なのは、あんたのことだよ。今も、マンションにいるんだろ。撃ったのが、あんたの舎弟のあの子だったこと、いずれわかるだろうから、いつ、奴らが襲撃してくるか、知れたもんじゃないだろ」

店には他に人がいないことを確認し、そして、美佐恵の電話の相手が榎本らしいことに安心して、ジロウは盆を持ってカウンターの中に入った。

「……もし、少しでも危なそうだったら、ホテルでも

どこでもいいから、安全なところに、ヤサかえとくれよ」
カウンターチェアに座って電話で話しながら、ジロウに気づいた美佐恵は、「そこに置いていけ」というように、目顔で、カウンター内の流しを示した。

「……、え、女のどこ？ ……ははは、なに言ってるんだい。あんたに私以外の女なんていないことは、私がいちばんよく知ってるよ」

ジロウは、流しの脇にその盆を置いて戻ろうとした

が、美佐恵の電話はまだつづきそうだったので、自分で洗って行こうと考えた。

「……えっ。馬鹿なことやってんじやないよ。私があるの子に手出すわけないだろ。なに妬いてんのよ。それに、今のあの子、なりは女の子そのものだから、そんなことしたら、まるでレズみたいだろ」

そう言って、いかにもおかしそうに、でも、どこか照れたようにこちらを見た美佐恵と目が合い、ジロウ

も、食器を洗いながら複雑な表情を返した。

美佐恵のことをそういう対象とは見ていなかったの
で、その会話が意外だったこと、そして、「レズみた
い」などと言われ、自分の方がその対象から外されて
しまったのにちよつと腹が立ったこと、にもかかわら
ず、「女の子そのもの」と言われたのを、必ずしもい
やがっていない自分を発見したこと、さらに、それに
も増して、あのこわもての榎本がやきもちを妬いてい

るらしいのがおかしかったこと、……そんなすべての
気持ちがない交ぜになっての、複雑な表情だった。

「……、ああ、そういうことだから、こっちのことは
心配しないでいいから。あんたの方こそ、気をつけて
よ」

ジロウが、ほぼ食器を洗い終わった頃、美佐恵は、
やっと電話を切った。

「兄貴……ですか？」

ジロウの言葉に、最前の会話を思い出したのだろう。美佐恵は、また照れたように「そうだよ」と答え、ジロウの手元を見ながら、話をそらせた。

「あんた、そういうこと、わりと慣れてるんだね」

「……あ、へい。ずっと、兄貴の世話をさせてもらってますから。夜食くらいは、俺が作ったりもしてましたし」

「あ、そうなんだ。それにしても、あんた、そのなり

で『へい』とか『俺』とか、やっぱり変だよ」

ジロウが最後の皿を拭き終わり、美佐恵がそう言った時だった。

唐突に、店の入口のカウベルがガラガラと鳴った。

その音に、美佐恵もジロウも、ぎくりとそちらを見、そのままの凍りついた。

「よお、ママ」

入ってきたのは、港灣労働者らしい作業服を着た三

人の男たちだった。

「……あ、ああ。いらっしやい。今日は、早いんだね」
美佐恵は、あわててカウンターチェアを降り、まるで、男たちの目からジロウを隠すともいうようにその前に立った。

「ああ、ブラジルの船が、予定より早く出たんでな」
もちろん、そんなことはなんの役にも立たず、男たちは、なにも気にしないように美佐恵の脇をすり抜け、

中に進んできた。

突然現れた男たちに、ジロウはうろたえたが、けっきよく、カウンターの中では身を隠すこともできず、立ちつくしていた。

と、最初に入ってきた男が、素っ頓狂な声を上げた。

「あれーっ」

ジロウの姿を見つけたのだ。他の二人も、その声に、ジロウの方を見た。

「……新しい子、入ったんだ」

皿とふきんを持ったままのジロウの姿に、男たちは、
そう勘違いしたようだ。

その視線に、ジロウは、皿を置くこともせず、身を
固くしてうつむいた。

「……え、ええ」

美佐恵も、とつさのことで、機転が利かず、そう答
えていた。

「……へえ、そうなんだ」

男たちは、うつむくジロウの顔をのぞき込むようにしながら、カウンターチェアに腰掛けた。

男たちのあけすけな視線に、ジロウはさらにうつむくようにして、もう拭き終わった皿を、また拭くふりをした。

「『みなと』も、ママが年とってって、いつの間にか消える運命かと思ってたけど、こりや、起死回生の逆

「転ホームランってやつだ」

「……な、なに言ってるのよ。失礼しちゃうわね。どうせ、私やばばあですよ」

美佐恵は、体勢を立て直すようにそう言いながら、カウンターのの中に入ってきた。

と、別の男が言葉を継いだ。

「いやいや、ママもまだまだ色っぽいよ。けどさ、ママの魅力は、奥が深すぎて、やっぱ、中年にしかわ

「かないから」

「なによ、それ。フオローにもなんにもなっていないわよ」

美佐恵は、必死で平静を取り繕っている。

「そうじゃなくてさ、これで、この店も、また若い客が増えるなと思って。ママの経営手腕をほめてんじやない」

「けつきよく、フオローんなってない」

もうひとりの客が混ぜっ返した。

「ふうん：：それにしても、かわいいなあ」

ジロウの真ん前に座った客が、さらに顔をのぞき込むようにして言ったので、ジロウは、うつむいたままで、ちよつとだけ目を上げ、まつげをしばたかせた。

「わお。：：すげえ」

男は、ちよつとのけぞるような、オーバーな格好をしてみせた。

それで、ジロウは、自分が最も魅力的に見える表情を、思わずしていたことに気づいた。

「……ほんと、美人だなあ」

他の男たちも、あらためてジロウの方を見て、つぶやいている。

「ねえ、なんて名前なの？」

男のひとりが身を乗り出すようにきいたので、困ったジロウは、助けを求めるように美佐恵の方を見た。

「……じゅ、樹里ちゃんて、いうの」

とっさに美佐恵は、最初の晩に冗談で言っていた「源氏名」を口にしていた。

「樹里ちゃんか。名前もかわいいなあ」

三人の視線に、ジロウは仕方なく、ちよつと会釈するようにした。

「さあさ、あんたたち、若い子ばかりちやほやしてないで。なんにすんのよ。水割りでいいの？」

「……ああ、とりあえず」

その視線からジロウを救い出すために、おしぼりを差し出しながら言った美佐恵の言葉にも気もそぞろと
いう感じで、男たちは、ジロウの方を見たままに答えた。

美佐恵は、ちよつとため息をついたあと、グラスを並べ、立ちつくしているジロウをなんとか助けようとして言った。

「……樹里ちゃん、冷蔵庫から、氷出して」

「……あ、はい」

ジロウも、とにかく男たちの視線から逃れたくて、小さな声で答えると、あわてて後ろを向き、冷蔵庫を開けた。

「……俺、明日から、毎晩、ここへ来そう」

ジロウの後ろ姿を、まだ見つめながら、ひとりの男が言ったので、あとの二人もうなずいた。

これで、ジロウは、いよいよ逃げるに逃げられなくなり、完全に、『スナックみなと』に新しく入った女の子」になってしまった。

そのあと、酒の入った男たちは、ますますジロウに興味を示し、あれこれ話しかけてきた。

「樹里ちゃん、いくつなの？」

「生まれは？」

「彼氏いないの？」

そのたびに、ジロウは困った顔で美佐恵を見、美佐恵が適当に答えるという会話がつづいた。

「樹里ちゃんて、今どきの子には珍しく、おとなしいんだね」

男のひとりがそう言ったので、美佐恵が冗談で受け
た。

「そうだよ。まだ田舎から出てきたばっかりのバージ

ンなんだからね。あんまりいじめないでおくれよ」

「そうか、そのバージンを、やり手ばばあがだまして連れてきたってわけだ。樹里ちゃん、気をつけた方がいいぜ。このママ、なにさせるかわかったもんじゃないから」

「まあ、失礼なこと言わないでよ」

ジロウは、ただ困ったように時折ほほえみ、見よう見まねでつまみを盛ったりしていただけなのに、それ

だけで、うらぶれた酒場は華やいだ雰囲気になっていた。
った。

その男たちは、それからそこに居座り、さらにそこに新たな客が二人ほど加わり——その男たちも、入ってくるなり、おおむね先の男たちと同じような反応をした——、もっぱら「樹里ちゃん」の話題で、会話が進んだ。

二・三時間が経過した頃になると、ジロウの微笑み

からも次第にこわばった部分が消え、男であることが悟られないように小さな声ではあったが、「はい」とか「いいえ」とかだけは会話するようになっていた。そして、その答えに、自然に、肩をすくめたり、首を傾げたりといった女っぽい仕草が加わっていった。おそらくは、昼間、鏡の前で表情をつくってみていたことが役だったのだろう。

さらに言うなら、最初はあれだけ女装をいやがって

いたジロウがそんなふうに来たのは、ジロウの気持ちの中で、そのことを、どこか快く感じはじめている部分があったからに他ならない。

家族から疎んじられ、世の中から疎まれてきたジロウのこれまでの人生の中には、こんなにも人からちやほやされ、自分が話題の中心になったことなど、一度もなかったのだから。

夜も更け、そんなふうには、ジロウ自身もその場の雰
囲気になんとかなじんできた頃だった。

ふたたびドアのカウベルが鳴り、もうひとり、客が
入ってきた。

ジロウはすかさずそちらを見たが、ただでさえ薄暗
い店内の照明は、入口に立つその長身の男の顔には届
かず、最初は、どんな人物なのかはつきりとわからな
かった。

しかし、ゆつくりとカウンターの明かりに入ってきたそのタートルネックのセーターとカーキ色のジャケットの男の顔に、ジロウは息を呑むことになった。

体全体が緊張し、カウンターに隠れたミニスカート
の脚が、自然にがくがくとふるえた。その緊張は、先
刻、はじめての客が入ってきた時とはくらべものにな
らないほどのものだった。

無言で入ってきたその男は、ジロウが鬼頭を撃った

夜、その場にいた男——たしか、鬼頭から「湯木沢」と呼ばれていた男だったからだ。

と、その湯木沢の顔を見て、なぜか美佐恵も驚いた顔をした。

「あ、コオさん……」

「ひさしぶり」

無表情だった顔をちよつと照れたような表情に変え、美佐恵にうなずき返すと、湯木沢は、他の客との

間に席を空けて、ひとり一番奥に腰掛けた。

美佐恵は、ジロウと他の客との間をとりつくろうことも忘れたかのように、いそいそと湯木沢に近づき、おしぼりを出した。

「ロック」

湯木沢の注文にうなずくと、美佐恵は、湯木沢に顔を近づけ、他の客に聞こえないように言った。

「出てきたんだね」

その声音には、どこか懐かしそうな響きがある。

「ああ、これから、また時々顔出すよ」

湯木沢が静かな口調で言うと、美佐恵はグラスにウイスキーを注ぎながら、かすかに微笑み返した。

「そうしてくれと、ありがたいよ。コオさんがいれば、若いのもおとなしくしてるからね」

「俺がいねえ間、また、若いもんが迷惑かけてたのか」
湯木沢が、ちよつと顔を曇らせ、きいた。

美佐恵は、直接はそれに答えず、肩をすくめるようにしてグラスを差し出した。

「そうか、すまんな」

湯木沢は、そう言いながら、グラスを口に運んだ。

そして――

「……ん？」

ジロウの方に目をとめた。

ひそかに湯木沢をうかがっていたジロウは、それだ

けで全身から冷や汗が吹き出した。

「……ああ、樹里ちゃんていうの。今日から働いてもらうことになったの」

「ふうん」

美佐恵の言葉にうなずいたあとも、湯木沢は、ずっとジロウの方を見ていた。

act.3 Scared Virgin

「なんだ、ママか」

真夜中の歩道脇に停車したパトカーの助手席から、
ネズミ顔の男が顔を出し、言った。

「……ああ、須藤のだんな。突然声かけるからびつくりするじゃないか。若い男ならともかく、じじいの刑事じゃ、うれしくもなんともないよ」

パトカーに近づいた美佐恵は、たたくようなそぶりをしながら答えた。

美佐恵の軽口に苦笑しながら、須藤も言い返してきた。

「こつちだって、もつと若い娘だったらなんぼよかつ

たか。こんな物騒なところを、こんな時間に女二人で歩いてるから心配して声かけてみりゃ、『みなと』のママだもんな」

「それにしても、いきなり『なんだ』はないだろ」

「いや、ママなら殺されても死なんから」

「失礼しちゃうよ。堅気の市民に対して」

「どこが堅気なもんか。鬼頭組の若いもんだって一目置いてる女が」

「人聞きの悪いこと、言わないでおくれよ。私や、組とは何の関係もないんだからね」

「ああ、それはわかってるさ。鬼頭の連中は、ママの店の単なる客だ。でも、その客が、どういうわけか、ときどき店の中で物騒な物の受け渡しをやっていたりする。ママは、それを見て見ぬふり。調書の書き方ひとつじゃ、やばいことにもなるんだぜ」

「さあ、なんのことだか。だけど、それ言うんなら、

須藤のだんなだつて……」

美佐恵は、運転席にいる若い巡査の方をちらりと見ながら、わざとらしく声を落として言った。

須藤はちよつとあせつたように咳払いすると、美佐恵から視線をはずし、話をそらせた。

「……おや、なんだ、若いのもいるんじゃないやねえか」

話が自分の方におよばぬようにと美佐恵の後ろで小さくなつていたジロウは、須藤の視線に、コートの襟

を立て、さらに美佐恵の陰に隠れるようにした。

須藤は、今のジロウにとつて、最も会いたくない人物のひとりだ。なにせ、顔も素性も知られすぎている。

この街に来て以来、何度も「世話」になっているし、一度など、公務執行妨害とかで連行され、取り調べ室で長時間顔をつきあわせていたこともあるのだ。女装を見破られる危険はじゅうぶんにあつた。できるなら、まともに顔をさらしたくない。

ところが、ジロウのそんな思いをよそに、美佐恵はわざわざ体を脇によけて、ジロウを紹介した。

「樹里ちゃんっていうんだ。今夜から、店を手伝ってもらうことになってね」

「ほお、これはまた、べっぴんさんじゃないか」

須藤は、うつむくジロウの顔をのぞき込み、本心から驚いたように言った。

その場から逃げることもできず、ジロウは、上目づ

かいに須藤を見て小さく会釈した。

須藤と目があつた瞬間、全身が緊張し、ウイツグの髪がかかった肩のあたりがびくりと震えた。コートの手裾からのぞいたミニスカートの脚も、妙にぎこちなく膝が固まった。

ジロウは、自分がそんなふうにならずに不自然に緊張していいことに気づき、あせったが、そのあせりは、かえって緊張を募らせるばかりだった。

しかし、そんなジロウの緊張を、須藤はまったく別の意味にとらえたようだ。

「まだウブな子じゃないか。ママにうまくだまされたってわけだ」

須藤の言葉に、美佐恵はまた、たたくようなそぶりで答えた。

「やだね。みんなしてそんなふうに言うんだから」

「しかし、こんなかわいい子なら、同じ水商売でも、

もつと上等な店にも勤められるだろう。なににも、こんな物騒な場所の、小汚え店にいることあねえだろうに」

「ほんと、失礼な刑事だよ」

美佐恵が言うのと、須藤はちよつと真顔に戻ってつづけた。

「いやいや、実際の話、俺は心配して言っただ。あの事件以来、街ん中、頭に血ののぼった奴らがうろつきまわってんだからな。これだけの美人じゃ、連中に

いつ狙われても不思議じゃねえ。：：しかし、まった
く：：、横手組の小僧が馬鹿なこととしてくれたおかげ
で、こんなウブな娘までが、とんだ迷惑こうむるって
わけだ」

須藤は、その「小僧」と目の前の「娘」が、じつは
同一人物だということに、つゆほども気づいていない
ようだった。

「で、鬼頭を撃った犯人ってのは、わかかったのか

い？」

「ああ、だいたいの目星はな……」

捜査上の秘密ということなのだろう。須藤は、そう言ったあと、美佐恵の質問をはぐらかすように、あとの言葉をジロウに向けた。

「樹里ちゃんとやら、だから、一人歩きは用心するんだぜ」

それで、ジロウも、もう一度須藤の顔を見て、かわ

いらしくうなずかなければならなかつた。

「……しかし、こんな子が入ったんなら、俺もまた、ちよくちよく『みなと』に顔を出すか」

「ああ、いつもこのあたりで張ってんだろ。たまにや、休憩にでも来ておくれ」

「うむ。しかし、勤務中じゃ酒も飲めんしな。ま、ともかく、気をつけるんだな。……じゃあな」

そんな須藤の言葉を残し去って行くパトカーを見送

りながら、美佐恵はあきれたように肩をすくめた。

「ふん、なに言ってるんだい。どうせまた、聞き込みとか言ってたただ酒せびっていくくせにさ」

歩き出した美佐恵に気づき、その場に固まったようになっっていたジロウも、あわてて後を追った。

美佐恵のマンションは、もうすぐそこのはずだった。

「あんだ、もうちよつとしゃんと歩いた方がいいよ。」

そりや、若い娘が肩で風切つてちやまずいけど、最近の女は、もつと堂々と歩くもんさ。あのデカ以外に人通りがなかったからいいようなものの、あんな妙ちきりんな内股歩きじゃ、かえって目立ってしょうがない」

部屋に入るなり、美佐恵は、そう苦言を呈した。

玄関につづくキッチンで、居心地悪そうに突っ立つたまま室内を見まわしていたジロウは、ばつがわるそうに答えた。

「へ、へい。……でも、こんななかつこで外歩くなんて、照れくさくて……。それに、あの靴が……。」

そんなにヒールが高かったわけでもないのだが、美佐恵に借りた赤のパンプスは、たしかにジロウの足をもつれさせたのだ。

「あんなふうにくそこそ歩くから、よけいに引っかかるんだよ」

美佐恵は、ジロウをそこに残し、奥の部屋に入つて

いきながら言った。

「さっきのデカのようす見てもわかったろ。あんた、その格好なら、男だなんて誰も思やしない。もつと堂々としててだいじよぶなんだから」

奥からそんなふうにつづけたあと、一呼吸あつて、美佐恵は、ネックレスをはずしながら、ふたたび手前の部屋に出てきた。

「店の客たちだって、女の子だって信じ切つて、さか

んにちよつかい出してたじゃないか」

そんな美佐恵を見やり、ジロウはあわてた。

「あ、姐さん……そ、それは……」

美佐恵は、着ていたワンピースの肩をはだけていたのである。白い肩の肌とともに、下着のストラップやボリユーム豊かな胸のカップが見えていた。

「……え？ あっ、やだよ。そんなこと言いながら、

私まで、あんたのこと、女の子だって錯覚しちゃって

るよ」

いつものとおりに着替えにかかり、その途中で、ネツ
クレスに気づいて、こちらの部屋にある宝石箱かなに
かにしまいに出てきたというわけだろう。

美佐恵もあわてて、また、奥の部屋のふすまの陰に
引っ込んだ。

「あ、あんたもコートぐらい脱ぎな」

そんな姿をジロウに見られた照れを隠すためか、ふ

すまの向こうから、美佐恵はつつけんどんな言い方で言った。

それで、ジロウは、トレンチふうのベージュのコー
トをダイニングチェアの背にかけ、そこに腰掛けた。

男姿だったときの癖で、椅子に座れば、つい脚を開
いてしまう。ジロウは、それに気づき、あわてて赤い
ミニスカートの膝を閉じた。

そのせいで下を向いたジロウの目の前には、白い夕

ートルネックのセーターの胸が微かに揺れていた。その谷間からはミニスカートがのぞき、そこからすらりとした脚が伸びていた。それは、我ながら見事な光景だった。

こうして見ると、脚の肌もずいぶん白い。もちろん、スカートの色との対比もあるし、艶のあるストツキングのおかげでもあるのだろうが、女にも珍しいほどの肌の白さが、その艶をさらに生かしている気がする。

しかし、そんなふうに分の脚に見とれながらも、ジロウは、そのところどころにわずかな汚点があると感じていた。体毛だった。

もともと、男にしてはすね毛など薄いたちだから、素足ならさほど気にはならない。だが、こうしてストッキングに押さえつけられていると、やはり目立ってしまうのだ。肌が白いぶんだけ、よけい目につく。

(どうにかしたいな……)

ジロウは、何となくそんなことを考えた。

と、奥の部屋から、また美佐恵が言った。

「どつちにしても、だいじよぶみたいだから、明日からも、店、手伝っておくれよね。どうやら、あんたが
いれば、売上倍増しそうだし。それに、あんただって、
一日中部屋に閉じこもってるより、気が紛れるだろ」
「……でも……」

美佐恵の言葉にジロウは我に返り、口ごもった。

「なんだい？」

「あの男……」

「ん？ 須藤のことかい？」

「そうじゃなく、店で、最後に入ってきて、いちばん奥に座った……」

「え？ ……ああ、コオさん」

「あの男が、ずっと黙って、俺の方見てたから……」

「え、そうだったかい？ あんた、コオさんに見破ら

れたんじゃないかって心配してんのかい。そりゃない
と思うけどね」

「でも、あれは、鬼頭組の……」

「ああ、幹部さ。湯木沢耕治っていうんだ」

美佐恵の呼んでいた「コオさん」というのは、「耕
さん」なのだど、ジロウがひとり納得していると、美
佐恵がつづけた。

「鬼頭の連中で、ただ一人まともに話の通じる男さ。

ただ、そのぶん、貧乏くじ引かされてるけどね。まるで、誰かさんみたいに」

美佐恵は、榎本のことを言っているのだろう。榎本を引き合いに出すところを見ると、やはり、美佐恵は湯木沢のことを気に入っているに違いない。

ジロウは言おうかどうか迷っていたが、それなら、なおのこと美佐恵の耳に入れておいた方がいい気がして口を開いた。

「じつは、俺、最近、あいつと顔合わせてるんすよ」

「え？ そんなわきやないだろう。耕さんは、ここしばらくムシヨ暮らししてたんだから。出てきて、まだそんなに日がたつてないはずだよ。その間、あんたはずっと隠れてたんだ。会う機会なんて、ないだろ」

「いえ、俺が、鬼頭を撃つた時に……」

「え！ 鬼頭といっしょにいたっていうのかい？」

「……へい」

「……そうか。現場、目撃されてるってのかい。そりや、やばいねえ」

今度こそちやんと部屋着に着替えて奥の部屋から出てきた美佐恵は、ジロウの言葉に、驚いたようにつぶやいた。

「へえ。だから、店に出るのは、やっぱり……」

「うーん。しかし、今日、常連さんにお披露目しちやったし……」

美佐恵にとってには、やはり「売上倍増」は捨てがたいのだろう。ちよつと考えたあと、こうつづけた。

「あんたがあそこからいなくなるんなら、やめたとも言えるけど、あそこで暮らしてる以上、いつかは誰かの目に触れるだろ。あんなふうに言っちゃった手前、二階にいるのに店に出なかつたら、かえっておかしいんじゃないかい」

「でも……」

「まあ、耕さんも馬鹿な世界にどっぷりつかってる人間だけど、いきなりカツとなるような人じゃないから、もし、あんたのこと疑ってるなら、まず探りを入れてくると思うんだ。しばらくは、女の子に化けたまま、ようすを見ようよ。それに、あんた……」

「……？」

「今日、みんなにちやほやされて、けっこう、うれしそうだったよ」

「……え？」

美佐恵の言葉は、ジロウの気持ちの一面を凶星にしていた。そのせいで、ジロウはとっさに反論できなかつた。

と、美佐恵はその結論をあいまいにするとでもいうように、急に話題を変えた。

「さあ、早いところ、お風呂に入って。あんだ、店まで戻らなきゃいけないんだから、これ以上遅くなっちゃ

まずいだろ。須藤が言ってたように、深夜の女の子の一人歩きは危険なんだから」

そう言いながらバスルームに入った美佐恵は、バスの栓をひねって出てくると、ちよつとはずかしそうに付け加えた。

「ほんとは、ここに泊めたげりやいいようなもんだけど、そんなことしたら、あの人、けっこう妬くからね」
ふだんの榎本からは想像もつかないそんな姿を思い

浮かべようと、ジロウが複雑な表情をしていると、美佐恵は、また別のことを言った。

「あ、そうそう。風呂場の棚の上にカミソリがあるから、あんた、脚の毛を剃りなよ。やっぱりちよつと気になるから」

美佐恵も、ジロウと同じように感じていたのだ。

一週間ぶりの入浴は、ジロウの心と体をリラックス

させたようだ。

今、脱衣場の鏡の前に立ったジロウの顔は、不思議なくらい、ゆったりと穏やかなものになっていた。

鬼頭狙撃からそのあとの隠遁^{いんとん}、そして思わぬ女装での生活へと、生まれて始めてのことばかりが重なり――その間、ほとんどなにもしていなかっただけにもかかわらず――、ジロウの心身は、自分で感じている以上に緊張していたにちがいない。湯船の中で体をほぐし、

ジロウはやつといつもの自分を取り戻せた気がした。
いや、正確には、「いつもの」ということではない
かもしれない。

鏡の中の顔は、鬼頭を撃つ前の——やくざとしての
——ジロウというより、もつとずっと以前、その心が
大人への不信と反抗心でねじくれてしまう前の、邪気
のない頃の表情に近かった。

たぶんそれは、美佐恵が言うように、今夜、店の客

たちから注目され、何度も「かわいい」などと言われたことが、微妙に影響しているのだ。人からそんなふうに見られ、そんなふうに言われたのは、本当に幼い頃だけだった気がする。物心ついた頃から、家族や周囲の人々の関心は、ずっと、優秀な兄の方に集中していた。それ以来、ジロウが話題の中心になることなどなかったのだ。今夜、そんな、記憶が定かでないほど小さかった頃以来の体験をしたのである。そのことが、

ジロウの中で長い間忘れていた感覚を呼び覚ましたというところかもしれない。

さらに、美佐恵に言われたとおり、体毛を剃ってしまったことも、今のジロウを無垢な存在に見せるのに一役買っていた。

風呂場でジロウはすね毛を剃り、そればかりか、腕や腋の毛まで処理してしまった。脚がきれいになると、それらが気になりだし、どうせならと、一気に剃って

しまったのだ。

体毛がきれいさっぱりなくなつた鏡の中のジロウの体は、一点のシミもない、まるで少女のそれのようだった。そのままでは胸もなく、短髪だから、どこか中性的な存在ではあつたが、男臭い任侠の世界とはかけ離れたものであることだけは確かだった。

これまで否定しようとしてきた自分のそんな部分を、今日のジロウは、不思議に受け入れる気になつて

いるのだ。

ジロウは、そんな自分の姿を見つめながら、美佐恵が用意してくれていた新しい下着を身につけていった。

ショーツ、パッドを入れたブラ、そしてミニスリッ
プ。

短い髪をドライヤーで乾かしたあとウィッグをかぶると、そこには、すでに、まぎれもない美少女がいた。

ジロウは、今日の昼、自分で化粧したときのことを
思い出した。

今の自分は、あの時よりさらに「いい顔」をしてい
る。この顔に化粧をしたら、もつとずつとうまく仕上
げられるにちがいない。

そう思った。

「ママ、化粧品、貸して……ね」

スリッパ姿のままバスルームを出てきたジロウに、

今度は、美佐恵が驚く番だった。

コンビナートにつづく港の中央通には深夜でもトラ
ックが行き交っているというのに、そこからたった一
本入っただけのこの道路は、車一台、人っ子ひとりい
なかつた。

その静まり返った道に、パンプスのヒールの音が響
く。

スナック「みなと」への帰り道を急ぐジロウは、微かに吹いてくる晩冬の海風に、コートの際を立てた。

もう、二時をまわった頃だろうか。

せっかく風呂に入ったというのに、すでに体は冷え切っている。しかし、今のジロウは、それ以上の「ふるえ」のようなものを感じていた。

埋立地にできた道路らしく、裏道とはいえ道幅は狭くない。大型トラック二台がゆうにすれ違う広さがある。

る見通しのよさだ。簡単に尾行のようなことはできないはずだし、腕のいい狙撃者に遠くから狙われでもしないかぎり、いきなり襲われるようなこともないだろう。

それに……。この港町に来て三年。使いつ走りだつたとはいえ、裏の世界で生きてきたジロウである。こんな夜道を歩くことが心細いなどということとは、ふだんなら考えられないことだった。

しかし、今夜のジロウには、この空間の広さが、逆に、一人で歩くことの心細さを募らせていく気がする。青白く光る街路灯の向こうの闇を、どこか怖いと感じているのだ。

それはたぶん、頭で考えている怖さではない。体そのもので感じる「おびえ」というようなものだろう。

細いヒールでしか地面をとらえないパンプスの足は、やはり不安定で、どこか心許ない。

コートの下のミニスカートの中には、太股あたりまで冷気が舞い込み、歩くごとにこすれ合う両脚のストッキングの感触とも相まって、体の芯にさむ気のようなものを伝えてくる。

セーターの胸で揺れるシリコンパッドのバストは、そのまま心の動揺へとつながっていくようだ。

女というものは、世の中におびえを抱くようにつくられているのかもしれない。

ジロウは、どこかでそんなことを感じながら、とにかく早く店に帰り着こうと、道を急いだ。

マンシヨンと店とのちょうど中間くらいまで差し掛かった時だった。その道路に面し、海側につづく広い空き地の真ん中あたりに、ルームランプをつけたままで停まっている一台の車があるのを、ジロウはめざとく見つけた。

そこは、以前、古い倉庫が建っていた場所で、近々

始まる港の総合開発計画とかで市民広場になるはずの場所である。現在は、倉庫を壊したあとの整地工事が進められていて、数台のブルドーザーやパワーショベルが、夜もそのまま放置されていた。そんな建設用の車両の間に隠れるように、ワンボックスタイプの乗用車が停まっているのだ。室内には、どうやら人がいるようだ。

アベックかな。

最初、ジロウはそう思った。

いつものジロウなら、深夜の港でいいことをしているような男女など、脅してからかってやろうとも思うのだろう。しかし、今日はそれどころではない。

そちらをちらちらと見ながら、早足で通り過ぎようとした。

と、車の中で人影が動いた。

どうも、二人ではなく、三・四人いるようだった。

しかも、男ばかりである。

「なんだ、アンパンか」

車内の男の一人が、口にビニール袋を当てたのを見て、ジロウはつぶやいた。

地元の高校生かなにかが、密かに集まって、シンナーをやっているにちがいない。かつては自分も通ってきた道である。

彼らとさほど年齢が離れているわけでもないのに、

ジロウは、鼻で笑うような仕草をしたあと、もうそちらを見ることもせず、先を急いだ。

ところが、車の男たちの方が、ジロウに気づいたよ
うだ。

ジロウが通り過ぎようとするとき、ドアの開く音がして、「ちよつと、そこのお姉ちゃん」と声をかけてきた。

「……俺たちといっしょに、楽しいことしねえか」

ジロウは、それを無視して、そのまま、さらに足を早めた。

あんな馬鹿どもにかかずらわっている暇はない。

そんなジロウのそぶりが、男たちにはかんにさわったのだろう。

「馬鹿野郎。すかしやがって」

「待てよっ」

声とともに、他のドアの開く音も聞こえた。

その声は、やはり若い。自分より年下だろうし、単なる不良高校生だろうから、四人だとしても、今のジロウがやり合って負ける相手ではない。

そうは思ったが、ここでつまらない喧嘩などに巻き込まれていては、せつかく女装までして隠れていることが台無しになる。

そう考えたジロウは、駆け出していた。

と、男たちが、奇声を発しながら追ってきた。

若い女一人、ふつうならそのまま見過ごしもするの
だろう。しかし、彼らはシンナーでハイになっている
のだ。

いよいよかかわらない方が得策だと思ったジロウ
は、全力疾走の体勢に入った。

ところが、思ったほど速く走れない。パンプスとス
カートが、大股で走ることを許さないのだった。

だから、男たちに、あつという間に追いつかれてし

まった。

気がついたときには、男の一人が、すぐ後ろまで近づいていた。男は、後ろからジロウの肩をつかむと、力任せに引き倒そうとした。

喧嘩の技なら負ける気はしなかったが、体格的にはジロウの方が圧倒的に劣っていた。力勝負では、その男にかなわない。

バランスを失ったジロウは、パンプスの足をくじく

ようにして、歩道に倒されていた。

「やっちまえ」

男の声と同時に、追いついた他の三人が、ジロウの上に襲いかかった。

「ここじやまずい。あっちへ運べ」

四人の男たちは、ジロウの手足を拘束するようにして抱え上ようとした。

じつはこの時点でも、ジロウには形勢を逆転する自

信があつた。四人の男たちのぎこちない身のこなしから、喧嘩慣れしているようにはとうてい思えなかつたからだ。この瞬間なら、足を抱えようとしている男の顔を蹴上げ、あとの三人がひるんだ一瞬に攻撃を加えることができるはずだ。

ところが、ジロウには、それができなかつた。

男たちが持ち上げようとしたはずみに、頭のウイツグがずれかかったのだ。

そして、その瞬間、ジロウの頭に、先刻会った須藤の顔が浮かんだ。もしここにパトロール中の須藤が通りかかり、スポーツ刈りの頭でも見られようものなら、ここまでのことはすべて無駄になる。

一瞬、そんな考えにとらわれたジロウは、あわてて落ちかかるウイツグを手で押さえた。

そして、それが、男たちに、ジロウの自由を完全に奪う隙を与えてしまった。

四人の男たちに力づくで抱きかかえられたジロウは、足先をばたつかせながら、空き地の草むらまで連れていかれ、その上に放り出された。

「押さえろ」

四人の男たちが再び襲いかかってきた。

その時、男たちの形相を見上げたジロウの体の中に、なぜか、最前まで感じていた「おびえ」が増幅してよみがえってきた。

——怖い。

喧嘩の時などとはまたちがう血走った顔つきで、覆い被さるように手足を押さえつけてくる男たちに、ジロウはそう感じていた。

男たちの荒い息が、ジロウの首や腿にかかる。それが、ジロウの力を萎えさせた。

コートをはだけ、ミニスカートとセーターをまくる男たちの荒々しい手つきが、ジロウの身をすくませた。

まだ反撃しようと思えばできるはずなのに、なぜか、ジロウの体は金縛りにあつたように動かなくなつていた。

「……あ、だめ……」

か細い声のそんな言葉が、思わず口からこぼれた。

四人の男の一人が、まくれあがつたセーターの下のスリップに顔をつけ、こすりつけるようにしていた。男の唾液が、スリップを通し、腹のあたりに垂れた。

もう一人の男は、太股のあたりのストッキングの上から唇をはわせてくる。

その瞬間、ジロウの体は「受け身の感覚」に支配されていた。

「……ああ」

ジロウはいやがるとも身もだえるとも知れないように、体を揺すった。

それが、けっしていやがっているばかりでないこと

に、男がパンティーストッキングをおろそうとしたことで、ジロウ自身気づいた。

ストッキングが、前の部分に引つかかったのだ。

おびえているにもかかわらず、ジロウのそれは、縮こまるどころか勃起していた。

「……えっ！」

そのことに、自分自身驚いたことで、ジロウは、やっと我に返った。

なんで、俺は、こんなことで興奮してるんだ。

その事実には、冷や水を浴びせられたような気がして、ジロウは、一瞬にして冷静になっていた。

いけない！ このままでは、すぐに奴らに正体がばれてしまう。

やっと一時の混乱からさめたジロウは、反撃に転ずるために、体を固め、筋肉に力をためた。

そして、男たちを振り払おうとした瞬間だった。

ストツキングをおろし、ジロウの股のあたりに食らいつこうとしていた男が、風を切るような音と同時に、すつといなくなつた。

「——ウグっ」

「……？」

と、どこからともなく、これまでとは別の男の声が出た。

「馬鹿者ども、なにしてやがるんだ」

次の瞬間、他の三人の男たちも、一瞬にして空を飛んで、ジロウの体から離れていった。

あつけにとられ、あわてて起きあがったジロウの目の前に、一人の長身の男が立っていた。

その男のまわりに、ジロウを襲った四人の若い男たちが倒れていた。

「……く、くそっ」

男たちはよろよると起きあがり、中央の男に反撃し

ようとした。

ところが、男は、また目にもとまらぬ早さで、四人に蹴りを入れ、拳を振るった。

そのつぼを押さえた攻撃に、四人は、一撃ずつでまた倒された。

二人は完全に気を失い、あとの二人は体を丸めてうめいている。

ジロウは、驚いて四人の様子を眺めたあと、男を見

上げた。

「さあ、行こう」

そう言って手を差し出した男が、湯木沢耕治であることに、ジロウは、その時、やっと気がついた。

「じゃ、気をつけるんだぜ」

けつきよく、湯木沢がジロウに向かって発した言葉は、それだけだった。

ジロウがスナック「みなと」の店のドアを開け、中に入るのを見届けると、それだけ言って、帰っていったのだ。

あの工事現場の空き地から店までの間、湯木沢は、ジロウの歩調に合わせてるようにしながら、黙って歩いた。

ジロウは、そんな湯木沢の半歩後ろから、やはり黙って、背中を見ながらついてきた。

なぜ湯木沢があそこに現れたのか——もしかしたら、自分のことを疑って、尾けていたのではないかという思いもあり——、ジロウは何度か聞こうとしたが、湯木沢がずっと黙っているので、問いただすチャンス
を失した。

また、ジロウは、そんな湯木沢のようすから、自分の会話を拒んでいるのかとも思った。しかし、どうもそうでもなさそうだった。

湯木沢の背中では、ジロウの気配を必要以上に気遣っているようで、むしろ、あんなことのアトで、なんと声をかけたらいいのか惑っているというように見えた。

まっすぐにこの店に向かったところを見ると、少なくとも、湯木沢は、ジロウが「ゆうべ、『みなと』で出会った女」であることだけは、最初から承知していたようだ。それをわかった上で、助けてくれたのである。

る。

しかし、そのことは、判断のための何の決め手にもならない。

自分のことを不審な存在として疑っているとも考えられたし、そうではないとすることもできる。

店に戻ったあと、ジロウは、しばらく一階のカウンターチェアに腰掛け、湯木沢の行動がなにを意味するのか、それが自分にとって危険なことなのかどうか考

えていたが、けつきよく結論は出ず、考えるのをやめた。

そしてそのあと、二階に上がり、着ているものをすべて脱いで寝間着に着替え、ふたたび一階に降りた。

トイレの流しで、今しがた脱いだばかりの下着を洗ったのである。

なんで、そんなことをしようと思ったのか、ジロウ自身にもよくわからなかった。

ここに来てからずっと、ジロウの着ていたものは、美佐恵が家に持ち帰り洗濯してくれていた。だから、この下着も、二階の袋に詰めておけば、美佐恵が洗ってきてくれるはずだ。

しかし、ジロウは、どうしても今夜のうちに、その下着を洗っておきたいと思ったのだ。

ひとつには、その下着に泥がこびりつき、もしかしたら、ショーツにはしみさえついているかもしれない、

ということはある。

それを美佐恵に見られれば、必ずなにがあったか聞かれるだろう。

美佐恵に対し、是が非でも秘密にしようと思つてい
るわけではないのだが、できれば、あんなことは話し
たくない。あんなはめに陥つたこと自体、どう話して
も恥ずかしいことに思えるし、一瞬にしる、自分が男
たちに対しておかしな反応をしていたということに

は、恥ずかしいという以上のものがある。

しかし、単に美佐恵に秘密にするというだけなら、
なにも、その下着を今すぐ洗う必要もないだろう。今
夜は疲れているのだし、明日の朝起きて、美佐恵が来
る前までに洗っておけばいいのだ。

それを、どうしても今夜のうちに洗っておきたいと
思ったのには、もっと別の理由があるはずだ。

それは、ジロウが今夜感じていたおびえとも一脈通

ずる、今のジロウの体そのものから発している要求なのかもしれない。

体毛まで剃り、せっかくきれいにした体を、あんな男たちの唾液で汚されたことが、耐えられない気がするのだ。

本当のところを言えば、下着だけでなく、もう一度入浴して、体の隅々まで洗いたいところだ。

ジロウはそう感じていた。

事実、下着を洗ったあと、ジロウは、冷たいトイレの水道で体を拭いたのだった。

それは、いわば、穢れをおびえる処女のような感覚が、ジロウの中に芽生えはじめているということかもしれない。

そのあとジロウは、二階の物干しに出て、洗った下着を干してから、眠りについた。

翌朝、ジロウが目覚めたのは、十二時近くだった。

やはり、昨日、いろいろなことがあったせいだろう。

いつもより二時間以上も遅くまで寝ていたことになる。

起き出したジロウは、着替えと簡単な化粧を済ませたあと、部屋のカーテンを全開した。

美佐恵には不自然でないようにしていると言われていたが、目と鼻の先に鬼頭組の組事務所があることか

ら、ふだん、ほとんどカーテンは開けていない。

しかし今日は——外が暖かそうな快晴らしいこともあつて——、窓を開け放ちたくなつたのだ。

窓を開けると、物干しに、昨夜干した下着が揺れているのが見えた。

多少風もあるようだし、おそらくもう乾いているのだらう。

ジロウは、それらを取り込もうと、窓から、物干し

台の上に出た。

ここに出たのは昨夜に次いで二度目だが、昼間出るのはこれが初めてだ。というより、あの事件以来、昼間の外気に触れること自体が初めてだった。

そんなこともあって、物干しに出るなり、ジロウは思わず大きく伸びをした。

そして、そのあとで、ちよつと心配になって、鬼頭組のビルを見た。

いわば夜の商売であるやくざは、だいたいにおいて朝が遅いものだ。案の定、鬼頭組の窓はどこもブラインドが降りたままになっていた。

それで一安心し、洗濯物を取り込みにかかったところで、ジロウは手を止めた。

その物干し台からは、部屋の中から見えない鬼頭組の脇の駐車場が見える。そこに、人がいたのだ。

その男は、どぎつい字でスローガンを書き連ねた右

翼の街宣車のそばで、火のついたドラム缶になにかをくべていた。たぶん、ゴミでも焼いているのだろう。

そう思い、男が気がつく前に、早いところ洗濯物を取り込んで部屋に戻ろうとしたジロウの手は、一瞬後、またびくりと止まった。

鉄パイプかなにかでドラム缶の中を掻き回し、そのあと顔を上げた男は、なんと湯木沢だったのだ。

「……あっ」

大きい声ではなかったが、思わず驚きが声に出ていた。

まさか、幹部である湯木沢がそんなことをしているとは、想像していなかったからだ。

と、その気配に、湯木沢もこちらに気がついた。

見上げた湯木沢もやはり、ちよつと驚いた顔をした。物干し台の上と下、ほんの数メートルしか離れていない距離で、ジロウと湯木沢は、見つめ合うことにな

つてしまった。

一瞬、ジロウは、このまますぐに部屋に逃げ戻ろうかと思った。

しかし、それでは、いかにも不自然だ。

どうしたらいいものか、ジロウが迷っていると、湯木沢が照れたように「やあ」と言った。

そこでジロウは、昨夜の礼をまだ言っていないなかつたことに気がついた。

こんな場合は、そうするのが、「女」としてなにより自然だろう。

それで、低い声にならないように用心しながら、口に出してみた。

「ゆうべは、どうも……ありがとう、ございました」
その言葉に、湯木沢は、照れたようにほほえみながら、微かに首を振ると、ちよつと考えるような表情をして聞いてきた。

「どうして、あんな時間にひとり歩きしてたんだ」

「あ……その……、ここには、お風呂がないんです。

それで、ママのマンションに」

言葉遣いに気を配って、一言ずつ区切るようにジロウが言うと、湯木沢は、今度はあきれたように首を振り、言った。

「まったく、ママもしょうがねえな。若い女の子使うなら、そのくらいのこと、ちゃんと考えてやればいい

だらうに」

湯木沢は本心からそう言っているようで、どうやら、今の表情に、ジロウのことを疑っている様子はない。

それでジロウは、湯木沢が聞いてきたのと同じように、昨夜から疑問に思っていたことを、聞いてみたくなつた。

「あの……」

「……ん？」

「耕さん……でしたよね」

「ああ」

「耕さんは、どうして、ゆうべ、あそこにいたんですか？」

「……ああ。うん、……海をね」

「……え？」

ジロウが首を傾げると、湯木沢は、本当に照れくさそうに、言葉を継いだ。

「ふふ。こんな稼業をしてると、時々、無性に海が見たくなる時があるんだ」

あの時は、ひとりで海を見ていたと言いたいのだらう。ちゃんとした説明になっているとは思えなかったが、その照れには、じゅうぶんな説得力がある気もした。

それによく考えてみると、確かにあの時、道路の側には人影はなかったのだ。湯木沢が、あの空き地が接

するもう一方の側、つまり港の堤防の側からやって来たということなら、つじつまは合う。

何となく納得がいった気がしたジロウは、これ以上話すこともなく、また、できるなら湯木沢の前から早く消えたいという思いもあり、軽く会釈して、洗濯物の取り込みにかかった。

湯木沢の方は、まだなにか言いたげにしていたが、元来が、こういうことに器用な男ではないのだらう。

言葉が見つけられないように、ただこちらを見上げていた。

その視線を感じ、洗濯ばさみはずす手が緊張したせいもあるかもしれない。

その時、唐突に吹いてきた南風に、洗濯物のひとつがジロウの手から放れ、飛んだ。

「……あっ！」

ジロウがあわてて見上げ、目で追うと、そのブラジ

ヤーは、風に乗ってしばらく宙に舞ったあと、湯木沢のいる鬼頭組の地所内に、すっと落ちた。

湯木沢も、その一部始終を見ていたのだろう。地面に落ちた下着と、物干し台の上のジロウの顔を交互に見て、困ったような顔をした。そしてそのまま、しばらく迷っていたが、やがてそのブラジャーに近づき、拾い上げた。

そのとたん、湯木沢の顔が、耳のあたりまで真っ赤

になった。

ジロウの方も、それを見下ろして、赤くなっていた。本来なら、男である自分が、そんなことに赤面する必要はないのだろうが、自分が着けていたブラジャーが、男の手に握られているということに、どうしようもなく、恥ずかしさがこみ上げてきた。

しかし、それは、昨夜、男たちにレイプされかかって、そのあとに下着を洗いたくなくなったのとは、また、

まるでちがう心情だった。

湯木沢は、それを手にしたまま、まだ少し迷っていたが、思い切ったように、鬼頭組と「みなと」との間にあるブロック塀に飛びつき、そこをよじ登った。

ジロウは、その湯木沢の身のこなしの軽さに、ちよつと見とれてしまった。

塀の上に立った湯木沢は、そのまま、物干し台の手すりにとりついた。

湯木沢の身長だと、ちょうどその顔が手すりの上あたりになる。

湯木沢が、真っ赤な顔のまま、無言で差し出したそのブラジャーを受け取り、ジロウはうつむいたまま、小さな声で「すみません」と言った。

朝起きたばかりで、今日はまだ本格的な化粧をしてはいない。口紅くらいしか塗っていないその顔を、湯木沢にすぐそばで見られるのはいやだった。

いや、正体を見破られることを警戒したのではない。その時には、ジロウの気持ちから、そんな警戒心は消えていた。

純粹に、湯木沢に寝起きの素顔を見られるのが恥ずかしいと感じたのだ。

ところが湯木沢は、すぐにはそこを降りようとせず、ジロウの顔を見つめたまま、「あの……」と声をかけてきた。

それで、しかたなく、ジロウも湯木沢の顔を見返した。

「今夜から、俺が、迎えに行つてやるよ」

湯木沢が言った。

「……え？」

「あんたが、いやじゃねえならだが」

「……？」

「毎晩、風呂に入り、ママの所へ行くんだろ。昨日

みたいなのが、またあるといかんから……」

ジロウは、その言葉に、湯木沢の顔をまじまじと見つめてしまった。

ブラジャーを飛ばした、あの南風は、今年の春一番だった。

act.4 Awaken Heroine

有線のバラードを引き裂くように、店の前をパトカーのサイレンが何台も通りすぎた。

カウンターの三人の男たちは、ちらりとドアの方に

目をやったあと、うんざりしたように顔を見合わせた。

「ち、また、どつかでドンパチやってやがる」

「まったく、いい加減にしろってんだ。おかげで、外もおちおち歩けん」

「ほんと、あいつら、街のダニだぜ」

「どうせなら、殺し合って、全部くたばっちまえばいいんだ」

酒のせいもあり、調子にのって言った二人の言葉に、

もうひとりの男があわてた。「おい！」と小声で制し、目顔でカウンターのいちばん奥の席を示す。あとの二人もその意味に気づき、「しまった！」というように口をつぐんだ。

壁際で飲んでいた湯木沢の側も、その不自然な沈黙が気になったのだろう。伏せていた目を、ちらりと男たちに向けた。

精悍で目つきの鋭い湯木沢が見れば、どうしてもに

らむような表情になる。

一瞬、湯木沢と男たちの視線がからみ、男たちはあわてて目をそらせた。

と、湯木沢の方も、自分がそちらを見てしまったこと自体を悔いるように視線をそらせ、独り言のようにぶつきらぼうに言った。

「……いや、自分のことは、気にせんでください」

そして、ちよつと考えるようにしたあと、カウンタ

ーの中の美佐恵に向かって、こうつけ加えた。

「ママ、あちらのお兄さん方に、なにか一皿、お出し
してくれ」

「あいよ」

美佐恵は、まるで湯木沢がそう言うのがわかってい
たかのように、皿の上にチーズを並べはじめた。

「……あ、いや、俺たち、べつにそんなつもりで……」

なりゆきに驚いた男たちがあわてて言うのと、湯木沢

は小さく首を振り――

「堅気の衆に迷惑かけてるのは、自分らの恥だから」と、また、ぶつきらぼうな口調でつぶやいた。

「でも……」

男のひとりが、湯木沢の方に向き直ってさらに言いかけると、今度は美佐恵がその言葉を引き取った。

「いいんだよ、この人、こういう人なんだ。これで、あんたたちを丸め込もうなんて思ってるわけじゃない

んだから、素直にもらつときな」

美佐恵の言葉に少しは安心したらしく——もちろ
ん、逆らつては怖いという気持ちもあり——、男たち
は、「どうも」「すみません」「ごちそうになります」
と口々に言つて、そのチーズの皿を受け取つた。

湯木沢は、目をそらせたままグラスを上げてそれに
こたえ、口添えしてくれた美佐恵にうなずいてみせる
と、ふたたび、どこか悲しげにさえ見える顔で、グラ

スを口にした。

ジロウは、カウンターの中で美佐恵と並んで、そんな一部始終を見ていた。

今夜は、赤いワンピースに赤のイヤリング、そしてシグナルレッドの口紅が、薄暗い店内のライトに浮き出し、印象的だ。ちよつと派手すぎるかとも思ったが、美佐恵の「だいじよぶ、似合うから」という言葉で選んだ取り合わせである。

と、客のうちのひとりが、話を変えらるでもいうように、ジロウに話しかけてきた。

「樹里ちゃんはさ、ここに住み込んでんだろ」

「……え？ ……ええ」

多少の受け答えはしなければと、ジロウは、グラスを拭きながらうなずいた。

「こんなところに、夜ひとりでいるの、怖いだろ」

顔をのぞき込むようにして言った男の言葉に、どう

答えたものかジロウが迷っていると、すかさず他の男たちがまぜつかえしてきた。

「あれえ？ お前、なんかよくないこと、考えてんじやないの？」

「そうそう。夜中に忍び込んで、樹里ちゃんレイプしちゃおうとか」

「え？ 馬鹿野郎、俺はただ、こんな物騒なところに、こんなかわいい子がひとりでいるなんて、危険だなと

思っただけだろうが」

「いちばん危険なのは、お前だろ」

「そうそう」

「だから、そんなんじゃ……」

「樹里ちゃん、こいつには気をつけた方がいいぜ。性欲が服着て歩いてるような奴だからさ」

「そうそう、夜這いだってなんだってすんだから。戸締まりだけはしっかりしとくんだぜ」

「お前ら、そういうこと、言うかね」

ほろ酔い気分の男たちの他愛ない論争を、ジロウは、ただ微笑んで聞いていた。自分のことを若い娘だと思つて疑いもしないその話は、ちよつとくすぐつたい気はするが、こんなふうにも、自分を中心に話題が進んでいくのは、けつして悪い気はしない。

「だいたいお前らこそ、そういう下心あるから、そんな発想するんだらうが」

「下心？ そりや、みんなあるだろ。樹里ちゃん目当てじゃなきや、誰がこんなちんけな店に来るもんか」

「あ、失礼しちやうね、この人は」

また調子に乗った男たちの話に、美佐恵が口を出した。

「だって、そうだろ。ママの顔見ながら飲んでたって、酒もうまかない」

「そうそう、樹里ちゃんをつくつてくれた水割りだか

らこそ、安バーボンに高い金払っても、誰も文句も言わない」

「ほんと、よく言うよ、あんたたち。こんな絶世の美女を前にしてさ」

美佐恵は、男たちの戯れ言をそんなふうになんげに軽く受け流しながらも、ひとりの女としては、彼らがジロウばかりをちやほやするのがちよつとしやくに障ったのだらう。

「でも、あんたたち、気をつけなよ。この子、こう見えてけっこう気が強いんだから。へたに手出したら、殺されちゃうよ」

ピストルを撃つような仕草で、そうつぶけた。

美佐恵の辛辣な冗談に、ジロウはあ然としてその顔を見た。と、美佐恵は、言葉が過ぎたことを半ば反省するような、そして半ばからかうような表情で肩をすくめてみせた。

美佐恵のまなざしに、ジロウもあきれたようにため息をつくのと、今度は、湯木沢のことが気になって、そちらをうかがった。

今の会話を聞いていたのかいなかったのか、湯木沢は相変わらずグラスを見つめながら静かに飲んでい
る。

その様子に、ジロウはなんだかほっとした。

ジロウが湯木沢のことを気にし、その様子に安堵し

たのは、もちろん、湯木沢が自分の正体を疑っているのではないかという不安がまだあるからだ。しかし、どうもそれだけでもなさそうである。

「へえ、樹里ちゃんって、そんなに気が強いのか？　そうは見えないけどなあ……」

「でも、俺、樹里ちゃんとできるんなら、殺されてもいい」

「そうそう、俺も」

さらにつづく男たちの軽口に、ジロウはさも恥ずかしそうに肩をすくめ、うつむいてみせた。

おそらく、こんなことを言いながらも、男たちは、ジロウの仕草ひとつひとつを観察し、値踏みしているにたがいない。一週間前からこの店にやって来た「ものの静かな樹里ちゃん」がどんな女なのか——どの程度純情で、どの程度世慣れているのか——、そんな探りを入れているのだ。

そしてそれは、おそらく湯木沢にしても同じだろう。あんなふうには、毎晩ひとり寡黙に飲んでいながら、たぶんはこちらの様子をうかがっているはずだ。

ジロウが、女の子っぽく恥じらってみせたのは、そうすること、美佐恵の言った「気の強い女」という言葉を打ち消したいという気持ちをはたらいているからだろう。特に、湯木沢にはそう思われたくないと思っ

この数年間、やくざの世界にどっぷり浸かって生きてきたジロウである。積極的に女を演じる自信などないが、恥じらうそぶりくらいなら、なんとかなった。

湯木沢がボトルから新たな酒を注いだのを目にとめたジロウは、他の客たちの前を離れ、アイスポットから氷をとってそのグラスに入れた。

「あ、すまん」

湯木沢は、赤いマニキュアのジロウの指の動きにつ

られるようにして、その顔を見上げ、礼を言った。

ジロウは、また伏せ目がちにして、恥ずかしげに微笑んだ。

と、その時、入り口についたカウベルが荒々しく鳴った。

どたどたと入ってきたのは、ダブルの背広に派手なカラーシャツの二人組だ。

「くそっ、やつら、いい気んなりやあがって」

男たちは、外からしてきたらしい会話の勢いのまま、湯木沢と他の客たちの間の席に、乱暴に腰掛けた。

とたん、それまで軽口を飛ばしていた客たちは緊張し、その二人に関わりたくないというように視線を背け、顔を寄せ合った。

「しかし、横手組の奴ら、まさか、あの賭場をやってくるとはな」

「こうなったら、こっちも、あいつらのシノギ場、片

「つ端からぶつつぶすだけよ」

まわりのことなどまるで目に入っていないらしい男たちは、そのまま、大声で話をつづけている。

と、カウンターの隅でうつむいていた湯木沢がぼそりと言った。

「……おい、よさねえか」

「なんだと！」

そう言って振り返った男たちは、そこではじめて、

湯木沢の存在に気がついたようだ。

「……あ、湯木沢の兄貴」

「こ、こんなところにいらしたんですか」

湯木沢に対し、二人の表情はさっと緊張し、言葉つきが変わった。

しかし、その語調には別の含みもあるようにジロウには感じられた。男たちは、こんな重大時にこんなところでのんびりと飲んでいる湯木沢を、言外に責めて

いるようでもあったのだ。

「……ああ」

湯木沢は、ひとこと返事したあと、彼らを見捨てるように、また、グラスをなめはじめた。

それに対し、男の一人が、興奮した感じで言った。

「兄貴、知ってますか。北町のマンションのルーレット場に、横手組の奴らが弾ぶち込んで……」

「ああ、さつき携帯で聞いた」

湯木沢はそれだけを、また、ぼそつと言った。

男たちは次の言葉を期待するような表情でそんな湯木沢を見ていたが、湯木沢がそれ以上何も言おうとしないので、次第にそれが、いらだちと白けの混じった顔に変わった。

「あんたたち、何にするんだい」

そのタイミングを見計らったように、美佐恵が聞いた。言葉つきは同じだが、他の客に接する時のような

暖かみのない声だ。

「ビールだ」

「俺も」

ジロウは、その注文と同時に冷蔵庫を開けていた。

店に出るようになって一週間。すでに、反射的にそんな動作が出るようになってきている。

ビールの栓を抜き、グラスに注ぐ。つけ合わせのナッツを皿に盛って、いっしょに二人の前に並べた。

「どうぞ」

鬼頭組の連中相手に、そんなことをしてやりたくはなかつたが、今の自分の立場では、それもいたしかたない。

二人は、湯木沢に無視された気分を払うとでもいうように、にやにや笑いを浮かべてジロウの顔を見ながら、ビールを一気にあおった。

そしてグラスを置くと、今度は湯木沢にではなく、

二人で話をはじめた。

「そう言えば、サツのやつら、組長撃ったホシを完全にしぼったらしいぜ」

「え、誰だっただけ？」

その言葉に、カウンターの中のジロウは、自然に緊張した。

「榎本って知ってっだろ」

「ああ」

今度は、美佐恵からも、張りつめたものが伝わってきた。

「あいつにくつついてるジロウってちんぴら。どうも、奴が姿を消してるらしいんだ」

「ジロウ……？ え！ あのチビか。あいつに、そんな度胸があるのか？」

「だろ。はしっこいだけ取り柄のちんけな野郎なのによ」

それを聞きながら、カウンターの途中でアイスピックを握りしめたジロウの腕を、美佐恵がそつと押さえた。

「まあ、たしかにあのチビなら、若頭と湯木沢の兄貴の見た背の低い男ってのにはぴったりだがな」

美佐恵に目顔でたしなめられ、ジロウが怒りを必死に押さえていると、湯木沢がまた、押し殺した声で言った。

「よせって言うてっだろ」

ところが、男の一人は、湯木沢が話に乗ってきたものと勘違いしたらしい。さらに言葉をつづけた。

「いえ、兄貴。ジロウってのは、最近になってうるついでるサンピンだし、おつとめに出てた兄貴がご存じないのも無理はねえんで……」

「馬鹿野郎。いい加減にしろ」

けっして大声ではないのだが、ドスの利いた声で湯木沢は言った。

その何とも言えない迫力に、当の二人だけでなく、店の中にいる全員に緊張が走った。

「ここには、他のお客さん方もいらっしやるんだ。そんなくだらねえ話を、えらそうにするもんじゃねえ。

てめえら、表に出ろ」

湯木沢は、そう言って立ち上がると、カウンターの
上に一万円札を置いた。

「悪いな。こいつらの分も、とつといてくれ」

そして、まだぼかんと湯木沢の方を見ていた男二人に、鋭く「来い！」と言った。

「へい」

二人は、弾かれたようにカウンターチェアから降り、湯木沢に従った。

店を出る時、湯木沢は、ちらりとカウンターを振り返り、ジロウの顔を見たようだ。

ジロウはそれを、この店の中でジロウと湯木沢だけ

が知っている「今夜の約束」の目配せだと感じた。

「あの人、ヤサ変えたらしい。今、電話があつたよ」

美佐恵のマンションで、風呂上がりの化粧をしていると、美佐恵が声をかけてきた。

「あいつらが言つてたように、鬼頭を撃つたホシがあんなだつて情報が流れたとすりや、まず狙われるのはあの人だからね。鬼頭組のやつら、あの人押さえて、

あんたの居場所を突き止めようとするだろう。私や、それがいちばん心配だよ。まあ、ほんとの狙いはあんたなんだから、あの人がいきなり命とられるようなこととはないだろうけど」

「すみません。兄貴にもママにも、とんだ迷惑かけて」
ジロウは、シャドーブラシの手を止め、言った。「ママ」という呼び方には慣れたが、二人になると、未だ女言葉は使いにくい。

「謝るぐらいだったら、最初から、あんな馬鹿なこと
しなきゃいいんだよ。いや、だいたいあんた、あんな
世界に入らなきゃよかったんだ。どう考えたって、あ
んたにや、やくざなんて向いてないんだ」

「：：へ、へえ：：」

美佐恵の決めつけるような言い方に、少なからず腹
は立ったが、これだけ迷惑をかけ世話になっている以
上、反論もできず、ジロウはそう言っとうつむいた。

「まあ、いいから、早く化粧して帰んな。いくら女にしか見えないたって、あんただって、夜道をのんびり歩ける身の上じゃないだろ」

「へい」

美佐恵の言葉に、ジロウはふたたび鏡台に向かい、メイクのつづきにかかった。

まぶたにシャドーを入れた後、眉をつくり、チークをさして、口紅を塗る。ジロウは、唇のラインに沿っ

て、紅筆でていねいに輪郭を描き、そのあとで、中をうめていった。

最近のジロウは、この瞬間が気に入っていた。口紅を入れたとたんに、顔つきがぱっと明るくなる。ファッションションのせいでのっぺりした感じだった顔が、唇が色づくと同時に表情豊かなものになるのだ。その瞬間には、これまでの人生で感じたことのないようなわくわくする感覚があった。

だからジロウは、つい、そばに美佐恵がいるのも忘れ、それに熱中してしまった。

「それにしても、あんた、この短い間にすごく変わったよね。そんなところ見ると、ほんとに女そのものだわ」

自分のベッドに腰掛け、メイクしているジロウを見ていた美佐恵が、なかばあきれたような口調で言った。「化粧も、あつという間にうまくなつちやうしさ。だ

けど、それ、ちよつとやりすぎじゃないのかい。風呂上がりで、これから帰って寝ようっていうのに、そこまでリキ入れてメイクすることもないだろ。そりや、正体がばれないようにいつも化粧してろって、言ったのは私だけどさ」

もう少し手を入れたそうな素振りを見せながらも、美佐恵の言葉に照れて、そそくさと紅筆を片づけるジロウに、美佐恵はさらにつづけてた。

「まるで、これから、誰かに会うみたいだ」

「……え？」

「これから、デートに出かける娘みたいだってこと」

そう言ってベッドを立ち、寝室を出ていく美佐恵を見送りながら、ジロウは、しばし呆然とした。

言われてみてはじめて気づいたのだが、たしかに自分は今、「これから会う人」のことを考えながら化粧していたような気がしたのだ。

美佐恵のマンションのエントランスを出ると、ジロウは、そこで立ち止まり、いつものように前の通りを見た。

と、湯木沢は、いつもの場所——角の街路灯の下あたりで、煙草を吸いながら立っていた。

湯木沢と目が合い、ジロウはちよつと恥ずかしそうに目を伏せ、小走りに数段の階段を下りた。そしてそ

のまま、道を横切り湯木沢に近づいた。

つい小走りになるのは、寒い中、湯木沢を待たせていたという申し訳なさもあるし、こちらを見ている湯木沢の視線に対する恥ずかしさもあるからだ。

「やあ」

湯木沢の前まで来て、ジロウが立ち止まると、いつものように湯木沢はそう言った。

ジロウは、伏し目がちに湯木沢を見上げ、こくと

うなずくようにした。

いつも、待っていてくれた札を言おうと思うのだが、照れと、そして、しゃべれば正体がばれるのではないかという恐れから、二人になるとなおさら無口になった。そして、湯木沢もまた、それ以上言葉を継げない様子で、いつも先に歩き出すのだった。

スナック「みなと」の裏の物干し台で、「今夜から俺が迎えに行つてやる」と湯木沢が言った日の夜から、

こんなふうには二人の「デート」ははじまった。

ジロウが入浴を終え、美佐恵のマンションを出る頃を見計らい、湯木沢はここで待っている。「みなと」まで十分少々の道のりを、毎夜、送ってくれるのだ。

と言っても、その道のりを、いつも二人はただ黙って歩くだけだ。交わす言葉は、この「やあ」と、ジロウを送り届けた後の「じゃ、気をつけるんだぜ」という湯木沢のふた言だけである。

湯木沢はほとんど毎夜店にも来ているのだから、もう少し親しく口をきいてもよさそうなものなのだが、二人になると、お互い寡黙になった。

大きな「秘密」を抱えたジロウばかりではなく、湯木沢の側も、どこかぎこちなくジロウに接する。おそらくは、湯木沢の女性に対する不器用さのなせる技なのだろうが、湯木沢が自分の正体をじつは感づいていないのではないかというジロウの疑念が晴れないのも、

そんな態度のせいだった。

しかし、そんななにも会話のない「デート」でも、ジロウが、毎日この時間を特別な気持ちで迎えることはたしかなようだ。ジロウ本人はそれに気づいていなかったのだが、先刻の美佐恵の言葉で、今は、多少それを自覚している。だから、今夜はよけいに照れて、湯木沢の顔を見ていられず、自分の方から先に歩き出した。と、――

「ちよ、ちよつと、待ってくれ」

これもいつもとちがって、湯木沢が呼び止めた。

「……？」

ジロウが振り向くと、湯木沢は曲がり角の脇の道を
目で示しながら言った。

「今夜から、車なんだ」

見ると、そこには、真新しいGT車が停まっていた。

「出所してから、ずっと車には乗ってなかつたんだが、やつと新車を手に入れたんでな。この方が、あんたも寒い思いしなくてすむだろう」

スカートの裾が乱れないように気を使い、ぎこちな
い仕草でジロウが助手席に乗り込むと、運転席の湯木
沢は、まるで言い訳でもするようにならう言つた。

湯木沢が自身のことを話してくるのは、ほとんどこ
れが初めてのことだったので、ジロウは、ちよつと驚

いたように湯木沢を見た。

と、湯木沢は、そのジロウの視線を勘違いしたようだ。妙に焦ったようすで、きいてきた。

「あ……、その……、もしかして、俺がムシヨに入ってたこと、ママはしゃべってないのか？」

「……あ、いえ。知ってます」

今度はジロウが、湯木沢のようすにあわて、そう答えた。

「そうか……」

湯木沢はちよつと安心したような、それでいて、さらに不安が増したような複雑な表情でそう言った後、セルモーターを回した。そして、車を静かに発進させながら、ぶつぶつぶやくようにつぶけた。

「悪いな。俺みたいなのが、あんたみたいな人につきまとして。もし、いやだったら、すぐに言うてくれ」

「いえ、そんな……」

ジロウは、すかさずそう答えた後、毎夜言えなかつた礼を、今こそ言おうと思った。

「あたし、感謝してます。いつも、ありがとうございます
ます」

そして、言ってから、自分のことを、自然に「あたし」などと口走っていることに気づき、驚いた。

「そうか……、それなら、いいんだが」

湯木沢は、ぶつきらぼうだが、どこかうれしそうな表情を浮かべ、そう言った。

「でも、あんたみたいな若い娘が、こんなやくざもんといっしょに歩いてるところを、人に見られちゃ、まずいと思つてな……」

それで、車を手に入れたということだろう。

ジロウがそう考え、また湯木沢の横顔をうかがうと、湯木沢はその視線に気づいたらしく、妙に緊張したよ

うすでハンドルを操った。例によって、それ以上継ぐ言葉が見つからない様子でもある。

それを見ているうち、ジロウの側にも、その緊張が伝染した。

よく考えてみると、これはきわめて危険な状況だった。

動いている車内とはいえ、湯木沢と閉ざされた空間で二人きりになるのはこれがはじめてである。

その気になれば、今、湯木沢はなんでもできる。

もし湯木沢がジロウの正体に感づいていて、親とも思う組長の狙撃犯だとわかっているのなら、その胸のポケットに隠し持っているかも知れない拳銃で、このままジロウを撃ち抜くこともできる。

そして、もし、湯木沢がジロウのことを女と信じ切っているとするなら……。やはり、湯木沢は「なんでも」できるのだ。

ジロウはむしろ、後者の方の理由で緊張していた。しかし、その緊張も、あっけなく解けることになった。

「着いたぜ」

湯木沢がそう言って、ブレーキを踏んだのだ。

外を見ると、車はすでにスナック「みなと」の前に停車していた。

歩いてても十分。たしかに車なら、あつという間に着

いてしまうわけだ。

ジロウは、そのあっけなさに、ちよつと肩すかしを食らわせられたような気分になった。今の緊張感をもつと味わっていたかっただ、と、そんな気さえしたのだ。

「……ありがとうございます」

そんな思いを振り切るように、今夜はもう一度ちやんと礼を言い、ジロウは車のドアを開けた。

と、そこで、湯木沢が呼び止めた。

「あの……」

「……？」

車を降りかかる姿勢のままジロウが振り向くと、湯木沢は口ごもるような小さな声で言った。

「今度、昼間、もし暇がとれるようなら、どっかドライブでも行かねえか」

act.5 Ferris-wheel Beauty

湯木沢がわざわざ新車を手に入れたのは、けっきよ
く、なにより、ジロウを誘うきっかけをつくることが
目的だったのだろう。

それは、ジロウにもすぐに察しがついたのだが、湯木沢が「今度、ドライブに行かねえか」と言い出した時、ジロウが即座にうなずいてしまったのは、ちょうどその前に感じていた、このまま車を降りることの心残りのようなものが原因だろう。もう少し湯木沢といっしよにいたい、もっと湯木沢の話が聞きたいという気持ちで、ジロウにそうさせたのだった。

しかし、そのあとで、ジロウは、それをひどく後悔

することになった。

自分は、抗争相手の組長を撃って、身を潜めているやくざだ。

警察は必死になって身柄を探しているし、相手の組からは命を狙われている。

それを、よりにもよって当の組の幹部——しかも狙撃現場を目撃している男——と、昼日中から、女に化けてドライブに出かけようというのだ。どう考えても、

これは、まともな話ではない。

だいいち、ジロウには、女装して外出する自信などない。

女の格好で人前に出るようになって、今のところ誰からも疑われていないようだとはいえ、それはいつも、暗い夜だけの話。あの物干し台での出来事を除けば、日中、その姿を人目にさらしたことなどないのである。

白日の下、湯木沢と至近距離で丸一日を過ごし、男

であることがばれないなどと考える方がどうかしているというものだ。

そう考え、ジロウは、なんとかその約束を覆せないものかと思った。

ところが、次の夜もその次の夜も、ぶっきらぼうな中にもうれしそうな表情を見せる湯木沢の前で、ジロウは、それを断ることができずに過ぎてしまった。女として、こんな場合、どういう断り方をすればいいの

か、それが、わからなかったこともある。

もちろん、そんなことを美佐恵に相談するわけにも
いかず、けっきょくジロウは、この二日間、一人で悩
みつづけた。

そして、悩んでいるうち……、

「ばれないためには、どんなふうにも振る舞えばいいの
か」

「どんな声で、どんな言葉づかいをすれば女っぽく見

せられるか」

「昼間なら、ピンク系を多くして、あまり濃くならな
いメイクの方がいいかもしれない」

「ここにある服は水商売っぽいのが多いから、どうし
よう。でも、あれとあれを組み合わせれば、昼間のド
ライブでもおかしくないだろう」

：：：などと、いつしか、そんなふうに思いをめぐら
せているのだ。

そんな自分に気づき、驚いて、もう一度、「自分は鬼頭のブタ野郎を撃ったやくざなんだ」というところから思考をやり直すのだが、けっきよくは、いつの間にか、悩みの中身がおかしな方向にずれていってしまっていた。

そうこうするうちに、三日目の、日曜の朝がきてしまった。

港湾作業がほとんど休みなので、日曜はスナック「みなと」も定休日。この間、ジロウがカウンターの厨房のことを覚えたこともあり、美佐恵が食事をつくりに来ることもない。それで、今日が、湯木沢との「ドライブの約束の日」になったのだった。

その朝、ジロウは、いつもよりずいぶん早く起きた。前夜、美佐恵のマンションから戻ったのは三時過ぎだったから、四時間ほどしか寝ていない計算になる。

起き出すと、ジロウは、階下でたんねんに洗顔し、ひげをあたった。

そのあと、二階の部屋に戻り、鏡台の前に座ってメークにかかる。基礎化粧品から初め、これまで以上に念を入れて顔をつくった。

手を入れすぎて濃くなったのが気に入らず、数度やり直してメークを完成させたジロウは、次に、衣装の中から、紺のベルベット地のワンピースを選んだ。ネ

ツクラインがスタンドカラーふうに詰まって、長袖が大きくブラウジングされているミデイ丈のものだ。

店用のものだから、思っていた通り、それだけではカジユアルな感じにはならない。そこで、ちよつと無謀かとも思いながら、白い荒編みレースのサマードレスを重ね着してみた。と、それが、ベルベットの取り澄ました感じをやわらげ、ウエストの部分を、やはりレース糸で編んだひもで蝶結びすると、上品だがキュ

トトな感じになった。

ウィッグをかぶり、一階のトイレの鏡の前に立って点検した。おかしなところはどこにもない。これなら、ドライブに出かける若い女性に見えるだろう。

じつはこの二日間、ずっと考えつづけていた服の組み合わせだったとはいえ、——いや、だからこそ、自分の中に、そんな、女物の服を想像でコーディネートできるセンスがあったことに、ジロウ自身が驚いてい

た。

そして、ジロウは、この時、生まれて初めて、自分の体が小柄で華奢であることをうれしく思ったのだった。

時計が九時半をまわった頃、湯木沢が例の車でやって来た。

一階の店で待っていたジロウが、車の音を聞いてド

とが進んだ。早春の朝の光の中でも、湯木沢の目には、ジロウが魅力的な女性として映っているようだった。

ところが、車の中で、ジロウは次第に緊張していった。

例によって、お互い話すきっかけがつかめず、黙ったままに時が過ぎていくのだ。その沈黙が、緊張を高めるのだった。

ただ、一度、湯木沢が運転しながら大きなあくびを

したのをとらえ、ジロウが「ゆうべも、遅かったですもんね」と言ったときだけは、湯木沢はしきりに照れて「ああ」と言っただけで笑った。それで、いくぶんかは雰囲気が和んだが、それでも、ジロウは、それ以上話を進めることができず、膝を揃え、その上に置いたバッグに両手を添えて、ただ体を堅くしているだけだった。

湯木沢もまた、いつもと同様、どこかとまどっているような表情で、黙って運転をつづけていた。

湯木沢のいでたちは、今日も、定番のタートルネットにジャケット。

横手組の幹部なのだから、組の仕切などでは、当然、黒のダブルというような格好もするのだろうが、どうやら、ふだんはこれを通していろいろだ。

出所してきたばかりだし、まだ大した役割を担っていないからかもしれないが、いずれにしても、ジロウのように、そのかつこよさだけにあこがれてやくざに

なつたわけでもなさそうだ。

なんだか間が持てず、助手席で、ジロウがそんなことを考えていると、信号待ちをしていた湯木沢が、急に、どこか焦ったようにうなだれた。

「……え？」

ジロウが不思議そうにそちらを見ると、湯木沢は顔を伏せたまま、「ちよつとな。組のものの車がいるんで……」と言ひ訳をした。

その言葉に、ジロウが前を見ると、反対車線で信号待ちをしている車列の中に、たしかに大型外車が一台停まっていた。

信号が変わり、そそくさと車を発進させ、やっと安心したらしい湯木沢は、「ほんとに、今の俺は、どうにかしているのかも知れんな」とつぶやいた。

「……え？」

その言葉の意味が理解できず、ジロウが聞き返すと、

湯木沢はため息をつくようにつぶけた。

「あんたも知ってると思うが、今、組は大変なことになってんだ。親が……、あ、いや、俺たちの言葉で組長のことをそういうんだが、親が殺されかかって、組中がその『かたきとり』に必死になってる。それなのに、その親の、いちばんの子のつもりだったこの俺が、それをほつといて、こんなことしてるんだからな」

どこか後ろめたそうに言ったその言葉に、ジロウは、

なんだから、自分が湯木沢に対して申し訳ないことをしているような気がしてきた。いや、たしかに、湯木沢にそんなふうには思わせる原因をつくっているのは、二重の意味でジロウ自身なのだ。

「……ごめんなさい」

そう感じたジロウは、思わず、湯木沢に謝っていた。それを聞いた湯木沢は、あわててつづけた。

「あ、いや、あんたが謝るすじあいのことじゃねえだ

ろ。どうにかしてるのは、俺なんだから」

海岸沿いの自動車専用道を一時間ほど走って、車は、ある岬の突端についた。

道路脇の、見晴らし台にもなっている小さな駐車場に車を停めると、湯木沢は、「悪いな。あんたみたい
な人が、どんなところがいいのか、まるでわからねえか
ら」と言った。

ジロウが車を降りると、海から吹いてくる風が意外に強く、スカートが、その風を受けていきなりふくらんだ。

「……あ」

ジロウはあわてて膝をとじ、腰をかがめるようにしてスカートを押さえた。その姿勢のまま、目を上げて湯木沢を見ると、彼は手すりのあたりで、こちらを振り返っていた。

その視線がひどく恥ずかしい気がして、ジロウはちよつと顔を赤らめた。

「下へ、下りてみねえか」

しやがみ込んだジロウの姿を、さほど気にとめていない様子の湯木沢の言葉に救われた思いで、姿勢を戻し——でも、ふたたびスカートがまくれあがらないように注意しながら——、近づくいてのぞき込むと、手すりの切れ目から岸壁づたいに細い階段がついてい

た。

ジロウは、湯木沢にしたがってその階段を下りた。吹き上げてくる風に、スカートを気にしていたせいもあるだろう。その途中で、潮に濡れた階段にヒールを滑らせ、ジロウは大きく体勢を崩した。

「……あっ」

と、先を降りていた湯木沢が振り向き、ジロウの二の腕あたりをさっとなつかんだ。

そして、そのまま、下の海岸まで、ジロウの体を支えながら下りてくれた。結果、ジロウは湯木沢にしがみつくような形になり、先刻より、さらに、頬がほてる思いがした。

海岸は、砂浜ではなく岩場だった。

岬の先端を二股に分けるように山が突き出し、谷間になっていくような場所で、そのおかげで、上の見晴らし台ほど風は強くない。

それでも、前面の海は太平洋に向かって大きく開いているので、外洋の大きな波が岩にぶつかり、時折、身長を越すほどのしぶきを上げる。

「：：：気持ちいい」

その開放感に、ジロウは、しぶきがかかりそうなほど海に近づき、深呼吸した。

先刻からつづく顔のほてりを、どうにか沈めたいという気持ちもあつてのことだ。

ところが、両手を広げて深く息を吸い込んだせいで、シリコンパッドで膨らませた胸が、水平線に向かつて大きく突き出されるような格好になってしまい、けっきよくまた、ジロウはひとり赤面したのだが。

「変わっちゃまってるかと思ったが、ここは前とおんなじだ」

後ろで湯木沢が言ったので、ジロウは振りかえって聞いた。

「……前？」

「ああ、ムシヨに入る前。暇ができると、よく一人でここまで来てたんだ」

こんな場所に一人でやって来るなど、組幹部には似つかわしくないことのような気がしてジロウは言った。

「海が、好きなんですネ」

「え、どうして？」

湯木沢は、ジロウの横に並んで立つようにして聞き返した。

「この前も、海を見てたって言ってたから。あたしを、助けてくれた時」

「……ああ」

湯木沢はまた照れたような笑いを浮かべたあと、「海で育ったんでな。特に、ここは、くにの海に似てんだ」と言った。

「……ふるさと、ですか？」

「ああ、熊野。紀伊半島の先だ。俺が生まれたのは、そのはずれの小さな港さ」

「港？　じゃあ、ずっと港町育ちなんですね」

「いやあ、港だったって、今の街とは大違いさ。秋の終わりから冬にかけて、黒潮を下ってさんまがやって来る時だけは活気づくが、それ以外ん時はさびれきった、百軒ばかりの漁師の村だ。俺は、そんな貧乏だったらし

い村がいやでな。それで、ぐれた末に、一人飛び出してきちまったってわけさ」

「じゃあ、家族はまだそこに？」

「ああ。おやじや弟は、今でも船に乗ってるはずだ」

「帰って、ないんですね」

「ずっと、な。こっちは二度もくさい飯食ってんだ。」

いまさら、帰れた義理じゃねえだろ」

湯木沢がそういったのを聞いて、ジロウは、海から

目をそらし、「……ふ」と笑った。

「ん、どうした？」

湯木沢は、そんなジロウのようすを気にとめ、聞いた。

「なんだか、あたしと同じような話だから。あたしも、耕さんとおんなじ。ぐれて、家を飛び出したはぐれもの」

「え、そうなのか。俺は、ちゃんとした家で育ったお

嬢さんかと思つた」

「……ふふ」

ジロウは、うつむいてかすかに笑いながら、首を振つた。自分が「お嬢さん」などと言われているのがおかしくもあつたのだ。

「でも、あんた、すれてないし、とても遊んできた女には見えんがなあ」

「そんなことない。子どもの頃から、相当なワルだつ

た」

「そうかなあ……。女として、初々しいっていうか、まるで、今生まれたばかりの赤ん坊みたいに汚れてなくて、誰かが守ってやってねえと傷ついちまいそうなの、そんな感じだがなあ」

湯木沢の言葉に、ジロウは、さらに肩をすくめるようにして首を振った。こんな自分が「汚れてない」などと言われたことが、なおさらおかしかったからだが、

一方で、「女として」は、たしかに「生まれたばかり」にちがいがなく、そんなふうに感じている湯木沢の感覚に、驚いたせいでもあった。

「でも、あんたみたいなのが、なんで、ぐれたり、家を出たりしたんだ？」

そう聞いてくる湯木沢の顔を一瞬見上げたあと、ジロウは海の方に目を戻し、口をとがらせるような表情で考え込んだ。そして、岩から上がる波しぶきを見つ

めながら、口を開いた。

「あたし：：、家が大つきらいだった。家の中で、いつも、あたし一人だけが他人みたいな気がしてたの。

お父さんも、お母さんも、誰も、あたしのことなんて振り向いてくれない。なんだか、ここにいちやいけな
いんだって、そんな気がしてたの」

ジロウは、そんなことをしゃべりだした自分自身に、ちよつと驚いていた。

やくざの世界に入ってからにはもちろん、実際に「ぐれて」いた時も、つるんでいた仲間たちにさえ、そんな自分の本心を語ったことはなかった。だいいち、自分がそんな気持ちを抱えているということ自体、ジロウ自身も、真剣に考えたことなどなかったのだ。

それなのに、湯木沢を前に、女言葉で話していると、それが、すらすらと出てくる。

「……それで、あたし、誰かにあたしのことを振り向

いてもらいたくて……、そんな世界がどこかにある気がして、……それで、家を飛びだしたの」

そう言った後、ジロウは、波を見つめたまま、大きくため息をついた。

湯木沢もまた、遠くの水平線を見たまま、黙っていた。

そして、しばらくしたあと、ぽつりと言った。

「俺じゃ……いけねえか？」

「……え？」

ジロウがふたたび見上げると、湯木沢は、その顔をゆつくりとジロウに向け、見つめてきた。

「あんたのこと、見ているの、俺じゃあ、役不足か」
一瞬、湯木沢の言った意味が分からず、ジロウは、湯木沢の顔を見つめ返した。

と、突然、湯木沢は、ジロウの体に手を回し、抱きしめてきた。

「……え!？」

驚くジロウを抱きすくめたまま、湯木沢は、その顔を近づけた。

混乱したまま、それに応えそうになっていたジロウは、湯木沢の口が、自分の唇に触れそうになる瞬間、我に返った。

「あ、……だめ」

（俺はいつたい、男同士で何をやろうとしてるんだ。

だいいち、この男は：：）

ジロウが湯木沢の胸にあてた手を強く伸ばし、突き放すと、一瞬だけそれに逆らって力がこもった湯木沢の腕は、すぐにすごすごと引き下がり、ジロウの体を解放した。

驚いた表情のまま、ジロウが見ていると、湯木沢は、岩場の上で目を泳がせたあと、肩を落として横を向いた。

帰りの車の中は、朝方より、さらに気まずいものになつた。

ハンドルを握つた湯木沢からは、落胆した、しかも、どこか居心地悪そうな、落ち着きなさそうな気配が伝わってくる。

ジロウも、しばらくは、そんな湯木沢を見ることができず、窓に顔を寄せ、過ぎ去る景色をながめている

ほかなかった。

車が専用道を降り、街中に入った頃になって、やつとジロウの気持ちに、若干のゆとりが生まれてきた。

湯木沢はきつと、ずいぶん思い切って、あんな行動に出たにちがいない。

自分も女に接するのが得意な方ではないが、湯木沢はそれにも増して、不器用なタイプだ。それが、思い切って女にキスしようとして、そして、あんなふうに

拒否された。もし、逃げ出せるものなら、すぐにもここから消えてしまいたい気分だろう。

そんなふうを感じ、ジロウが湯木沢の方にそつと目をやると、湯木沢は前方を見ていたにもかかわらず、それを察知し、びくりと緊張した。

ジロウは、そんな湯木沢が、なんだかひどく気の毒な気がしてきた。そして、そんな様子をちらちらと見ているうち、いじらしいような感覚を覚えはじめてい

た。

車は、十年ほど前に埋め立てられ築港された、新港のあたりを走っていた。バブル時代の博覧会ブームの時、そこで開かれた博覧会の跡地が、今は遊園地になっている場所だ。

スナック「みなと」のある旧港までは、あと数分。

まだ正午前だというのに、気まずい雰囲気のまま、今日のドライブは終わろうとしていた。

これでいいのだろうか、とジロウが思っている時だった。

湯木沢が、大きなため息をついた後、どこかおどおどした様子で言った。

「厚かましいと思うだろうが、これで最後にするから、いっしょにあれに乗らねえか？」

湯木沢の指し示した方を見ると、そこには、陽に光る、遊園地の大観覧車があった。

強面こわもての湯木沢にはまるで似合わない、そのかわいらしい願いに、ジロウは、思わず「くすつ」と笑ってしまつた。

たとえ嫌われたにしても、あんなことをして機嫌をそこねてしまつた若い女の子の気持ちを、なんとか和ませたいと、湯木沢は思ったのだらう。それで、考えた末に、他にいい手も思いつかず、遊園地に誘つたわ

けだ。

ジロウは、もちろん「若い女の子」ではないし、けっして、湯木沢の行為に対して「機嫌を損ねた」わけでもなかったのだが、そんな湯木沢をいよいよいじらしく感じたことで、先刻の動揺から、すっかり立ち直っていた。

湯木沢は、遊園地に入場すると、その言葉どおり、すぐに観覧車の切符売場に向かい、そのあと、親子づ

れが並ぶ列の最後尾について、こちらを手招きした。その姿を見ているうち、ジロウは、なんだか妙に弾んだ気持ちになっていた。

五分ほど並んで、順番が来て観覧車に乗り込むと、湯木沢はジロウの隣ではなく、向かい合う席に腰掛けた。

「こんなの乗るの、何年ぶりだろう？」

昇りはじめた観覧車から外を見ながら、ジロウは、

遙か昔、たぶん小学校の一年か二年くらいの時、両親や兄とどこかの遊園地に行った記憶をたどりながら、言った。

「俺は、たぶん、初めてだな。子どもの頃は、近くにこんなところはなかったし」

湯木沢の言葉に、ジロウは、そちらを見て微笑んだ。と、湯木沢は、ジロウの顔を見つめ返し、そろえた膝の上に両手を置いて、「さつきはすまなかった」と

頭を下げた。

ジロウが微笑んだままの顔で、小さく首を振ると、湯木沢は、「俺はやっぱり、どうにかしてるんだ」と言った。

そして、照れたように窓の外を眺め、言葉を継いだ。「……おつとめ終えて戻ってはみたが、たった二年のことなのに、組は昔とすっかり変わってた。いや、俺自身が入所中にずれちゃったのかもしれないねえ。とにかく

く、どうも昔みたいな気持ちになれねえ。昔なら、親がやられたら、いちばんにドス持って飛び出してたはずの俺が、どこかで冷めちまつてんだ。今、組ん中で、俺のいる場所がなくなっちまつてるってことは、あるかもしれないねえ。だが、どうもそれだけじゃねえ気もする。俺自身の気持ちも、その騒ぎを外から見てる感じなんだ。：：もしかすると、それは、あんたに会ったせいかもしれない」

「……」

先刻からの湯木沢の行動に和やかな気持ちになっていたジロウだったが、今の湯木沢の言葉に、今朝がた感じた、どこか申し訳ないような気分が、ふたたび舞い戻ってきた。

そのせいで、自然に表情が曇ったのだろう。ジロウの顔に目を戻し、それに気づいた湯木沢は、焦ってつけくわえた。

「……あ、いや、そうじゃねえんだ。口べただから、また、あんたを傷つけるような言い方になっちまったかもしれんが、俺は、あんたに会えて、うれしかったんだ」

その言葉に、ジロウは伏せていた目を上げて、ふたたび湯木沢を見た。

「俺だって、こんな稼業をつづけて十五年以上になる。これまでにねんごろになった女だって何人もいる。だ

が、たいていは、俺っちみたいなの奴の扱いをよく知ってるあばずれた女たちだった。俺にしたって、その方がめんどろはなから、適当に遊んできた。女なんて、しよせんそんなもんだと思ってた。俺にとっちゃあ、女なんかよりもっと大事なもんがあるんだって、粹がってたからな。でも、あんたはちがう。あんた自身はさつきあんなふうに言ったが、そんなことはねえ。あんたは、きれいだ。見かけもそうだが、心ん中がきれ

いだと思う。そんなにか細くて傷つきやすそうなのに、計算尽くで男に媚びたりすることのけっしてない女だ。俺は、あんたのそんなところに、一目惚れした。あんたを見た時から、それまで俺が大事だと思ってきたもんが、どうでもよくなってきちまったんだ。そんなことは、前の俺からは想像もつかねえ。俺は、あんたに会って、どうにかしちまったんだ。でも、俺は、自分があるふうに感じてることが、うれしいんだ」

ふだんは無口な湯木沢が、そこまでを一気にしゃべった。

観覧車は、すでに、頂上に達しようとしていた。

窓の外を見ることさえ忘れて、湯木沢のことを見つめていたジロウは、席を立った。そして、ぽかんとした表情で見上げてくる湯木沢の隣にその体を沈めた。

ジロウは、けっして、我を忘れていたわけではない。自分が、今、何をしようとしているか、一方ではよく

わかっていた。でも、それ以上に、湯木沢の言葉に感応していた。

湯木沢は、自分と同じ傷を持った人間だ。そして、今、その傷を癒し、傷を忘れて、生まれ変わろうとしている。

そして、ジロウ自身にとっても……。

もし、自分にも生まれ変わるチャンスがあるとしたら、それはたぶん、湯木沢なのだろう。

理屈ではなく、そう感じた。

ジロウの側も、任侠だとか、組だとか、そんなことは、どうでもよく思えてきた。そして、男とか女とか、そんなことも……。

「いいよ」

近くで見つめてくる湯木沢の眼差しを見つめ返しながら、ジロウは言った。

「……え？」

湯木沢が、ちよつと不安そうな表情に変わった。

「……キス、しても」

ジロウがそう言っても、湯木沢はまだ戸惑っていた。

「キス、して」

ふたたび、ジロウが言った。

太い湯木沢の腕が、ジロウの体を包み込んだ。

押しあてられる湯木沢の唇に応えながら、ジロウは

静かに目を閉じた。

頂上に達した観覧車の天井に、海からの反射光がきらきらと輝いて、揺れていた。

目を閉じる直前に見たその光が、残像となって、ジロウの脳裏に踊った。

観覧車から降りたあとも、ジロウと湯木沢は、その遊園地でしばらく遊んだ。

顔つきからはどう見てもその筋の男にしか見えない

湯木沢と、若い美人の女の子に見えるジロウの取り合
わせは、日曜日でにぎわうまわりの人々からは奇妙に
映ったかもしれない。でも、二人にとつては、そんな
ことは気にならなかつた。

ジロウは、その間、今朝までとはくらべものになら
ないほど積極的に、女として振る舞つた。

ジロウは、なにより、湯木沢のイメージしていると
おりの女になりたいと思つていたのだ。そして、そう

願ううち、いつしか、自分が、本当は男であることすら忘れていた。

時計が昼をずいぶんまわった頃、二人はやつと、自分たちが空腹であることに気がついた。

しかし、パーク内のレストランはまだどこも満員だった。それで、少々肌寒くはあったが、カフェテラス形式のフードショップで、ファストフードを食べるこ

とにした。

チキンナゲットやフランクフルトを二人で選んで買
い、アルミパイプでできたテーブルでそれを食べてい
るとき、ジロウは、湯木沢がどこか物足りなげなの
に気がついた。

「……あ、ビールかなんか、買ってこようか？」

ジロウが聞くと、湯木沢は、思っていたことを言い
当てられたとでもいうように少し照れ、「でも、こん

なとこにはねえだろ」と言った。

「さつき、飲んでる人、いたわよ。ちよつと待っててね。探してくるから」

ジロウは、そう言って、どこか浮き浮きした感じで席を立った。

自分が湯木沢の気持ちを察することができ、そして、湯木沢のために何かができるということが、無性にうれしかったのだ。

スカートをはらひらさせながらその場を離れる後ろ姿を、きつと湯木沢は見つめているだろう。そう感ずるだけで、胸が弾む思いがした。

フードショップの裏手にまわり、ずらりと並ぶ自販機コーナーのいちばんはずれに、一台だけビールの販売機があるのを見つけたジロウは、そこで、湯木沢用に中缶と、自分用に小缶を買った。

取出口からそれを取り出し、身を起こした瞬間だっ

た。

ジロウは、そのビールを思わず落としそうになるほど驚き、体を硬直させた。

ジロウのすぐ横を、サングラスの男が通り過ぎたのだ。

それは、ジロウの組の若頭、坂木だった。

ふだんのいでたちとはちがうラフなジャケット姿だったし、坂木と日曜の遊園地がイメージとして結びつ

かず、一瞬、人違いかと思ったが、あの人並みはずれた怒り肩は、やはり坂木にまちがいないようだ。

ジロウは、——今の格好からすれば、そんな必要はないのだろうが——自販機に身を隠すようにして、その後ろ姿を目で追った。

と、坂木は、先刻、ジロウと湯木沢が乗った観覧車の切符を買い、ひとり、その列に並んだ。どう見ても、連れがいるようではない。

ジロウは、そんな坂木の様子を呆然と眺めていた。さつきより列が短いせいか、すぐに坂木の番が来て、坂木は、やはりひとりひとりでその箱に乗り込んだ。

そこで、ジロウは、首を傾げながらも、湯木沢のこ
とを思いだし、席に急いだ。

「ごめんなさい。なかなか見つからなくて」

急場に思いついた言い訳とともに戻ると、なぜか、湯木沢は、開いた膝にひじをついて、うなだれるよう

にしていた。

「……どうしたの？　気分でも、悪いの？」

驚いて、しやがみ込むようにしてジロウが聞くと、湯木沢は、人目を避けるように小さく首を振り、つぶやいた。

「やべえんだ。また、組のやつが……」

その言葉に、立ち上がったジロウがまわりを見回すと、フードコーナーの脇の人混みを、やはり、見知っ

た顔の男が歩いていった。

鬼頭組の若頭、海江田だ。

「……え！」

思わず小さな声が漏れた。

その声が、湯木沢に聞こえたのではないかと心配になつて、見ると、湯木沢は、さらに肩を落として小さくなつていた。なんとか海江田をやり過ぎそうと思つているようだ。

それで海江田に目を戻すと、海江田は、二人のすぐそばを通り過ぎ、そのまままっすぐ歩いていった。やはり、ふだんの姿とはちがう、目立たない格好をしている。

海江田がめざしていたのも、例の観覧車だった。

そして、さっきの坂木とまったく同じように、切符を買い、やはりひとりで観覧車に乗り込んだのだ。

目を凝らして見上げると、坂木の乗った箱は、どう

やら真上に来ているようだ。つまり、二人は、ちょうど対角線上の位置の箱に乗ったことになる。

海江田の方の箱を見ると、海江田は、観覧車の円の内側になる窓際に立って見上げながら、ジャケットのポケットから何かを取り出した。

それで、ジロウは、一瞬、海江田が、坂木を撃つために拳銃を出したのだと思った。

しかし、そうではなかった。

海江田は、取り出したものを何度か指で叩き、耳に当てたのだ。

それは、携帯電話だった。

ふたたび坂木の箱を見上げると、降りはじめたその中でも、坂木が携帯電話らしきものを耳に当てていた。やはり、内側に立ち、ちょうど海江田の乗ったあたりの箱を見下ろしている。

どう考えても、それぞれの電話の相手は、お互いど

うしだとしか思えない。

ジロウがそう思っていて見ていると、観覧車はゆっくりとまわり、それぞれの箱がちょうど同じく位の高さになった。

やはり、坂木と海江田は、観覧車の中央をはさんで、お互いどうしを見つめ合いながら話していた。

(……どういう、ことなんだ?)

ジロウが呆然としたまま考えていると、顔を上げ、

海江田の行方をきよろきよろとうかがっていた湯木沢が、ジロウの体を抱きかかえるようにして、強引に歩き出した。

「悪いが、もう戻ろう」

湯木沢から、なんだか力尽くじみたやり方でそんなふうになされていることにどぎまぎしながらも、ジロウは、漠然とした不安を感じていた。

（自分や湯木沢の知らないところで、何かが起こって

い
る。
)

act.6 Stylish Ma'am

「なあ、ママ。こんな古ぼけた店で、しかも借地だつてのに、三百万出そうってんだぜ。悪い話じゃねえと思うがな」

「古ぼけた店で悪かったね。こんな店でも、なじみの客はたくさんいるんでね。そんな中には、知つてのとおり、あんたの組の人間だつていゝんだよ。私や、そんな客たちと楽しく商売できりや、それでいいんだ。ここを出ていく気なんざ、さらさらないね」

「そんな欲のねえこと言うなよ。三百万ありや、もつといい場所に店借りられっじやねえか。きつと、筋のいい客だつてつくぜ。ママだつて、まだじゆうぶん美

人なんだしさ」

「よけいなお世話だよ」

店から聞こえるやりとりを、ジロウは階段の途中に立ち止まって聞いていた。美佐恵と話しているのは、どうやら、鬼頭組の人間らしい。

まだ、午前十時前。いつもなら、客はもちろん、美佐恵だって店に来ている時間ではない。だからジロウも、ついさつきまで寝ていたのだ。

それが、階下から聞こえる時ならぬ声で目を覚ました。不審に思つて階段を降りかけると、話している一方が美佐恵であることがわかつた。それで、とりあえずは安心したが、まだネグリジエ姿のままのジロウは、それ以上降りるわけにもいかず、けつきよく、ここで立ち聞きするような形になつてしまつたのである。

「地主からはオーケーもらつてんだ。あとは、ママが判子ひとつついてくれりゃあ、それでいいんだがな」

「だから、私や、いやだって言ってるだろ。だいたい、あんた、十年前ならいざ知らず、今どき、地上げなんて流行ないだろ」

「何度も言っつてっじゃねえか。これは、地上げなんかじゃねえ。うちの組事務所が手狭になってよ。それで、建て替えるから、どうせなら、裏のこの地所もぶち抜いてでっけえビル建てようって話になったんだ」

「さあ、それはどうだかね。聞いた話によりやあ、ふ

た筋向こうの床屋やそば屋も、あんたたちは追い出しにかかっているらしいじゃないか。あそこは、あんたんとこと地つづきでもなんでもないだろ」

「いやあ、まいったな。そんなことまで知ってんのかい。まあ、そりゃ、いろいろあつてよ」

「ほらごらん。どうせ、市がやろうとしてる旧港の総合開発とかにあてこんで、あんたら、なんかたくらんでんだろ」

「ほんと、ママは地獄耳だなあ。まあ、そうかもしれない。でも、それは、もっと上の連中が考えてることだよ。俺っちみてえなサンピンにや、ほんとのところ、よくわかんねえんだ」

「よく言うよ」

「でもよ、それはともかく、最近このへんはいろいろ物騒じゃねえか。あっちこちで、チャカがはじけてんだぜ。それ考えたって、こんなところ、早く出てった方

がいいんじゃないかねえのか」

「ほんと、よく言うね、あんた。そりゃ、いったい誰のせいだい」

「俺っちのせいじゃねえ。横手組の奴らが悪いんじゃないかねえか。うちの組長撃って、喧嘩しかけてきたのは向こうなんだぜ。ここだって、いつ、連中がうちの組へなぐり込むかわかったもんじゃないやねえんだ。奴ら、仁義もなんもあつたもんじゃないやねえから、一般市民だってな

んだって平気で巻き込むぜ」

「私にや、どっちもどっちに見えるけどね」

「そうかい、それなら、俺っちが横手組の仕業に見せかけて、この店めちやくちやにすることだってできるってこった。悪いこと言わねえから、出てった方が身のためだぜ」

「ほう、最後は脅しかい。いいかい、あんだだって知ってるだろうけど、私や、やくざなんて、恐くもなん

ともないんだからね。もういいから、とつとと帰つとくれ。私や、ちよつと出かける用事があつて、ついでにここに寄つただけなんだ」

「ち、まったく、食べねえ女だ。ま、いいや。今日のところは帰るが、また、話しに来るからな」

「何回来ても、時間の無駄だよ」

美佐恵のその言葉を最後に、ドアのカウベルの音がして、鬼頭組の男は出ていったようだ。

それでジロウは、やっと階段を降りた。

「お早うございやす」

カウンターの中で何かやっていた美佐恵は、その声に顔を上げた。

「あ、おはよ。悪いね。起こしちまったかい？」

「今のは、鬼頭の？」

ジロウが聞くと、美佐恵は、さもいやそうな顔で「ああ」とうなずき、つぶけた。

「ちよつと前から、あんな話持ってきてんだ。さつき、ここに入るところ、あいつに見られちゃってね。客もないし、いいチャンスだと思ったんだろ。さっそく、やってきたってわけさ。表じゃ『組長のかたきとり』だとか言つてドンバチやってながら、裏じゃきつちり、あんなシノギをやってんだからね。あきれるよ、まったく」

美佐恵はそう言うと、また、目を手元に戻し、なに

かをはじめた。どうやら、料理をつくっているようだ。それでジロウは、先刻から疑問に思っていたことを聞いた。

「ママ、今日は、なにかあるんですかい。こんなに早くから」

「うん、ちよつとね……」

美佐恵は、そこで一拍おいたあと、照れたように言
った。

「ホテルに隠れてるあの人に、昼御飯でも届けてやろうかと思つてさ。いつもこそそこそルームサービスですましてるらしいから、たまにや私の手料理でも食べたんじゃないかってね。家で作くつてもいいんだけど、ここのが材料揃つてるから、それで……」

照れながら言い訳し、いそいそと榎本のための料理をつくる美佐恵の姿は、いつもの気っぷのよさとはまたちがい、ジロウの目には妙にかわいらしく見えた。

しかしそれは、ジロウが男の目で見て「かわいい」と思ったというのとは、ちよつとちがうようだ。

ジロウは、そんな美佐恵の姿にどこかで共感しているのである。最近の湯木沢との関係の中で、ジロウ自身が感じている心の動きと共通するものがあるからこそ、その姿を「かわいらしい」と思うのだ。それは、いわば「同性としての共感」と言ってもよかつた。

もちろん、ジロウ自身が明確にそれを意識している

わけではなかったが、そんな感覚を抱いて、ジロウは微笑みながら、しばらく料理する美佐恵を見ていた。

と、美佐恵がそれに気づき、照れ隠しもあってか、いつもの口調で言った。

「あんた、いつまでネグリジェのまんまでぽかんとっ立ってんだい。顔洗いに来たんだろ」

「あ……へい」

美佐恵の言葉に、ジロウは、あわててトイレに入っ

た。

しばらくして、トイレの流しで顔を洗って出てきたジロウは、ふたたび美佐恵の前に立って、ちよつとためらったあと、声をかけた。

「あの、ママ……」

トイレの中で、なにかを思いついたという感じだ。

「ん？　なんだい？」

「俺も……ついてっついていいですか？」

「え、あの人んどこへかい？」

「へえ、兄貴ともしばらく会ってないし……」

「さあ、どうだろう。あんたが昼日中から街んなかを歩きまわって、あの人に会いに行くなんて、ヤバくないかね。……まあ、鬼頭の連中にあの人の居場所がばれてるわけじゃないし、あんたも、女の格好して行きやあ、だいじよぶかもしれないけど」

「へい。そう思うんですよ。それに……」

「なんだい、まだ、なんかあるのかい？」

「ちよつと、ママにつき合ってもらいたいこともあつて……」

「……ん？」

「あの……、ゆうべ、ママは、給料だつて言つて、金をくださつたじゃないですか」

「ああ、あんたよくやってくれてるし、あんたのおか

げで、ここんとこ、売り上げもずいぶん増えたしね。

私、そういうことはきちんときたいからさ」

「いえ、かくまっていただけで、その上、金までいた
だけるなんて、俺、思っただけだから……」

「だって、あんたの弱みにつけ込んで、ただ働きさせ
てるなんて、思われたくないじゃないか。……で、そ
れが、あの人のとこへ行くことと、どんな関係がある
んだい」

「いえ、ちよつと……、その金で、買いたい物が……」
「ん？　買い物につき合えつてこと？　でも、なにを……？」

「いえ、その……」

ジロウは、そこで、うつむいてもじもじと口ごもつた。

「なんだい、なにが買いたいっていうんだい」

「……」

美佐恵に聞き返されても、ジロウはまだ、もじもじしている。

「あんだ、いったいなにが言いたいんだい。はつきりお言いよ」

「その……、夜、店へ出る時のは何着もあるから、いいんですけど、あの……、昼間、着てられるような服が、あんまり……」

「えっ……、あんだ、お給料で女物の服を買いに行き

たいの？」

「……へえ、そんなの買ったことねえし、俺、さっぱり要領わかんねえから……」

美佐恵は、赤い顔でうつむくジロウを、驚いたように見返した。

「しかし、あんたも考えたもんだね。たしかに、その服、そんなふうに着てれば、昼間でもだいじよぶだよ

ね」

市の中心部へさしかかったタクシーの中で、美佐恵は、さつきから何度も感心していることを、また口にした。

繁華街への女装外出でちよつと緊張気味のジロウが着ているのは、十日ほど前の日曜日、湯木沢と出かけたドライブの時に着ていたのと同じ服の取り合わせだ。

じつは、あの次の週、つまり、ついこの間の日曜日にも、ジロウはまた湯木沢とドライブに出かけている。そして、その時も、同じ服を着て行った。

おそらく、今度の日曜も、湯木沢は誘ってくるにちがいない。そこへ、またもや馬鹿のひとつ覚えのように同じ服で出て行くのは、「若い女」として、いくらなんでもおかしい。しかし、とはいえ、これ以外の服は、日中には着られないようなものばかりなのである。

それで、ジロウは困っていたのだ。

だから、美佐恵について行こうと思った理由は、最初に言った榎本に会いたいなどということではなく、そもそも後者の方だったのである。

「まだ昼までには時間があるから、先にデパートでもまわろうか」

美佐恵の提案に、ジロウは照れながらも、どこかうれしそうにうなずいた。

「ママ、こんなの、どうでしょう？」

「あんた、やっぱりいいセンスしてるわ。それなら、あんたに似合うと思うよ」

ジロウがハンガースタンドからはずして手にしているワンピースを見て、美佐恵はまた感心したようだ。

「じゃ、これにしようかな」

「うん、でも、一度着てみた方がいい」

「……え」

「サイズちがいだとあとで後悔するから」

デパートのレディス・ブランドのインショップで、ジロウは、美佐恵に背中を押されるようにして、試着室の前まで連れて行かれた。と、いつの間にか近づいてきた売り子が、そのカーテンを開けてくれた。

「どうぞ」

ジロウがおずおずと中に入ると、売り子がカーテン

を閉める。

これまで一度も足を踏み入れたことなどないデーパートの女物売場、しかも、その試着室にすることで、ジロウは妙に緊張していた。

もちろん、試着室なのだから、誰も見ている者などいないのだが、カーテン一枚の向こうには、買い物をする女たちの声が聞こえている。そこで、今から服を脱いで着替えると思うと、なんだかひどく恥ずかしい

気がするのだ。

等身大の鏡に映った自分の姿を確かめるように見たあと、ジロウは、やおらレイヤードのレースのボタンをはずしていった。

つづいてベルベットのワンピースも脱ぐと、鏡の中には、ブラジャーとショーツ姿の「女」が立っていた。

このところ、週に二度は体毛を剃っているし、肌はもともと白い。多少骨張ってはいるが、細身で華奢な

体格は、パッドで膨らませたブラもおかしくは感じさせない。

いつもの自分の部屋や美佐恵のマンションのバスルームではなく、こんな場所で見ても、不自然なところのほとんどない自分の姿に安心したように、ちよつとうなずくと、ジロウは、持ってきたワンピースを着た。

春物だが、まだ早春なのでモヘア地。色はクリーム。ネックの部分で折り返された大きな円形の襟が、まる

で胸当てのように広がっている。スカート丈は、膝上十センチくらいで、裾の部分がすぼまった形でゴム編みされている。そのぶん、腰のあたりの生地がふくらみ、ボリュームのないヒップをうまくカバーしてもらった。

コケテイツシュだが上品な感じのそのワンピースは、ジロウをいよいよ、あの日湯木沢が言っていた「お嬢さん」という感じに見せていた。

「……できたの？」

ジロウがしばらく鏡に見入っていたせいだろう。外から美佐恵が心配したように声をかけてきた。

「……あ、はい」

ジロウが、おずおずとカーテンを開けると、前に立っていた美佐恵が、ちよつと驚いた顔をした。

「おかしい……かしら？」

その表情に心配になってジロウが聞くと、美佐恵は

あわてて首を振り――

「ううん、すごく似合ってるから」

と言った。

「ほんとにお似合いですよ」

女店員も、けっして営業的なお世辞ではない感じで
そう言った。

ジロウは、照れもあり、それにもう一度鏡を見てみ
たくなつたこともあつて、くるりと後ろを向いた。

と、美佐恵が、背後に近づき、まだ少し襟の中に入ったままになっていたウィッグの髪をなおしてくれました。

「この服に合う、靴やバッグも買わなくちゃね」

鏡に見入ったまま美佐恵の言葉にうなずくと、ジロウはさらにつけ加えた。

「でも、もう少し、他の服を見ていってもいいかしら」
女店員がそばにいることもあったが、その言葉は、

美佐恵に対しても、自然と女言葉になつていた。

けつきよく、そのデパートで、ジロウは美佐恵からもらった金のほとんどを使つてしまつた。そのワンピースと、他にスーツが一着、さらにスカートとブラウスを一着ずつ、それに靴が一足である。

そこで金がつきてしまい、バッグと、それにイヤリングを美佐恵が買つてくれた。

ジロウがしきりに悪がると、美佐恵は、「いいんだよ、これだけ似合ってれば、お金の使いがいもあるつてもんだ」と言った。

「それに、あんたのこと、なんだか自分の娘みたいなのががしてきてね」

そんなふうに買い物に時間を費やしていたせいで、榎本が身を潜めているホテルに着いたのは、一時半を

過ぎた時刻になつていた。

「悪かったね、遅くなつちまつて」

そう言いながら美佐恵が部屋に入ると、ベッドの上に寝ころんでいた榎本は、半身を起こし「ああ」と言った。そして、そのあと、美佐恵につづいてたくさんの紙袋を持って入ってきた「娘」に目を見張った。

「おめえ……、ジロウ……？」

その言葉には、驚きを通り越したものがある。

「……兄貴、おひさしぶりです」

ジロウは、ちよつと美佐恵の陰に身を隠すようにして、小さな声で言った。

榎本は、さらにそれをのぞき込むように見返してきた。

無性に恥ずかしくて、ジロウはその視線を避けるように、入口のクローゼットのそばに、持っていた紙袋を置いた。

「この前一度見てるからわかったが、そうじゃなかったら、俺だつて、まずだまされてるな」

榎本は、いまだ驚きからさめやらぬ口調でそう言った。

ジロウは、先刻最初買ったワンピースをそのまま着て来ていた。だから、袋を置く時にちよつとかがんだせいで、そのすぼまった裾が少しずり上がってしまった。それで、あわてたジロウは、両手で裾を引き下

ろすようにした。さらにそのあと、場が持てなさそうに目を泳がせ、大きな襟を直すような仕草をした。

「ね、すっかり女っぽくなっちゃっただろ」

美佐恵が言った。その声音には、どこかそれを自慢するような感じも混じっている。

「ああ。仕草まで、まるで女だ」

兄貴分である榎本の前で、そんなふうには振る舞っているのは恥ずかしいのだが、恥ずかしいと思えば思う

ほど、よけいにそんな振る舞いが出てしまう。この間ずっと、「女」として人目に触れてきたせいで、こんな時、かつての自分ならどう振る舞ったのか、よくわからなくなっている感じなのだ。もつとも、かつての自分なら、そもそもこんな格好など、するわけではないのだが。

「ジロウ、おめえ、店に出てるんだってな」

榎本の言葉に、ジロウはさらに照れてうつむいたま

ま、肩をすくめるようにうなずいた。

榎本がこんなふうに入目を避けた暮らしをしなればならない原因をつくった自分が、そんなことにうつつを抜かしていることを、責められたような気がしたからだ。

「しかし、おめえ、やっぱり道をまちがえたのかもしれんな。極道なんかより、そっちのが、よっぽど似合ってるぜ。しかも、びっくりするくれえ美人だしな」

榎本は、けっして嫌みなどでなく、本心からそう言ったのだが、ジロウにはやはりそうはとれず、身を小さくしながらも、不服そうな表情をした。それでも、その姿では、若い娘がすねているようにしか見えなかった。

「あんだ、おなか減っただろ」

榎本がまだジロウに見とれていることに、ちよつと妬けたのかもしれない。美佐恵は話を變えらとでもい

うようにそう言つて、ベッドにあぐらをかいている榎本の隣に腰掛けると、店をつくつてきた料理の重箱の風呂敷をといた。

突っ立っていたジロウは、さらに場が持てず、きよろきよろと室内を見回したあと、窓際のテーブルにポットと急須があるのを見つけ、そこに近寄つて、お茶をいれはじめた。

その窓からは、この街のメインストリートと、そこ

からちよつと引つ込んだ位置にあるホテルの車寄せが見えていた。急須にポットの湯を注いでいるとき、その車寄せに、見覚えのあるパールメタリックのベンツが入ってくるのが見えた。

(……ん？ 組長？)

ジロウはそう思ってそちらを注視したが、この位置からでは、降りた人物の姿はよく見えない。

「あんだ、ずつとこの部屋に閉じこもってるのかい？」

美佐恵の声に振り向くと、すでに榎本は美佐恵の手料理を食べはじめていた。

それで、ジロウは急いで湯飲みを盆にのせた。

「ああ、時期が来るまで姿を潜めてろってのが、組からの指示なんadena」

「時期って、いったいなんの時期だい？」

「さあ、若頭にでも聞いてくれ」

榎本の言葉からは、こんな暮らしにうんざりしてい

る様子と、若頭の坂木に対する複雑な感情がにじみ出ていた。

榎本がここに身を隠すことも、おそらくは坂木の意向なのだろう。

極道の仁義を重んじる榎本が、若頭である坂木への感情を露骨に出すことはまずなかったが、ほぼ同時期に杯をかわした兄弟分が、ひとり、組で羽振りを利用かせ、自分にもあれこれ指示してくることに、いい感情

を抱いているはずはなかった。

そして、坂木の側は、もっと露骨に、榎本の存在を煙たがっているようだ。

それは、組の構成員みんなが薄々感づいていることだった。さらに、ジロウの観察するところ、最近では、古くからの幹部をのぞいてほとんどの構成員は、完全に坂木の側になびいているようにも見えた。組の中で榎本の影響力が、徐々に弱まって、孤立している感

じがするのだ。

その上、自分があんな中途半端な狙撃事件を起こしたせいで、榎本は身を隠さなければならなくなったのである。

ジロウは、さらに申し訳ない気持ちを感じながら、茶を運んだ。

「あつ、ありがとう」

茶を受け取りながら美佐恵が言うと、榎本がつづけ

た。

「しかし、そんな姿も、どう見ても若い娘だなあ」

と、その時、ジロウは、美佐恵がなにかを言いたげにこちらを見たのに気づいた。

それは、なにかたしなめるような、それでいて、どこか甘えるようなまなざしだった。

窓際のテーブルに盆を戻しに行きながら、その意味を考えていたジロウは、やっと、自分がひどく野暮な

ことをしているのに気がついた。

どう考えても、美佐恵が、ただ料理を届けるためだけにここに来たとは思えない。榎本と美佐恵は男と女、しかもここは、ホテルの一室なのである。

美佐恵の眼差しは、「少しは気を利かせなさいよ」という、いわば「女どうし」の目配せだったにちがいない。

それに気づいたことでちよつとおたおたしたジロウ

は、椅子の上に置いた真新しいバッグをとると、あわてて言った。

「ママ、あたし、のどが渴いちやったわ。ロビーの喫茶店に行ってるわね」

そして、そそくさと部屋を出た。

廊下へ出て、そこで、ジロウはまたなにか気づいたようにハッと立ち止まり、しまったばかりのドアを振り返った。

いくらあせっていたとはいえ、それに、先刻のデパートからの雰囲気を持ち越していたせいだとはいえ、あの榎本の前で、まったくの女言葉を使ってしまうなんて！

自分の行動のあれこれのちぐはぐさに動揺しながら、ジロウが一階のロビーまで降りてくると、そこには、さらにジロウを動揺させることが、次々に待って

いた。

まずジロウは、美佐恵に言ったように、ロビーのコーナーにつくられたテイーラウンジに入ろうとした。そして、そこで、体を硬直させたように足を止めた。

そのラウンジの中ほどの席に、横手組二代目組長、横手利一がいたのである。

(そうか。やっぱりさっきの車は……)

ジロウはその姿に緊張し、ラウンジに入るのはやめ、

その場を離れた。

もちろん、この間の経験からいっても、今の格好なら、まず気づかれることはないだろう。しかし、横手組で最も下っ端であるジロウにとって、組長は、やはり「近づきがたい存在」なのである。

けつきよくジロウは、そのティーラウンジとは反対側のロビーに置かれたソファに座って時間をつぶすことにした。

そのワンピース姿でホテルのロビーにいても不自然ではないように――たとえば、誰かと待ち合わせでもしているように――、ジロウはソファに浅く腰掛け、そろえた膝の上にバッグを置いて、パンプスの脚をちよつと斜めに傾けた座り方をした。こんなことがすんなりできるのも、湯木沢とのデートを二度も経験しているからにちがいがなかった。

オープンスペースになっているティールラウンジは、

そこからもよく見渡せた。あまりそちらをじろじろ見てはまずいと思ったジロウは、すぐ隣で英字新聞を読んでいる商社マンふうの男などに目をやっていたのだが、やはり気になり、気がつくといつて、ついティーラウンジの方をうかがっていた。

組長といっしょにいるのは、斉藤という、ジロウにとってはずっと上の兄貴分になる男だ。榎本や坂木のように幹部ではないものの、次期幹部と目されていて、

筋としては、坂木の舎弟分にあたる。いつもは、たいてい坂木のお供をしているのだが、今日は、坂木に言われて組長のボディガードをつとめているのだらう。

組長がいつもまわりにいる組員ではなく、斉藤だけを連れているのは、坂木の筋の——たとえば企業関係の——要人と秘密の会食でもあるにちがいない。

ジロウがそう思っていると、斉藤がポケットから携帯電話を取り出した。ここからでは音は聞こえなかつ

たが、どこかから電話がかかったようだ。

と、斉藤は、なにかひとしきり話したあと、首をか
しげて携帯電話を見やった。どうも、電波の入りがよ
くないようなのだ。斉藤は、組長になにか一声かけた
あと、その携帯を耳に当てたまま、席を立った。どう
やら、電波状態のいい場所に移動しようということら
しい。

そのまま、テイーラウンジを出た斉藤は、ガラス張

りの窓際の方向に歩いた。

その途中、ラウンジを出たあたりで、斉藤がちらりとこちらを見た気がして、ジロウはあわてて目をそらした。

と、目をそらした先で、隣の商社マンふうの男が英字新聞をたたみ、それを小脇に抱えるようにして、ソファを立った。

折りよく、その男がティーラウンジの方に歩いて行

ったので、ジロウは、その男を目で追うふりをして、また、組長の方をうかがった。

その時、ジロウは、ちよつとした違和感を覚えた。

それは組長の周辺からではなく、視野の中のどこかに、なにか不自然な動きがあった、……と、そんな感じだった。

(……ん?)

ジロウは、その違和感がどこから来たのか最初わか

らなかつたのだが、視線は、自然に、そちらに向かつて歩く商社マンふうの男の後ろ姿に吸い寄せられていった。

男は左脇に抱えた英字新聞を持ち替えるようにした。と同時に、右手はポケットの中から、素早くなかをかをとりだしていた。その取り出したものを新聞で隠すように左手を右手に添えたのだ。

男は、徐々に歩調を早め、そのまま、ティーラウン

ジに入った。その向かっている先は……。

「あつ、組ちよ……」

ジロウは、ハツとしてソファを立ち、そちらへ駆け出そうとした。その瞬間、細く絞ったスカートの裾に脚の自由を奪われ、さらに、ヒールの高いパンプスにつまづき、転倒していた。

床に転んだ状態で、あわてて目を上げると、くだんの男は、横手組長の真正面に立ち、新聞で隠した手を

まっすぐその頭部に向かって差し出した。

次の瞬間、目の前の男に驚いたように顔を上げた組長の額から血が噴き出した。

おそらく銃にはサイレンサーが着いているのだろう。大きな破裂音はなかった。そのかわり、低くこもったバスツという音が、そちらに集中するジロウには聞こえた。しかし、激しい音ではないぶん、まわりの人間はすぐには反応しない。

「だいじよぶですか」

ジロウのそばでは、むしろ、転んだジロウの方を見て、何人かが、助け起こそうと近づいてきた。

しかし、ジロウに向けて差し出された手は、そのままそこで静止した。

「キヤーツ！」

ロビーに甲高い声が響いた。

血だらけになった横手組長に気づき、ラウンジのウ

エイトレスが悲鳴を上げたのだ。

ロビーにいるすべての人間が、そちらを見た。

その時には、すでに、狙撃犯は、入口の回転ドアの近くまで走っていた。

混乱するロビーを抜け、ジロウは、すぐにエレベーターに乗った。

ジロウ自身も、どうすべきか戸惑ったが、何はとも

あれ、榎本に報告することが先決だと気づいたのだ。

組長狙撃の事実を早く知らせなければならぬことはもちろんだが、すぐに手を打たないと、榎本自身も危うい立場になるのだ。

殺人事件の報は、すでに警察に届いているだろう。

警察が駆けつけければ、早晩、宿泊客も調べられる。そこに榎本がいれば——同じ組だから犯人だとは思われないにしても——何らかの形で拘束は免れない。そ

うなれば、鬼頭組に居場所を知られることにもなる。

すぐにここを引き払うべきなのだ。

そう考え、ジロウは、榎本の部屋に急いだ。

「兄貴っ、大変です」

部屋に飛び込み、ジロウが言うと、ベッドの上で、榎本の隣に寝ていた美佐恵があわてたように毛布をたくし上げた。二人とも服は着ていないようだ。

「な、なんだよ、あんた。ノックもなしに急に入って

来るもんじやないよ」

美佐恵が怒って言った言葉を無視して、ジロウはせき込みながら言葉を継いだ。

「い、今、ロビーで、親分が……」

「……えっ？」

「横手組長が、撃たれました」

「……な、なんだって！」

「すぐ、ここを出ないと——」

「……あ、ああ」

組長が狙撃されたという事実には、榎本は一瞬混乱したようだったが、すぐにジロウの言うことの意味がわかったらしく、美佐恵に「急いで服を着ろ」と言っていて、自らもベッドを出ると、脱ぎ捨ててあった下着を拾った。

「なんだよ、いったい」

「いいから。とにかく、早くしろ」

まだ、なにが起きたのか要領を得ない美佐恵に、榎本はそう怒鳴って急かせた。

ジロウは、そちらを見てはいけなれないと思い、あわててドア際まで引き下がり、後ろを向いた。

駆けつけるパトカーの音を聞き、今、ロビーに出るのはまずいと思ったのだろう。チェックアウトは美佐恵に任せて、榎本はジロウと、地下の飲食店街を抜け、

ホテルの裏手に出ていた。

「くそっ、鬼頭の奴ら、ぶっ殺してやる」

歩きながら、ジロウから事件のあらましを聞き、榎本はそう息巻いた。

そのやり口から考えて、組長を撃ったのが、「筋もん」というより、プロの殺し屋であるらしいこと、そんなプロが至近距離から額を撃ち抜けば、組長は即死にちがいがなかっただろこと、そして、そのプロを雇

ったのは鬼頭組にちがいないことを、見て取ったのだ
ろう。

「それにしても、ホテルのロビーなんかで、なんで組
長を一人にするんだ」

榎本の怒りは、自らの組の人間にも向けられた。

「いえ、組長は一人じゃなかったんです。斉藤の兄貴
がいつしよだったんです。でも、兄貴がちよつと席を
離れたすきに……」

「斉藤が……？」

美佐恵と待ち合わせたビル陰に身を潜めながら、榎本は怒りの中にも不可解そうな表情をまぎれこませて考え込んだ。

しばらくそうしているうちに、美佐恵が追いついた。

「警察が来て相当めちやくちやになつてたけど、まだ、禁足令は出てないらしくって、すんなりチェックアウトさせてくれたよ。……で、あんた、これからどうす

るつもりだい」

「ああ。悪いが、とりあえず、お前んとこにやつかい
にならせてくれ」

「悪がることなんかないよ。最初からそうしてくれり
やあ、よかったんだ」

組長の死にショックを受けている榎本を氣遣いなが
らも、美佐恵はどこかうれしそうだ。

「あ、タクシー拾ってくるから、あんたはここにいて

よ」

美佐恵はそう言うのと、また、表通りに出ていった。と、その時、榎本のポケットで携帯電話が鳴った。

「……へい。……聞きやした。で、今、あわててホテルをフケたところで……」

組からの電話らしい。

「……へい。……えっ！……、……へい、わかりやした」

最後に榎本は、さらに深刻そうな顔になって電話を切った。

ジロウが問いかけるようにその顔を見ると、榎本はぼそりと言った。

「若頭からだ。俺に、鬼頭を殺れと……」

act. 7 Death Nurse

湯木沢がポケットからラツキーストライクの箱を出したのを見て、ジロウはダツシユボードの上のライターを取った。

運転のじやまにならないように、そして、ベンチレ
ーターの風で消えることのないように、もう一方の手
を添えて差し出す。

湯木沢は、ハンドルを握ったままちよつとうなずく
と、くわえた煙草をそれに寄せた。

暗闇の中にぽつと灯ったライターの火が、精悍な湯
木沢の顔を浮かび上がらせた。

ライターの火が消えたあとも、ジロウはその横顔を

見ていた。

一息吸うと、湯木沢は、ゆっくりと煙を吐き出した。

その煙を目で追って、ジロウがふたたび前に向き直ると、煙はフロントガラスにぶつかり、その内側に沿って広がる。そのせいで、道路の先に見えていた星のように点滅する光が、ぼんやりとにじんだ。

あれは、コンテナヤードのガントリークレーンにつけられた警告灯だ。それが、これだけ高い位置に見え

るといふことは、もう、スナック『みなと』のすぐそばまで来ているといふことだった。

カーラジオから流れるブルージーなジャズに、ジロウは、いつものように切ない気持ちにとらわれた。

湯木沢の車に乗っているこの時間が、そして、この埠頭の先に向かうまっすぐな道が、夜の海を越えてどこまでもつづいていたなら……と、そんなふうに思った。

横手組長が殺されてから一週間。街は今、騒然としていた。

しかし、この瞬間、ジロウは、それらのことをすべて忘れていた。

もちろんジロウとて、この一週間、けっして心穏やかでいられたわけではない。

なんと言っても、目の前で組長が撃たれたのだ。

極道としての血が、悔しさと憤りにたぎった。

「親」が殺されたとなれば、今頃、組の若い連中は、鬼頭組への報復を誓い、いきり立っているにちがいない。そう思うと、いても立ってもいられない気がした。毎日、こんなふうになりの女で、酔客のくだらない冗談にほほえんでみせたりしている自分が、ほとほと情けなかった。

ところが、一方でそんなふうを感じながらも、店に

出ているとき、ジロウの心をとらえているのは、けつして、鬼頭組への怒りなどではないのだ。

このところ、湯木沢は、店に顔を見せないことが多かった。

鬼頭組にしても、報復に備えて緊迫しているはずだ。湯木沢も酒場に来るどころではないのだろう。そうは思うのだが、そう思えばよけいに、湯木沢が現れないことへの不安が募る。どこかで、湯木沢の身になにか

起こっているのではないか。そんな心配が心を乱した。そしてまた、ついそんなことを考えている自分に気づき、ジロウは、さらに情けない思いにとらわれたりもした。

そんな相反する二つの感情の間で、ジロウは毎日、揺れ動いていた。

だからこそ、深夜、美佐恵のマンションから帰るとき、いつものように湯木沢の車が停まっているのを見

つけると、思わずほっとし、その瞬間だけは、すべてのことを忘れてしまうのだった。

しかし今夜は、もうひとつ、そうも言っていられない事情があった。車が『みなと』の前に停まったところで、ジロウはやつとそのことを思い出した。

先刻、美佐恵のマンションで、あの事件以来、美佐恵のもとに身を隠している榎本から、ある計画を耳打

ちされた。

美佐恵を気にして、榎本は、「詳しいことは、明日、会ってから話す」と言ったが、指定された待ち合わせ場所から考えても、榎本が、明日、「それ」を決行するつもりであることはまちがいがなかった。

ということは、明日は、店に出られないということだ。おそらく、美佐恵のマンションに入浴しに行くこともないだろう。

そのことを、湯木沢に伝えておかなければならなかった。でないと、湯木沢に待ちぼうけを食わしてしまふことになる。

「耕さん、ありがとう」

湯木沢がサイドブレーキを引いたところで、ジロウはそう言った。いつもは降りがけに言うのだが、明日のことを伝えるきつかけがほしかったからだ。

「……ん？」

いつもとちがうタイミングで札を言われたことに、湯木沢は怪訝そうにジロウの顔を見返した。

「お店にも来れないほど大変なんですよ。それなのに、毎晩迎えに来てくれるから」

「ああ」

ジロウの言葉に、湯木沢は、そういうことかと納得してうなずいた。

「たしかに、こんなことしてる場合じゃないんだが：

：

湯木沢がそう言いかけた時、ちようど風に乗って何台ものパトカーの音が聞こえてきた。おそらく、街区の方で、なんらかの衝突が起こっているにちがいなかった。街はすでに「全面戦争」のまっただ中なのだ。湯木沢も、その音に気を取られたようで、話しをとぎれさせ、ちよつと遠い目をした。

そんな湯木沢に明日の話を持ち出すきっかけを失

い、ジロウは言った。

「ごめんなさい。あたしのために……」

と、湯木沢はあわてたように、ふたたび目を戻した。

「いや、あんたが気にすることはない。俺が好きでや
つてんだから」

「でも、耕さんには、あたしなんかよりもっと大事な
ことが……」

「いや、街がこんなふうになってんだからよけいに、

お前を、夜、一人で歩かすなんて、俺にやあできねえよ」

湯木沢のジロウに対する呼び方が、ここ数日、「あんた」から「お前」に変わることがしばしばある。そのことを、ジロウは少しもいやだと感じていなかった。「今の俺にとつちやあ、お前は、組と同じくらいに大事なんだ」

照れた表情で目をそらせて言った湯木沢のそんな言

葉に、ジロウは、言わなければいけないことがあるのも忘れ、その顔を見つめた。

「耕さん……」

湯木沢は、ふたたび見つめ返し、ジロウの肩にその太い腕をまわすと、抱き寄せた。そして、つもる思いをたたきつけるとでもいうように、性急な感じのキスをしてきた。

ジロウも、湯木沢の体に手をまわし、押しつけられ

たその唇に応えた。

半月前、あの遊園地の観覧車の中でキスして以来、毎夜、ジロウを送ったあと、湯木沢は、車の中で唇を求めてきた。最初の頃こそ多少の抵抗は残っていたものの、ジロウも、次第にそれに積極的に応えるようになっていた。

唇を割って入ってきた湯木沢の舌を、ジロウは、その思いを受けとめるとでもいうように、吸った。

湯木沢の腕にさらに力がこもり、ジロウの体が助手席のシートから浮き上がった。

今夜の湯木沢のキスは、いつにもまして激しいものだ。

おそらく、こんな緊迫した状況の中で、気持ちが高ぶっているにちがいない。そして、そんなさなかに、こうして女を抱いているということに、男としての興奮も激しいものになるのだ。ジロウには、それがよく

わかった。

「……あ」

気がつくのと、細いジロウの体をまわりこんだ湯木沢の片方の手が、「乳房」をまさぐっていた。ワンピースの下のブラジャーの中身はパッドであるにもかかわらず、それに気がついたとたん、ジロウは、体の芯にずんと響くようなしびれを感じた。湯木沢の指が、それを揉むように動いたたびに、そのしびれが全身に広が

った。

そして、それとともに、湯木沢が今、なにを求めて
いるのか、その思いが、さらに切実なものとして伝わ
ってきた。

今、街は戦場と化している。そして、湯木沢は、す
ぐまたそこに出ていかなければならない兵士なのだ。

いつ命を落とすかわからない緊迫した場に身をさらす
前に、ひととき、自堕落なやすらぎの中に、溺れたい

と思つても不思議ではない。

案の定、いったん唇を離すと、湯木沢は、訴えるようにジロウの目をのぞき込んできた。

湯木沢は今、まちがいなく、ジロウのすべてを欲しがっていた。

「あがつていつて」——具体的には、そのひとつことを期待しているのだ。

ジロウも、言えるものならそう言いたかった。

しかし、もちろん、ジロウにそれを口にすることなどできない。ジロウには、女としての「すべて」などないのだから。

ジロウは、湯木沢のまなざしから目をそらし、かすかに首を振った。

と、湯木沢もまた、かすかに落胆の表情を見せただけで、ジロウの体を離した。

しばらくの間、無言の時間がつづいた。

湯木沢は、その昂ぶりを必死に押さえているようだった。

湯木沢の気持ちは痛いほどわかっているのに、それに応えることができない自分が、ジロウには切なかつた。

そして、できれば今夜、こんな雰囲気のまままで別れたくはないと思つた。

そう思つたことで、やっと、明日のことを思い出し

た。

「あの……、耕さん」

「……ん？」

「明日は、お迎えは、いいわ」

「……え？」

ジロウの言葉に、湯木沢はちよつと不安な表情に変わり、その顔を見返した。ことの成り行きから考えて、ジロウの心証を害してしまったのかと誤解したのだろ

う。ジロウも、それに気づき、あわててつけ足した。

「ううん、そういうことじゃなくて、明日は、あたし、用事があつて、たぶんママのマンションには行けないから。お店も、お休みさせてもらうつもりなの」

「……用事？」

「え、ええ。その……、お友達と会う約束があつて……」

榎本との約束を、ジロウは、そう表現した。

と、湯木沢は、さらに強い疑問のまなざしを向けてきた。

「……こんな時間にか？」

その「お友達」が、どんな友達なのか知りたいにちがいない。女なのか、それとも……男なのか。

それでジロウは、さらに言い訳を重ねなければならなかった。

「中学時代、いちばん仲のよかった子が、泊まりがけ

でこの街にやって来るの。それで、その子のホテルへ
……」

ジロウの言葉は、湯木沢の疑念をさらに深くしてしま
まったようだ。

「……そうか」

浮かない顔でそう答えた。どこか不満げな表情だ。

さっきのジロウの「拒否」とも相まって、ちよつと腹
を立てているのかも知れなかった。

また、不器用に不自然な時間が流れた。

ジロウは、自分が、最もまずいタイミングでそれを切りだしてしまったことを悔やみ、そして、もし、自分が本当の女なら、そんな湯木沢の疑いや不安を解く「最良の方法」があるのに、と、また、さつきと同じ切ない気持ちに落ち込んだ。

「……じゃ、気をつけるんだぜ」

しばらく黙っていた湯木沢の口から、いつもの別れ

の言葉が出た。

「……耕さんも」

この言葉だけは、ジロウの真実の気持ちからのものだったにもかかわらず、湯木沢は「ああ」とうなずいたあと、ハンドルに手をかけ、前方を見た。

しかたなくドアを開け、ジロウが降りると、湯木沢はそのまま車を発進させた。いつもなら、ジロウが店のドアの中に消えるまでその場に停まって、見えて

くれるはずだった。

走り去る湯木沢の車を見送りながら、ジロウは、さらにどうしようもなく切ない気持ちになっていた。

自分が男であることが、今ほど辛いことだと感じたことはなかった。

「いいか。鬼頭のいる病室はもうわかってる。ベランダが張り出してる五階のあの角部屋だ。だが、窓は昼

も夜もブラインドが降りてるし、強化ガラスに入れ替えてあるという話だ。外から窓越しに狙撃するのは、いくら腕がよくても無理だ。それに、奴はいまだに寝たきりだというしな。人の目に触れるところに顔を出すことはねえだろう」

私立の病院としては市でいちばん大きな総合病院の裏手。袋小路になっている小さな空き地に停めたレンタカーの中で、目立たないポロシャツにサングラス姿

の榎本が声を潜めて言った。

「ベランダがついてるぶん、すぐ上の屋上から降りることは簡単だが、おそらくベランダ側のドアも窓も、中から鍵がかかっているだろう。簡単には入り込めねえ。そこで、お前に、中から鍵を開けてもらいたいんだ。それだけでいい。それ以上のことはするな」

「でも兄貴、俺が中に入るんなら、その時、いつそのこと、殺っちまえば……」

榎本に顔を寄せ、助手席のブルーのスーツ姿の女が、そんな姿には似つかわしくもない声と言葉づかいで言った。ジロウだ。この前、美佐恵とデパートで買った、おとなしめのデザインのこの服が、こんな形で役に立つとは思わなかった。

「病室の外の廊下には、夜中だって鬼頭の連中がいるんだぞ。お前が入ったときだって、ドアを開けて、見張ってるにちがいないえ。せいぜい、鍵を開けるのがや

つとだ」

「でも、チャカ隠してつて、奴らの目を盗んで一発ぶち込むくらい……。俺、奴らに殺られたつて、かまいませんから。もともと、鬼頭の野郎を撃つたときから、そのつもりはあつたんですし」

「馬鹿野郎。命を粗末にするもんじゃねえつて言つてつだろ。なんのために、俺がお前を隠したと思つてんだ」

「でも、兄貴がベランダから忍び込んで殺ったとしても、同じでしょう。奴らすぐに気づきますぜ」

「俺のチャカには、サイレンサーがつくの、知ってっ
だろ」

「それにしても、夜中にすぐ外の廊下にいりや、聞こえ
ますぜ。なににも、そんな危険を冒してまで、兄貴が
直接手を下さなくても」

「ちがうんだ。これは、俺の意地なんだ。若頭は、俺

に鬼頭を殺れと言ってきた。ジロウ、それがどういう意味かわかるか？」

榎本がなにを言おうとしているのかわからず、ジロウは、口をとがらせるような仕草をした。見ようによつては、若い女がすねているようにも見える。

「坂木は、俺を、組の連中の前で試そうとしてんだ」
その言葉に、ジロウは、ちよつと驚いた表情で榎本の顔を見返した。榎本が、若頭のことを呼び捨てにし

たからだ。

「別の言い方すりゃあ、さらし者にしようとしてんだ。この戦争のきっかけをつくったのは、俺の舎弟分のお前だ。だから俺に、落とし前をつけれるものなら、つけてみろってな」

「そんなら、なおのこと、俺が……」

「いや。いいか、これはもう、おめえらのレベルの問題じゃねえんだ。もちろん坂木は、そう言いながら、

じつは、俺にはそんなことはできねえだろうと踏んでる。病室のまわりにや、鬼頭組の奴らが何重にも見張ってるし、サツだって張ってるんだ。鬼頭を殺るとすりゃあ、組の連中を大々的に動かして、殴り込みでもかけなきや無理だ。今の俺にやあ、組ん中でそれだけの力はねえ。それに、病院の襲撃なんて堅気の衆を巻き込むようなことは、俺にはできねえ。坂木にや、それがよくわかってんだ。で、俺はけつきよく、親を殺

された原因をつくっておきながら、すじも通せねえ奴
ってことになるんだ。それが坂木の筋書きだ。それを
ひっくり返すにや、俺がひとりで、奴らの真ん中に乗
り込んでって、この手で鬼頭の命とるしかねえ。坂木
のやり方に対して、俺なりの意地の通し方を見せなき
や、もう、しめしがつかねえんだ。極道は、駆け引き
や政治じゃねえってとこ、見せてやりてえんだ」

「兄貴、でも……」

ジロウは、榎本をそんな窮地に追い込んでいるのが自分だという思いをさらに強めて、反論しようとしたが、なにか強い決意に動かされているらしい榎本を前に、言葉を継げなかった。

「いいから、お前は、俺の言うとおりにしろ。まずお前が中に入れ。俺はもう少し暗くなってから行く」

榎本はそう言って話を切り上げると、車のエンジンをかけた。

「それにしても、おめえ……」

車を走り出させると、また榎本が言った。

「いくら俺の前だからって、そのなりで、無理してそんなしゃべり方するこたあねえんだぞ。こないだみたいにしやべった方が、自然に見えるぜ」

「そんな、兄貴、べつに、俺、無理してるわけじゃあ……」

ジロウはそう言いかけたが、また、つづく言葉が出

てこなかった。たしかに、この頃では、店や湯木沢の前でしゃべっている女言葉の方が、自分にとつてもしっくりいく感じがしているのだ。

そう感じたジロウは、昨夜、あんな別れ方をした湯木沢の顔をちらりと思い出した。

榎本は、ジロウを表通りの花屋の前で降ろすと、すぐに立ち去った。ふたたび、病院の裏手に車を隠し、

折りを見て中に入り、屋上に身を潜めるつもりなのだ。

ジロウは、その花屋に入り、花を買った。そんなものを買ったことがなかったので、なにを選んだらいいのかよくわからなかったが、「友達の見舞いにきた」と言ったら、店員が、ジロウのなりを見ながら、バラと、もう一種類、名前のよくわからない花を選んでくれた。

その花束を抱え、ジロウは病院に向かった。

正面玄関の自動ドアに映ったブルーのスーツに花束を持ったその姿は、たしかに、友人の見舞いにきた若い女性そのものだった。ジロウは、それを確かめ、中に入った。

とりあえず、病院内を下見しておかなければならない。

一階は、外来だ。

入って右手側の、内科、小児科、外科とつづく待合

いは、診察を待つ多くの患者であふれていた。

それにくらべ、キャッシャーと薬局の窓口のある正面の総合ロビーには、それほどの人だかりはできていない。まだ、夕方の診察時間が始まったばかりのせいだろう。

ジロウは、ロビーの真ん中に立ち、今度は、診察室があるのとは反対側につづく廊下の方を眺めた。理学療法室やいつくかの検査室のプレート、そして奥には

X線エリアを示すマークが見えている。どうやら、こちらの側には、外来用のナースステーションはなさそうだ。

今度は正面奥、つまり病院の裏手につづく短い廊下を見ると、そちらは、救急用のエリアらしかった。

そこにナースステーションはあったが、プレートは「救急病棟看護婦控室」となっている。外来用は、やはり別にあるのだらう。それに、ここには夜も看護婦

が待機しているのだらうし、救急用の非常入口と守衛室も近くにあつて、身を隠しにくい。

それで、ジロウは、入ってきて最初に眺めた外来の診察室が並ぶ廊下に向かつて歩いていった。各科の待合いの間を抜け、廊下の奥にさしかかると、すぐにナースステーションが見えた。都合のいいことに、隣には外来患者用のトイレがある。

さらに、その廊下の突き当たりのところに階段があ

り、そこから上にあがれるようになっていゝ。そばには、非常口もあつた。どうやら内側からしか開かないドアらしいが、逃げるためだけに使うなら、それは問題ではなかつた。

そう思いながら、廊下の奥を見ていると、突然、声をかけられた。

「お見舞いですか？」

そのナースステーションから出てきた看護婦だつ

た。

ジロウは、ちよつとあせつたが、花束を持ってこんなところに立っているのを不審がられたことに気づき、きよろきよろするふうを装いながら答えた。

「ええ、外科に入院している友人のお見舞いに来たんですけど……」

「あ、それなら四階です。あの階段じゃなく、ロビイのエレベーターが使われた方が楽ですよ」

ジロウが向いている方向から、看護婦は、奥の階段に行こうとしていると思っただらしい。

「四階でエレベーターを降りると、真正面に外科のナースステーションがありますから、そこで、病室をお聞きになってください」

「どうも、ありがとうございます」

ジロウは、看護婦に礼を言うと、その言葉にしたがつて、またロビーの方に向かいかけた。そして、そこ

でちよつと思ひ立ち、また看護婦に声をかけた。

「あの……」

診察室に入つて行きかけた看護婦が、その言葉に振り向いた。

「あたしもちよつと体調がよくないものですから、帰りに診ていただこうかと思つてるんですけど、診察は何時までですか？」

人がいなくなる時間を確認したかつたのだ。

「内科ですか、産婦人科ですか？」

ジロウの姿と「体調がよくない」という言葉から、そう思ったのだろう。その人のよさそうな看護婦が聞き返した。

「あ、あの……内科……ですけど」

ジロウは、少し頬を赤らめながら答えた。場違いな話だが、産婦人科と言われたのが、なにか妙に恥ずかしかった。

「それでしたら、受付は八時までです。入院患者さんの面会時間も同じ八時までですから、ぎりぎりまで病室にいらっしやると間に合いませんよ。それに、終わりの頃は、内科は、勤め帰りの患者さんで混みますから一時間くらい待たされたりします。少し早めにお見舞いを切り上げて、受付をしておいた方がいいと思います」

「そうですか。いろいろありがとうございます」

ジロウはもう一度礼を言い、エレベーターに向かった。

しかし、ジロウがエレベーターを降りたのは、四階ではなく、差額ベッドの特別室の並ぶ五階だった。

この階にも、エレベーターホール正面にナースステーションがあり、左右に廊下がつづいていた。病室のドアの間隔から、各病室の広さがよくわかった。

さつき外から見た位置関係から言って、鬼頭の病室は、左手の廊下を突き当たり、さらに左に曲がったところにあるはずだ。一階で見た階段で、ちようどあの廊下の曲がり角まで上がってこられる。

今はまだ、ことを起こす手はずの時間ではなかったので、その廊下の構造を確かめたジロウは、このまま一階に戻ろうかとも思った。しかし、病室の入口もこの目で見ておいた方がいいと考え、廊下を進んだ。思

つたとおり、突き当たり右手に階段室があり、その反対側に、さらに奥へとつづく廊下があった。

ジロウはそちらを見て、一瞬、体がこわばった。

十メートルほど先の突き当たりのドアの前に、三人の男がいたのだ。

ジロウがそちらを向くと同時に、三人が三人とも、鋭い眼光でにらみ返してきた。臥がたい体が大きく、屈強な感じのする男たちだ。そこに出してある椅子に座った

一人は、ジャケットの懐ふところに片手を差し入れてさえいた。その手の先になにが握られているか、言うまでもないだろう。

ジロウは、とっさに道に迷ったというふうを装って、きよろきよろしながらあわててその場を離れた。目が合ったとき、びくついたことで、男たちになにか感づかれたかと心配になったが、あんな男たちにあんなふうにならみつけられれば、普通の若い女性でも——い

や、女性ならなおさら——、おびえるにちがいないと思ひ、とりあえずは問題ないだろうと判断した。

それにしても、見張りが三人も立っていたことに、ジロウは少なからず驚いた。椅子が二脚出ていたところを見ると、おそらく夜の間も二人はいるにちがいない。はたして計画どおり、うまく運ぶのだろうか。そんな不安を抱きながら、ジロウはまたエレベーターに乗った。

先刻、あの看護婦は、外来の受付は八時までだと言っていた。いずれにしても、行動を起こすのはそれ以降になる。そして、八時には、まだ一時間半あまりあった。それまで、どこかで時間をつぶさなければならぬ。

一階に降りたジロウは、とりあえず、ロビーのはしにある売店に入った。

最近の総合病院の売店らしく、その店は、コンビニタイプのガラス張りのつくりになっている。スタンドに立てられた雑誌を読むふりをしながら、そこからロビー全体をうかがうことができた。

診察を終えて会計や薬を待つ外来患者の数は、さつきより多くなっている。そんな一般の患者たちはなにも気づいていないようだが、その気で見れば、ロビーには緊迫した空気が張りつめていた。街のあちこちで

銃撃戦が頻発しているのだ、そしてここは、その一方の組長が入院している場所なのである。

エレベーターを中心に、ジロウも顔を知っている鬼頭組の人間が二人ばかりうろついていた。おそらくは、上へ上がる人間を見張っているのだ。たぶん、まだ何人か、人に紛れる形で、鬼頭組の連中がいるはずだ。さらに、薬局のコナーの陰には、新聞を読むふりをして壁にもたれて立っている男がいた。その男

は、やはり、エレベーターと、それに、鬼頭組の人間の動きを見張っているようだ。こちらは、おそらく私服の刑事だろう。刑事はたいてい二人で行動するはずだから、もう一人もどこかに潜んでいるにちがいない。

院内だけでもこんなことから、さらに、病院の敷地内や周囲にも、鬼頭組の連中が何人か見張っているはずだ。つまり、鬼頭の病室は、何重ものガードで守られているのだ。榎本の計画どおり、鬼頭の命をとるこ

となど本当にできるのだろうか。

ジロウは、そう考えながら、しばらくその雑誌スタンドの前に立っていたが、あまりひとつところに長居をしていては怪しまれるとも思い、あとで使うことになるだろう紙製の手提げ袋をひとつ買って、売店を出た。

人の目を気づかないながら、花束をその紙袋に押し込み、そのあと、いったん、玄関を出て、病院の敷地内

を歩いた。ことをすませたあと、この場を離れる経路も確認しておきたいと思っただのだ。

正面脇の駐車場の出入り口付近には、やはり、鬼頭組のものらしい車が停まり、その中に二人、そして、建物に向かう小径に一人、男が立ち、車で来た人々の出入りを見張っていた。

幸い、非常口側には、入院患者が散歩などをするためのちよつとした庭園が造ってあった。その生け垣沿

いに行けば、身を隠しながら敷地の境の金網までたどり着ける。そこを越えれば、その先の民家が並ぶ中に、先刻、榎本が車を停めていた目だたない空き地があるはずだ。

おそらく榎本も、まわりが本格的に暗くなつたところで、この経路をたどって病院の建物に近づき、外壁にある非常階段から屋上に上がるつもりだろう。

それを確認したジロウは、ふたたび、玄関側に戻つ

た。

と、先刻の駐車場からつづく小径に立っていた鬼頭組の男が、誰かと話しているのが見えた。その相手の後ろ姿を何気なく見て、ジロウは、一瞬、手に持っていた紙袋を落とすようになった。

カーキ色のジャケットと、襟からのぞくタートルネックは、まちがいなく湯木沢だ。

湯木沢は、その男に、なにかを指図しているようだ

った。鬼頭組の幹部の一人として、湯木沢は、この病院の警護を仕切っているのかも知れない。

そう思ったジロウは、そのことに衝撃を受けながらも、湯木沢に見られてはまずいと、あわてて病院の自動ドアをくぐった。その瞬間、湯木沢がこちらを振り向いた気がした。

ジロウは足早に外来の待合い側に入り、奥の柱の陰に立った。

しばらくそうしたまま、玄関の方をうかがっていたが、湯木沢が入ってくる気配はない。それで、ジロウは、診察待ちの患者たちの中にまぎれた。

湯木沢は、単に、通りがかりに様子を見に立ち寄っただけかも知れない。そう思って、ときどき場所を変えながら、外来患者を装い、ジロウは行動を起こす時を待った。

やがて八時が来て、診察の受付が終わり、しばらく

すると、待合にいる患者の数が減り始めた。

それが半分ほどになった頃を見計らって、ジロウはソファを立ち、ナースステーションの隣の婦人用トイレに入った。

幸い、トイレの中には誰もいないようだった。室内は、片側に三つほどの個室と用具置き場らしいドアが並び、反対側には、鏡のついた手洗いがあった。そして、その横に、ナースステーションに通じる形で小窓

が開いていた。その下側に金網製の柵がつくられ、そこにいくつか紙コップが並んでいるのを見て、ジロウは、それが尿検査用の窓であることに気がついた。ナースステーションのすぐ横にトイレがあるのは、このためだろう。ここからでも、看護婦たちがいるかどうかがかうかがえるのは、好都合だといってよかった。

それを確認したジロウは、その窓から見られないように気を配りながら、一番奥の用具置き場のドアを開

けた。モップなどが置いてあるそこには、人ひとり隠れる余裕は十分にあった。そこでジロウは、その中に入った。

すべての診察が終わり、患者も、医者も、看護婦もいなくなるまでには、この中で、まだ二時間は待たなくてははいけないだろう。

耳をそばだたせ外の気配をうかがっていると、聞こ

えていたざわめきが次第に少なくなつていった。

その用具置き場は、仕切り壁など個室と同じつくりで、天井近くの部分は開いていた。だから、明かりが入り、腕時計で九時半までは確認できた。しかし、その時点でトイレの電灯が消された。

やがて、ナースステーションとの間の小窓から漏れてくるらしい明かりもなくなり、真っ暗になった。人の声らしいものも、もうなにも聞こえない。

それでも、ジロウは、もうしばらくじっとしていた。と、案の定、廊下を歩く革靴の足音が聞こえ、トイレのドアが開いて、仕切り壁の上から見える天井に、懐中電灯の光らしいものが走った。警備員による最後の見まわりだろう。

次々に部屋を点検しているらしいその足音が遠ざかったのを確認してから、さらにしばらくして、ジロウはやっとそこを出た。

小窓から見えるナースステーションも、ひっそりと
して誰もいない。

廊下と、そしてナースステーションには、緑色の非
常灯が灯っていたから、ものの輪郭はそれなりに見え
る。動くのに困るといふことはないようだ。

慎重にうかがいながらトイレのドアを開け廊下に出
たジロウは、すぐにナースステーションの中に忍び込
んだ。

中に入ると、打ち合わせテーブルやファイル棚、そして、医療器具の乗ったワゴンなどが置かれた奥に、思った通り、カーテンの引かれた更衣室らしい場所があった。

カーテンの隙間からその中に入ると、やはり、十個ほどのロッカーが並んでいた。ジロウは、音を立てないように注意しながら、そのロッカーを開けていった。探しているものは、すぐに見つかった。

その白衣と看護婦帽を取り出すと、ジロウは、着ていたスーツの上着を脱いで、白衣を着てみた。

ロッカーの脇の壁にあつた全身用の鏡に、その姿を映してみると、非常用の薄明かりの中でも、その姿がおかしいことはすぐわかつた。開いた白衣の襟の間から、中に着たブラウスの襟が見えていた。

それで、ジロウは、いったん白衣をとり、ブラウスと、そしてスーツのスカートも脱いだ。白衣から、そ

のウールのスカートとブルーが、透けて見えるといけないと思ったのだ。

ブラジャーとパンティだけの姿になったジロウは、ふたたび白衣を着て、鏡の前に立った。今度は、おかしくは見えなかったが、素肌に触れるその綿の白衣の感触に、なんだか妙な興奮を覚えた。

やはりそこにあつた看護婦シューズに履き替えたあと、ロングヘアのウィッグを後ろでゴムどめし、それ

をバッグの中に持ってきていたヘアクリップでアップふうにとめた。そして、看護婦帽をヘアピンで固定した。

鏡を見ると、今度はおかしなところはなかった。こんなものを着たのはもちろん初めてだったが、その姿は、立派に看護婦らしく見えた。口紅など地味めのものを選んできたのがよかったのだらう。そこでジロウは、持ってきた紙袋から花束を出し、その中に、

脱いだスーツとブラウス、パンプス、そして、バッグをしまった。

花束は、そのロッカーに入れておくことにした。白衣を借りたささやかなお礼だ。

紙袋を持ち、更衣室を出たジロウは、さらにナースステーションの中でいくつかのものを調達した。打ち合わせテーブルの上に置きっぱなしになっていたバインダーとボールペン、そして、滅菌用の紫外線ランプ

がついたガラスケースの中に見つけた体温計だ。

ボールペンと体温計を白衣の胸ポケットにさしたところ、ジロウは、そこにネームプレートがついてい
るのに気がついた。とろうかどうしようか迷ったが、
つけたままの方が自然だと考え、そのままにした。

ナースステーションを出たジロウは、周囲に注意を
払いながら、廊下の奥へと向かった。

夜の間も電灯がともったままらしい階段室まで来る

と、ジロウは、階段の下にある隙間に、紙袋を押し込んだ。

その明かりの下で、もう一度白衣を確かめる。どうやら、おかしなところはないようだ。

下着だけの素肌に白衣一枚という姿は、この季節ではまだ寒かったが、緊張しているジロウにとって、それは、そんなに気になることではなかった。

バインダーを胸のところに持ち、ジロウはゆっくり

と階段を上がっていった。

うまい具合に、五階の階段室の出入口は、廊下の角
とはいえ、鬼頭の病室の前からは微妙に見えない位置
についていた。そこで、人影を警戒しながら廊下に出
たジロウは、さも、今この階のナースステーションを
出てきたふうを装い、その角を曲がった。

思っていたとおり、そのとたん、病室の前の二人の

男がこちらに鋭い視線を向けてきた。他の廊下は明かりが減らされ薄暗くなっているが、どうやらここだけは、夜もすべての明かりがついているようだ。

一人は椅子に座り、一人は立ったままの男たちは、夕方の連中とは交代しているようだ。先刻、顔を見られているので、それを心配していたジロウは、密かに胸をなで下ろした。しかし、やはり、体の大きなその男たちの姿に緊張しながら、ジロウは病室に近づいた。

男たちは、そんなジロウを目で追った。

素肌に触れる白衣を通し、男たちの視線が刺さってくるような気がした。

なにか声をかけようかと思っただが、ふつう見まわりの看護婦はあれこれ説明などしないだろうと考え、ジロウは男たちに会釈しただけで、病室のドアに手をかけようとした。

と——

「看護婦さん」

立っている男の方が声をかけてきた。

「……!？」

ジロウは、一瞬どきりとし、しかし、必死に何気ないふうを装って男の方を見た。

「いつもとは、時間がちがうな」

「え、ええ……」

ジロウは緊張の中で頭を巡らせ、言い訳を考えた。

「あ、あの……、今日から点滴のお薬を変えたものですから、ちよつと様子を見に……」

その言葉に、納得しているのかいないのか、男は表情を変えずにうなずいた。

と、そこでジロウは、もう一人の座っている方の男の視線に気がついた。

男は、ジロウの胸のネームプレートをじつと見ていた。

ジロウは、さらに緊張した。

もしかすると、階によってプレートの色とかがちがうのかも知れない。男はそれを不審がつているのだろうか。そう思ったのだ。

すると、その表情をうかがうジロウの視線に男の方も気づいたのだらう。顔を上げ見返してきた。

そこには、下卑た笑いが浮かんでいた。

男が見ていたのは、どうやら、ネームプレートでは

なく、白衣の胸のふくらみだったようだ。

ジロウは内心ほっとし、しかし、あわてて、持っていたバインダーで襟の合わせ目を隠すようにして、ドアノブに手をかけた。

「ふふ、姉ちゃん、いいおっぱいしてるな」

病室に入るジロウの後ろで、座っている男がつぶやいた。

中に入り、ドアを閉めようとする、すかさず、立

っている方の男がそれを手で押さえた。やはり、開けたままにして見張っているつもりらしい。

それで、ジロウは、そのまま、鬼頭が寝ているベッドに近づいていった。

病室内の明かりは落とされていたが、廊下からの光で、室内の構造はよく見えた。

窓の近くに置かれたベッドの脇には、なにやら電子表示がちかちかとする機械が据えられている。たぶん、

なんらかの検査装置か生命維持装置だろう。案の定、その下方からは、何本かのビニールホースや電線のようになものが出て、その先がベッドの布団の下にもぐり込んでいた。

点滴の装置は、ベッドの反対側、窓との間に置かれていた。

そこで、ジロウは、そちらにまわりこんだ。

ベランダに抜けるドアはちよつと離れた位置にあつ

たから、その鍵をあけるのは無理だ。とすると、この、カーテンふうの縦型ブラインドがかかった窓の鍵をあけるしかない。鍵の位置の目星をつけ、ブラインドの間から手を突っ込んで解錠する以外、方法はないだろう。見張られている中で、それをしなければいけないのだ。そして、それより先に、まず、見まわりに来た看護婦らしく、患者の様子を見なければならぬのだらう。

頭の中で素早くそれらの計算を巡らせ、ジロウは、ベッドの脇に立って、そこに寝ている鬼頭の顔をのぞき込んだ。

顔の下半分を、酸素吸入用のピースでおおわれたその顔を見て、ジロウはちよつと驚いた。

鬼頭の顔は、まるで別人のようだったのだ。

かつては脂ぎっていたその皮膚は、土気色に醜くたるみ、そこらじゅうに灰色のシミが浮き出していた。

半分くらいまではげ上がった頭皮には、手術の傷を隠す大きなガーゼがあてられ、そこからはみ出した頭髪も、ほとんどが白髪に変わり、生彩なく縮れてからまっている。

ジロウが撃った時の、あの憎々しげな面影は、もうどこにもなかつた。

そのことに衝撃を受けながら、ジロウは、掛け布団を少しめくり、そこから鬼頭の腕を出した。脈をとる

ふりをして、その手首にさわると、手の肉もすっきり落ち、乾いた皮膚には深いしわが寄っている。

そこにいるのは、まぎれもなく、もはや生きる力もない、一人の老人だった。

その姿を見て、ジロウは、一瞬、自分が今何をやるうとしているのかを見失った。

この男は、何もしなくても、やがて死ぬだろう。それを早めることに、なんの意味があるのか。

それに、手を下して殺すにしても、たとえば、この腕に刺さった点滴の針を抜くとか、あるいは酸素吸入器をちよつとずらしておいてやれば、明日の朝には息絶えているにちがいない。それをわざわざ、榎本が忍び込んで、撃つ必要がどこにあるのだろうか。

榎本は、「これは、俺の意地なんだ」と言っていた。

このみじめな老人の命を多少縮めることが、本当に「極道の意地」なのだろうか？

そんな考えにとらわれながらも、見張りの男たちの視線を気にして、ジロウは、布団を元に戻すと、バインダーになにかを書き込むふりをしながら、点滴に、つまり窓の方に近づいた。鍵をあけるには、この瞬間しかないだろう。

そう思いながら、点滴の調節つまみに手をかけたときだった。

「俺もあんたも、夜勤はつらいよな。どうだ、勤務が

終わつたあと、イツパツ楽しまねえか」

座っている男が、先刻の冗談のつづきを言った。

「馬鹿野郎、くだらねえこと、言つてんじやねえ」
立っている男が、その男の方を見た。

———今だ。

ジロウは、すかさず後ろ手でブラインドの間を探り、
サッシ窓の鍵を開けていた。

男がふたたびジロウの方に目を戻したときには、す

で、点滴の落ち具合をチェックするふりをしていた。

病室を出たあと、ジロウは、また階段を使って一階まで降りた。一階の階段室で、紙袋から服を出し、着替えると、脱いだ白衣と看護婦帽などを紙袋に詰め、ふたたび、階段の下の隙間に押し込んだ。

そのあと、用心しながら廊下の突き当たりの非常口を出て、例の生け垣に沿って金網のフェンスまでたど

り着き、そこを乗り越えた。金網をまたぐ時、スーツのスカートがみつともなくまくれ上がったが、民家の裏路地でもあり、こんな深夜では見ている人もいない
と思い、気にしなかった。

その場を少し離れ、例の空き地に近づいたところで、ジロウはバッグから携帯電話を取り出して、電話した。

最初の呼び出し音が鳴り終わらないうちに相手は出た。

屋上に身を潜めている榎本は、今か今かと待っているにちがいない。

「兄貴、首尾どおり運びやした。窓の鍵があいてます。

見張りは二人。廊下にいます」

「よし、わかった。お前は、すぐに帰れ」

それだけ言うと、電話は切れた。

ジロウは、そこでどうしようか迷った。榎本はああ言ったが、自分があれだけ苦勞して仕掛けたことの結

末を見たいと思ったのだ。もちろん、榎本のこと
が心配だったこともある。

それで、榎本の車が停まっている空き地の見える物
陰にとどまり、榎本が戻ってくるのを待っていた。

三十分近くは、何も起こらなかつた。

静まり返った夜空に、黒々とした病院の影だけがそ
びえていた。

そして、その静けさを破るように、銃声が聞こえた。

つづけざまに三発。

榎本が言っていたように、その銃にはサイレンサーがついている。ここからでは、絶対に銃声は聞こえないはずだ。

ということとは、榎本が見つかり、銃撃されたということだった。

耳を澄ますと、病院の敷地内で、にわかにな人の動く気配がした。

銃声を聞きつけたせいだろう。病院の建物のあちこちの窓にも明かりが灯った。

と、敷地内を走ってくる足音がし、男の影がひとつづつフェンスを越えた。

榎本だった。

少なくとも逃げることだけはできたらしい。

榎本は、すぐに空き地まで走ってきて、車に近づいた。

それで、ジロウは、榎本に声をかけ、鬼頭を殺ったのかどうか確かめようと思った。

と、その時――

「待てっ！」

ジロウの隠れているのとは反対側の道から、一人の男が走ってきて叫んだ。

車のドアを開けたところだった榎本は、銃を構えてそちらを振り向いた。

空き地の入口のところ立ち止まったその男の顔が、薄明かりに浮かんだ。

その顔を見て、飛び出しかけていたジロウは、立ちすくんだ。湯木沢だったのだ。

「おめえ……榎本だな」

ゆっくりと榎本の方に近づきながら湯木沢が言った。

両方の組の幹部同士、当然、顔は知っているのだろ

う。

「湯木沢か。来るな！」

銃を向けたまま、榎本が怒鳴った。

「出所したばかりでまだ保護監察の身だ。チャカは持つてねえよ」

湯木沢はそう答えたが、榎本から五六メートルの位置で立ち止まった。

「うそをつけ」

「道ははずしても、うそはつけねえ。それが、あんたと俺の馬鹿なところだろ」

その言葉に、榎本はかすかに笑ったように見えた。

そして、すぐ撃てるようにはしていたが、銃の先を湯木沢からそらした。

「ひとつだけ聞きてえ。あんたのことだ。目的は果たしたんだろう」

「ああ」

湯木沢の問いに、榎本は短く答えた。

「そうか。じゃあ、あんたをこのまま帰すわけにやいかねえな。腐っても極道だ。親を殺されて、黙って見過ごすわけにやいかねえ」

湯木沢はそう言って、また、一步足を進めた。

榎本は、ふたたび銃を戻し、言った。

「どうしようってんだ？」

「さあな」

「おめえも、相変わらず馬鹿だな。丸腰で何ができてんだ」

榎本の言葉にも、湯木沢はさらに一步近づいた。

湯木沢を見据えて銃を向けている榎本が、また、かすかに笑った。そこには鬼気迫る雰囲気か漂っているのだが、まるで、二人とも、それを楽しんでるかのようには見えなかった。

その時だった。

別の方向から、銃の発射音が聞こえた。

瞬間、榎本がよろめき、湯木沢にすがるとような仕草で倒れ込んだ。

(……あっ！)

ジロウは走り出しそうになったが、湯木沢が振り向いたことで、また足を止めた。

「……えっ？」

湯木沢も驚いたように、空き地の入口を見ていた。

そこには、三人の男が立ち、そのうちの一人が銃を構えていた。

「兄貴、だいじよぶですか」

「おめえら……」

答える湯木沢の声は、むしろ怒っているようですらあつた。

地面に倒れた榎本は、すでにびくりとも動かなかつた。胸から出ているらしい血が、アスファルトの上に

広がった。

そこで、ジロウは、後ろを向き走りだしていた。

何より先に、美佐恵に知らせなければならぬと思
ったのだ。

「……誰だ」

その足音を聞いて、湯木沢が叫んだ。

追ってきた鬼頭組の子分たちをなんとかかわし、ジ

ロウは、表通りでタクシーを拾った。

タクシーを降り、店に駆け込むと、美佐恵はまだカウターの途中で閉店後の後かたづけをしているところだった。

「ママ……」

「どこ行ってたんだい。黙って消えちまって」

そう言って顔を上げた美佐恵は、ジロウを見るなり、なにかを感じていたようだ。

「……あの人がかい？」

いきなりそう言った。

ジロウは、言葉もなくうなずいた。

「……死んだのかい？」

ふたたび、ジロウはうなずくしかなかった。

「そうかい。今日、部屋を出て行ったときから、おかしいとは思ってたんだ。あんたもいなくなってたしね」

美佐恵は、感情の表れない冷静な声で言った。そこ

には、たしかに、なにかの覚悟があつたようだ。そして、だからこそ、その言い方は、ジロウには悲しいものに聞こえた。

ジロウが言葉もなく見ていると、美佐恵は、かたづけもので濡れた手を拭き、エプロンをはずすと、カウンターのすみからバッグとコートをとって出てきた。

「ママ、どこへ……？」

「警察だよ。検死がすめば、あの人、警察の霊安室へ

戻つて来るんだろ。街はこんなありさまだ。組が満足な葬式出してくれりとも思えないしね。せめて、あたしがついててやらなきや」

そして、店のドアを開けたところで、ふたたび振り向き言った。

「あんたも、気をつけるんだよ」

act.8 Cornered Lady

その夜、ジロウは、ほとんど一睡もしなかった。

美佐恵が出ていったあと、二階に上がり、電灯もつ
けず、真っ暗な中に座っていた。しばらく、そのまま

ぼーっとしていたが、やがて、さすがに体にだるさを
感じ、畳の上に身を横たえた。

しかし、それでも、眠りに落ちることはなかった。

神経が異常に昂ぶっていた。

そして、それ以上に、慚愧ざんきの念がジロウをさいなん
だ。

寝ころんで天井を見上げていると、巨大な暗闇がジ
ロウの上にのしかかり、押しつぶしてくるようだった。

息さえできないほどだ。

あの榎本が殺された。

自分はその場において、しかも、何もしなかったのだ。もし自分が、あそこで飛び出していれば、盾になつても榎本を助けることができたかもしれぬ。たとえそれが無理でも、注意をこちらに向け、弾筋を逸らせるくらいはできただろう。

自分がそうできなかったのは、要するに、榎本が対

峙していたのが湯木沢だったからだ。湯木沢に正体を知られたくない。ジロウは、あの時、そう思っていた。

恩も義理もある榎本の命より、湯木沢との関係の方が大事だったのだ。女の格好をし、女として暮らしているうち、極道にとって最も大事な義侠心さえ見失ってしまっている……いったい自分は、どうなってしまったのか……。

時折、遠くから聞こえる、パトカーの音やなにかの

爆発音さえ、自分を責めているようだった。

やがて外が明るくなり、ジロウは、のそのそと起きあがった。

すると、今度は、ひどく落ち着かない気分になったのだ。

自分が、ひとり取り残されているような、そんな気がした。

街は今、男たちが命を賭した戦の場と化している。

そんな街の中にいて、ひとりこんな隠れ家のような場所でのうのうとしていていいのか。自分には、もつとすべきことがあるのではないか……。そう思った。

しかし、いったいなにをしたらよいのか、自分がなにをしたいのかさえ、よくわからない。

それでジロウは、一階と二階の間を、ただ無意味に行ったり来たりした。

なにより、外の状況が、まるでわからないのが問題

だった。

鬼頭は、はたして本当に死んだのか。榎本を撃った奴はどうなったのか。その後起こっただろう、それぞれの組同士のせめぎ合いは、どんなふうに進展しているのか。そして、湯木沢は……？

テレビもないここにいては、それら、すべてのことがわからない。ジロウは、なにより、それにいらだつていた。

そんないらだちが限界に達しかけた、七時をまわった頃だった。

店の電話が鳴った。

「はい、『みなと』です」

「：：私」

美佐恵だった。

「あの人の遺体は、手続きがすめば引き取れるらしいけど、なんだか、私は、参考人聴取つてのをされるら

しいんだ。何時んなるかかわかないから、今日は、臨時休業ってことにしといてくれ。それから、樹里ちゃん、あんたは何も心配することないからね」

「あの、ママ……」

ジロウが聞き返す前に、用件だけを告げ、電話は切れた。

おそらく、警察署の中からかけてきたのだ。その素気なさは、美佐恵が、刑事に余分なことを気取られ

まいとしているからだろう。

ジロウは、受話器を握りしめたままそう思い、やはり外へ出て情報を仕入れた方がいいと考えた。喫茶店へでも行けば、とりあえず、朝刊くらいは読めるはずだ。

顔を洗い、メイクもそこそこに、ジロウは店を出た。服だけは、昨日のままではまずいと思い、ワンピース

に着替えた。

十分ほど歩いて、港灣管理事務所のそばの喫茶店に入った。

港灣労働者のために、早朝から開いている店だ。

店に入ると、ジロウは、すぐさまマガジンラックから新聞を何紙かとって、席に着いた。

すべての新聞が、昨夜来この街で起きている一連の事件を大きく報じていた。どれも、社会面のほとんど

がその記事に費やされ、地方紙などは一面トップから始まっていた。

まず、最も大きく扱われていたのは、鬼頭の死だ。

「病院内で暴力団組長射殺」——そんな見出しが大きく出ていた。

どうやら、鬼頭は、一撃で命を落としたりらしい。

新聞によれば、榎本は、病室には入らず、窓を開け、ベランダから狙撃したようだ。

それで、サイレンサー銃の音に気づいた用心棒の男たちが部屋に入ったときには、すでに、ふたたび壁をよじ登っていた。男たちはベランダに飛び出し、屋上に向けて発砲したが、榎本は、それをあやうくかいくぐった。ジロウが聞いた三発の銃声は、その時の音だろう。

周囲にいた鬼頭組の連中や警察が駆けつけたときには、すでに榎本は、屋上からも姿を消していた。

ところが、病院の外に逃げたところで、鬼頭組に見つかり、そこで射殺された。

「逃亡中、犯人も撃たれ死亡」

新聞は、榎本の死をそう扱っていた。

そして、榎本を撃った鬼頭組の男は、一時間後に警察に自首したと記事にはあった。

銃による殺人と言っても、逃亡する殺人犯を撃ったということ、あの男は極刑にはならないはずだ。せ

いぜい七・八年の罪だろう。それを見越しての自首に
ちがいない。

新聞は、そのあと、事件後、街じゅうでつづけざま
に起きた銃撃戦について書いていた。

「市内各所で衝突激化」

巻き添えを食って重傷を負った市民もいることが記
されたあと、この一週間で双方の組長が射殺され、暴
力団どうしの抗争はますます泥沼化していく様相を呈

しているというまとめがあり、さらにそのあと、市民生活を省みない暴力団への非難と、それを許している警察の取り締まり体制の甘さへの批判がつづいた。

ジロウがそこまで読んだとき、喫茶店のテレビから、ワイドショーのレポーターの甲高い声が響いた。

見ると、画面には、見慣れた建物が映っていた。横手組の組事務所からの現場中継だった。窓ガラスが割れ、壁にマシンガンで撃ち込まれた弾の跡がある。昨

夜、事件のあと、すぐに襲撃されたらしい。

「この街はもう、法治国家日本ではありません」

レポーターは、そう絶叫した。

新聞に目を戻しつづきを読むと、別枠で、組長射殺事件の詳細が解説され、その中に、ジロウ自身のこと
が書かれていた。

「共犯の女、看護婦にばけて手引きか」

現時点——少なくとも、この記事が書かれた時点——

—では、警察は、共犯者の存在には気づいていても、その正体が誰なのかわかっていないようだった。それがじつは男で、ましてや二ヶ月前の鬼頭狙撃事件の犯人だということまでは想像していないにちがいない。強行班の刑事たちは、今頃、必死になって、その共犯の「女」を探しているはずだ。

美佐恵が聴取を受けているのは、たぶん、それを疑われてのことだろうと、ジロウは思った。

鬼頭の用心棒たちが看護婦を目撃した時間、美佐恵は店で客たちの相手をしていたはずだから、明確なアリバイがある。それに、年格好もちがうのだから、すぐに疑いは解けるだろう。

しかし、美佐恵が榎本の情婦として名乗り出た以上、その経営する店に、一ヶ月半前突然現れた「女の子」にまで疑いがおよぶのは、いわば時間の問題だ。

美佐恵はさっきの電話で、「樹里ちゃん、あんたは

何も心配することないからね」と言っていた。あれは、警察にきかれても、ジロウのことはしゃべるつもりはないということ、それとなく伝えてきたのだらう。

しかし、裏付け捜査で、今日にも警察が店にやってくるかも知れないし、そうでなくとも、店の常連たちに聞き込みでもされ、それが、鬼頭の用心棒たちの証言と照合されれば、看護婦に化けた女が「樹里」だということ、遅かれ早かれわかるはずだ。

そして、もう一方で、別の面からも、警察の手はジロウに迫っていた。

「遺留品から共犯者の指紋」

鬼頭の病室のドアノブや窓の鍵はもちろん、一階のトイレやナースステーションにも、そして、紙袋の中のものや例の花束にも、ジロウは多くの痕跡を残している。

今、それらから採取された指紋が、前科者の指紋リ

ストと照合されているはずだ。当然、警察は、女のリストからあたっているだろう。しかし、最近の指紋照合はコンピューターを使い、以前とくらべずっと速くなっているという。その照合範囲が、ジロウも含まれる横手組関係者に拡大されれば、これも時間の問題で、あの看護婦がジロウだったことがわかる。

警察は、一ヶ月半前の鬼頭狙撃事件の犯人をジロウだと目星をつけているようだから、そうなれば、「樹

里」の現れた時期と、看護婦への女装という点から考えて、その「樹里」こそがジロウだということに、やがて気づくにちがいない。

まちがいなくジロウは、さまざまな方向から追いつめられている。できるだけ早く、「みなと」から姿を消した方がいいかも知れない。

新聞を読みながらそんなふうに頭を巡らせたジロウは、そこで——場違いな話だが——、自分が、以前よ

りずっと「ものを考える人間」になっていることに驚いていた。

以前の自分なら、たとえ自分がかかわった事件の記事を読んだとしても、こんなふうに警察の動きまで推理することはできなかつたにちがいない。これはたぶん、この間、これまでの自分とはちがう人間を演じることで、別の角度からものを見るといふ習慣がついたからにちがいないと思った。

そして、そんなふうを考えることで、さらに自分を客観視できるようになり、昨夜来の榎本の死に対する自責の念からも多少解放された。

とはいえ、もちろん、それで今後の身の振り方についての答えが出るわけではない。追いつめられていることに変わりはないのだ。

これから、どうしたらいいのか？

出されたコーヒーとモーニングセットを食べながら

ら、ジロウは考えた。

いまさら組に助けを求めても、ずっと居場所も告げず身を隠していたジロウを救ってくれるとは思えない。以前ならともかく、ことがここまで拡大してしまつた以上、ジロウの身柄は、鬼頭組との駆け引きの道具としても使えないだろう。それに、榎本が死んだ今となつては、ジロウの方も、坂木が牛耳る横手組に戻る気はなくなつていた。

自分にとって、今いちばん大事なことはなんなの
か？

それを見定めなければいけないと、ジロウは思った。

「ちよつと、あんた、……樹里ちゃんとか、いったよ
な？」

喫茶店を出て、とりあえず「みなと」へ戻ろうと歩
いていると、突然、背後から声をかけられた。

振り向いたジロウは、今、横道から出てきたらしい男の姿を見て、一瞬、びくりと身を固めた。刑事の須藤だったのだ。警察はすでにジロウの正体に気づき、逮捕しようとしているのかと思った。

しかし須藤は、そんなに緊張した表情をしていなかった。単に、ジロウを見かけ声をかけてきただけらしい。

それでジロウは、できるだけ平生を装って会釈した。

「聞いたぜ、ママのこと。鬼頭組のすぐ裏で店を出してて、じつは、横手組の幹部の女だったとはな。俺も驚いたよ。あんたは知ってたのか、榎本のこと」

須藤の言葉に、ジロウはまた警戒した。疑ってはいないまでも、手がかりをつかむために、探りを入れてきていることだけはまちがいない。

「さあ、あたしも、はっきりとは……」

ジロウは、できるかぎり無難な言葉を探し、そう答

えた。

「そうかい。おそらく死んだ榎本は、ママを、自分の女というだけじゃなく、鬼頭組の動向を探る情報屋としても使ってたんだろう。少なくとも、ことが伝われば、鬼頭の連中はそう思うにちがいない。なにか因縁つけてくるかもしれないねえから、あんたも気をつけるんだぜ」

須藤はそう言って片手を上げると、急いでいるよう

に、ジロウが来た方向へ立ち去った。

とりあえず、まだ、自分のところに疑いは向いていないようだ。

ジロウはそう思ったが、須藤が最後に言ったことも確かだった。警察だけでなく、鬼頭組の奴らも、いつ押し掛けてくるかわからない。やはり、「みなと」からは早々にフケた方がいいのだろう。

しかし、「みなと」に戻ったあとも、ジロウは、迷いつつ、そこにとどまっていた。

美佐恵から、なにか連絡が入るかもしれないと思っただのだ。

ここを去るにしても、世話になった美佐恵に黙っていなくなるのはよくない気がした。それで、取り調べが終わればかかってくるにちがいない美佐恵からの電話を待ったのである。

もちろん、じつは、ジロウを押しとどめているのは、それだけではなかった。

自分でも気づいていないが——いや、自分に対してさえ気がつかないふりをしているが——、それ以外に、ここを立ち去りがたい理由が、ジロウにはあった。ここを出て、姿をくらましてしまえば、もう、湯木沢との関係はそれで断ち切れることになる。それが、決心を鈍らせていたのだ。

そんなふうには煮え切らないまま、電話を待ち、薄暗い店のカウンターにすわっていた昼近くだった。

突然、なにかの衝撃で座っていた椅子が揺れた。そして、次の瞬間、大音響が轟き、店全体が振動した。

さらにすぐ、二階からガラスが砕ける音が聞こえた。

椅子から飛び降り、思わず頭を抱えてうずくまったジロウは、最初、一連の振動が地面の揺れから始まったことで、大地震でも来たのかと思った。しかし、立

ち上がり、まわりを見渡してみると、どうもそうではなさそうだ。音のわりには、カウンターの棚に並んだ酒瓶などは、倒れている様子もない。

それでジロウは、二階に上がってみることにした。

先刻の音から考えて、二階の窓ガラスが割れたことだけは、まちがいない。

階段を上がると、やはり、閉めたままのカーテンの下に、窓ガラスの破片が散乱していた。どうやら、カ

ーテンそのものもなにかの力で大きく押されたよう
で、窓の下ばかりでなく、部屋の真ん中あたりまで、
その破片は飛んでいる。

ジロウは、破片を踏まないように注意しながら窓に
近づき、そつとカーテンをめくってみた。

その古びた木枠の窓は、やはり上の段のガラス二枚
が割れていた。

しかし、それよりジロウを驚かせたのは、その向こ

うに見える鬼頭組のビルから、黒々とした煙が上がっていたことだった。ビル全体が燃えているわけではなかったが、一階の表あたりから火が出ているのだ。

物干し台がじやまになってよく見えなかったので、さらに伸び上がったのぞき込むと、火元は、一階の角のあたりだった。やはり、ビル自体からの出火ではなく、そこになにかがぶつかり炎上しているようだ。炎の中には、車のボディらしいものが見えた。

つまり、事務所の表側の角に、自動車がつっこんできたということだ。

しかし、単に車——それも、そんなに大型ではない——がぶつかっただけで、あんなにすごい爆音がするものだろうか。

それに、おそらく、この窓は、爆風で割れたにちがいない。現に、物干し台が間をふさぐ角度になる下段のガラスは割れていないのだ。見ると、鬼頭組のビル

の窓も、車がつつこんだ側だけが、三階まですべて割れていた。

車のガソリンタンクに引火して爆発したとしても、これだけの爆風は考えられない。おそらく、車になにかが仕掛けられていたにちがいはなかった。少なくとも、単なる交通事故でないことだけはたしかだろう。

すでに鬼頭組の男たちが、前の道に何人か出て、火を消そうと水をかけていた。そこにパトカーもやって

きて、また、周辺に配備されていたらしい警官や野次馬も集まり、消火を手伝っている。

火の手は徐々に小さくなりはじめているようだ。消防車らしいサイレンも遠くから近づいてくる。風もないし、とりあえず、火事がこれ以上広がることはないだろう。

しばらく見ていたジロウがそう思った時だった。さらに思わぬことが起こった。

部屋からつきだした物干し台の縁に誰かの手が掛かり、そこをよじ登ってくるのが見えたのだ。

顔を出したのは、なんと、湯木沢だった。

「……えっ？」

驚いてジロウが見ていると、湯木沢は事故現場からの目を気にするようになり、素早く物干しの手すりを乗り越え、身をかがめながら、窓に近づいてきた。

「悪いが、入れてくれ」

カーテンの隙間にジロウの姿を認め、湯木沢が言った。

ジロウは、湯木沢の尋常でない様子に、迷う間もなく、窓を開けていた。まだ窓枠についたままだったガラスの破片が、さらにバラバラと畳の上に着ちた。

部屋に入ろうと、窓のさんに足をかけたところで、湯木沢はちよつと戸惑った。靴を履いたままだったからだ。

「そのままでもいいわ。畳の上、ガラスでいっぱいだから」

ジロウが言うと、湯木沢はうなずき、靴のままに入ってきた。そして、まず、ジロウのことを気づかった。

「だいじよぶだったか？」

「ええ、あたしは、べつに……」

その言葉にもう一度うなずくと、湯木沢は、カーテン越しに外をうかがいながら言った。

「くそっ、横手組の奴ら、マイト積んだ軽トラぶつけてきやがった」

ジロウには、湯木沢が、なぜこんなふうに見えたのかよくわからなかったが——単に、ジロウのことを気づかかってというわけではないだろう——、とりあえず、この部屋の中をどうにかしなければならぬと思つた。

「ちよつと待っててね、ここ、かたづけちやうから」

そう言って、ジロウは、掃除道具を取りに階下に降りた。

店から持ってきたほうきとちりとりで、ジロウがガラスの破片を片づけているあいだ、湯木沢は、ずっと窓べりに立ったまま、組事務所の方をうかがっていた。

おおかたの破片を掃いたあと、雑巾で畳の表面を拭きながら、ジロウもカーテンの隙間からのぞいたのだ

が、駆けつけた消防車の放水のおかげで火はあらかた消えたようだ。ビルも、爆発のあつた角の部分は大破していたが、むき出しになりながらも、鉄骨はまだしつかり立っていた。

「もういいわ。靴、この上に脱いで。あとで下に持つて行くから」

ジロウがそこに置いたちりとりを指し示して言う
と、湯木沢は、靴を脱ぎながら言った。

「みつともねえとこ見せちまったな。こんなところから来ちまって」

「いいけど、でも、どうして……？」

「サツの奴ら、これをいい機会に、被害調査とか言つて事務所ん中まで入ってくるだろうからな。保護観察中の俺がそこにいりゃあ、任意で引っ張るのは目に見えるてる。サツがたむろしてる表からは出られねえし、とっさに裏口から出て、ここに登ってきちまった。悪

かったな」

ジロウは湯木沢の言葉に納得し、笑顔で首を振ると、「座って」と、拭いたばかりの畳の上に座布団を敷いた。

湯木沢は、その座布団の上に腰を落としながらさらにこうつけ加えた。

「ゆうべも、事件現場にいたこと、サツに知られてるしな」

「大変だったみたいね、病院のまわり」

ジロウは何気なくそう言いながら、どうせガラスが割れているのだから無駄だとは思ったが、窓を閉めた。

と——

「痛っ……」

指先に痛みが走った。窓枠にまだ残っていたガラスで切ってしまったようだ。

すると、いったん座った湯木沢が、あわてて立ちあ

がり、その手を取った。

人差し指の先の一センチほどの切り傷から、真っ赤な血がにじむように出てきて、すぐにこぼれ落ちそうなほど盛り上がった。

と、いきなり、湯木沢はその手を自分の口に持っていき、血を吸った。

「……！」

湯木沢に指先をくわえられ、ジロウはその痛みとは

ちがうなにかが体の中を走る感覚を覚えた。

血を見てとっさにそうしてしまつたらしい湯木沢は、口を離すと、驚いて見つめているジロウに、照れたように言った。

「……なにか、血止めするものはあるか？」

「……え、ええ。そこの鏡台にバンドエイドが」

ジロウが言うと、湯木沢はいったん手を離し、すぐに鏡台の引き出しをあけて、バンドエイドの箱を探し

出した。

箱の中から、一枚を抜き出し、湯木沢はジロウの指にそれを巻いてくれた。

ジロウは指の痛みも忘れ、なんだかひどくうれしい気がした。ふだんの湯木沢は、けっしてこんなことをする男ではないだろう。それだけ、ジロウのことを大切に思ってくれているからにちがいない。そう思えたのだ。

そんなことを感じていたせいで、ジロウは、その時、湯木沢がどこか不可解そうな表情をしていたのに気がつかなかった。

「ありがとう。ちよつと、これ、下に置いてくるね」

ジロウは、湯木沢の靴の乗ったちりとりとほうきを
示してそう言うと、バンドエイドの箱を元に戻すふり
をしながら、鏡台から化粧道具の入ったポーチをそつ
と取り出した。

今日はまだ、ちゃんとしたメイクをしていないのが
気になったのだ。

店に降りたジロウは、湯木沢の靴を階段の下に置き、
ほうきとちりとりをカウンターの中に戻すと、トイレ
に入り、洗面所の鏡でメイクした。

外出用の化粧ポーチしか持ち出せなかったし、湯木
沢をあまり長く待たせておくわけにもいかないので、

簡単なメイクしかできない。それでも、ファンデーションと口紅を塗り直し、軽くシャドーを入れると、見つめられても恥ずかしくない程度には満足いく顔ができた。都合よく、ポーチの中に香水のスプレー瓶も入っていたので、それも、耳の後ろに噴きつけた。

車の中や、例の遊園地の観覧車を除けば、ひとつ部屋の中で湯木沢と二人きりになるのは、これが初めてだ。この間の二人の進展から考えて、「男と女」とし

て何が起こっても不思議はない。香水は、そう考えてのことだった。

もちろん、本当にいくところまでいってしまえば、湯木沢に秘密を知られることになる。それを恐れて、この間、湯木沢が部屋に入ることを拒んできたジロウだったが、今、ひよんな成り行きからそんな状況に置かれ、大きな不安を抱えながらも、一方で、わくわくするような感じを抱いていた。さつき、湯木沢に、血

の出た指を吸われた時の感覚が、体の中でずっとうずいていたのだ。

その結果、ジロウは今、自分が追いつめられているということすら忘れていた。いや、追いつめられているからこそ、もうどうなってもいいという気持ちがある。どこかではたらいいたのかもしれない。

二階への階段を昇りながら、ジロウは、湯木沢のた

めになにか飲み物でも作った方がよかつただろうかと思つた。それで、階段を上がりきる前に、部屋に顔をのぞかせるようにしてきいた。

「耕さん、なにか、飲む？」

「……いや」

見ると、湯木沢はまた座布団から立ち上がり、先刻と同じように窓の脇に立っていた。ただ、今度は、壁にもたれるようにして腕を組んでいる。

「そんなところにつっ立つてないで、いいから、座つてよ」

部屋に入りながら、ジロウは明るい口調で言った。

湯木沢が、慣れない「女の部屋」で、緊張しているのだと思ひ、もつとりリラックスさせようと思ったのだ。

しかし、湯木沢は、その姿勢のまま、入ってきたジロウの顔を見つめてきた。

「ん？：：どうしたの？」

ジロウはまた軽い調子で言ってみたが、そのままざしに、どこか違和感を感じた。どうも、照れや緊張ではないようだ。

「……？」

すると、湯木沢は、ジロウから目をそらせ、部屋の隅に置かれたハンガースタンドの方にあごをしゃくるようにして言った。

「その服、お前のか？」

ハンガースタンドの一番手前には、ジロウが昨日着ていたブルーのスーツが掛かっている。

「……え、ええ。最近、買ったんだけど……」

ジロウの感じた違和感は、急速に不安に変わっていった。

「俺は、昨日、二度それと同じような服を着た女を見た。一度は、夕方、病院の玄関を入れて行くところを。」

二度目は、横手組の男が死んだ現場で」

「……な、なにが、言いたいのか？」

「二度とも、後ろ姿しか見なかったが、いやにお前に似た女だなと思った」

「……」

「それに、さつき俺が、ゆうべの話をした時、お前はそれを、すぐに病院だと思って返事したよな。俺はあの時、『事件現場』としか言わなかったはずだ。ゆうべ、『事件』は、病院だけじゃなく、街じゅうであつ

たんだぜ。なんで、病院だとわかった？」

「それは……」

ジロウは、なんとか、自分の犯した失敗をとりつくるおうと言葉を探したが、とっさには、いい言い訳は考えつけなかった。

と、そこで、湯木沢は話の方向を変えた。

「死んだ榎本の死体をサツにもらい受けに来たのが、ここのママだったと、けさ聞いた。驚いたぜ。ママが、

榎本の女だったとはな」

湯木沢はもたれていた壁から身を起こし、さらに射るような目でジロウを見つめた。

ジロウは、いったんはその目を見返したが、耐えられず、すぐに視線を泳がせた。

その様子を見て、湯木沢がつづけた。

「看護婦に化けてた女ってのは、お前だな」

湯木沢の鋭い視線の前に、ジロウはうなずくことさ

えでできず、立ちすくんだ。

と、湯木沢は、ジロウに近づきながら、さらに言った。

「それだけなら、俺は、まだ許せたかもしれねえ。義理のあるママに頼まれて、しかたなく手伝ったってこともあるだろうからな。でも……」

湯木沢は、そこでいったん言葉を区切った。そして、ジャケットのポケットに手を突っ込んだ。

「俺は今、この部屋で、おかしなものをみつけちまつてな」

湯木沢は、ポケットに入っていたなにかを握り、取り出した。

「：：あ」

それを見て、ジロウは思わず声を上げていた。

それは、この部屋で暮らすようになった時、ジロウが鏡台の引き出しの奥に隠した拳銃だったのだ。一ヶ

月半前、鬼頭を撃ったあの銃だ。

先刻、引き出しからバンドエイドを取り出したときに、湯木沢は気がついたにちがいない。他のもので隠すように奥に入っていたはずだから、はっきりとは見えなかったのだろうが、引き出しの重さや、ちよつとした音で、湯木沢は銃の存在を直感した。

それで、ジロウが下に行っている間に確かめ、ポケツトに隠したのだ。

「これは、簡単に手に入るから、今や世の中にありふれてるトカレフってチャカだ。それも、純正のロシア製じゃなく、中国製。たぶん、密入国したやつが持つてきた中国軍の横流し品だろう。珍しいもんじゃねえ。ただこのチャカは、ちよつとした改造がしてあつてな。銃身が短くなつてんだ。ほら、ここにヤスリのあとがあるだろ。この方が命中率は落ちるが、殺傷力は強まる。筋もんがよくやることだ。ところでな、俺は、こ

れとおんなじチャカを、お前と知り合うちよつと前に見てんだ。夜中だったし、突然のことだったんで、はつきりとは言えねえが、たぶん、俺のカンに狂いはねえはずだ」

銃を見ながら、そう言い終わると、湯木沢は、その銃口をゆっくりとジロウの方に向けた。

「……おめえ、いったい、何者だ？」

ジロウは、啞然とした表情のまま、湯木沢を見据え

て立っていた。

膝ががくがくとふるえた。銃を向けられている恐れというより、湯木沢に、一挙にすべてのことを見透かされてしまったという驚愕のせいだった。

湯木沢は、銃を構えたまま、さらに一步ジロウに近づいた。銃の先は、ジロウのワンピースの胸のふくらみに、触れるところまで来ていた。

と、そこで、湯木沢は、左手をジロウの頭にさしの

べた。そして、強い力でその髪をつかんだ。

「あっ」

ウィッグを引き剥がされ、小さく叫んだジロウの頭髪は、かなり伸びてしまっていたが、まだスポーツ刈りの名残があった。

おそらく、そう推理したからこそ髪を引っ張ってみたにちがいない湯木沢の方がむしろ、眼前に現れたその事実にも動転したようだ。にらんでいた目を見開いた。

「……や、やっぱり、てめえ……か、ジロウって……、
……野郎は」

湯木沢は、絞り出すような声でそう言った。

それと同時に、ジロウは、崩れ落ちるようにへなへ
なとへたり込んでいた。膝の力が抜け、立っていただけ
なかつたのだ。

膝元に座り込んでしまったジロウを、湯木沢はまだ
驚いたように見ていた。

その左手から、握りしめていたウィツグが落ち、畳の上の不気味な格好で広がった。しかし、湯木沢の右手の銃はまだ、ジロウに向けられている。

ジロウが見上げると、その銃口が、目の前にあつた。湯木沢は、なにかを吹っ切るように大きく息を吐くと、銃を少しだけ降ろした。

銃の先が、ジロウの口元まで達したところで、湯木沢は、それをジロウの唇に押しつけてきた。そして、

左右にねじった。そこをこじ開けるようにしたのだ。

唇をこねるその痛みにも、ジロウは口を開けざるをえなかった。

と、湯木沢は、拳銃の先をジロウの口の中にねじ込んだ。ジロウは、座ったまま、それをくわえる形になっていた。

この銃には、サイレンサーはついていない。撃てば、音が外に聞こえてしまうだろう。できるだけ大きな銃

声を立てないためには、こうして撃つのがいちばんなのだ。人間の頭が遮音材の役目を果たすし、確実に命もとれる。

ジロウもその意味がわかり、湯木沢は、まちがいなくこの場で自分を殺すつもりなのだと思った。

「てめえは、親の仇だ。俺がてめえを殺^やるのは、そのめだ。だがな、たとえ、そうじゃなくとも、俺は、てめえが許せねえ」

ジロウの口の中に入れた銃を持つ手をまっすぐに伸ばし、湯木沢はまた、絞り出すように言った。

ジロウは抵抗することなく、その目を見返した。

湯木沢の言うことはよくわかった。確かにジロウは極道の道理を越え、湯木沢に対して、人間として非道なことをしたのだ。湯木沢の純粹な心を、踏みにじったのだ。殺されてもしかたないと思った。

でも、ジロウには、死ぬ前に、湯木沢に対してどう

しても言っておきたいことがある気がした。だから、口をふさがれたまま、そのことを伝えようと、湯木沢を見返していたのだ。

しかし、湯木沢の目は、そんなジロウのまなざしなごど跳ね返してしまふほど、暗い怒りに満ちていた。

それでジロウは、静かに目を閉じた。

自分は今、あらゆるものから追いつめられている。

どちらにしても、もはや逃げ場はないだろう。どうせ

殺されるなら、湯木沢の手で殺される方がいい。そう
思った。

ジロウは観念して、湯木沢が引き金を引くのを待っ
た。

静寂の時間が流れた。

いつの間にか、外の火事場から聞こえる騒ぎも静ま
っているようだ。

一分、いや、それ以上の時間が経過したと思う。

それでも、その銃は火を噴かなかつた。

湯木沢はなにをしているのだろう。もしかしたら、自分がおびえるのを見て楽しんでいるのかもしれないと、目を閉じたまま、ジロウは思った。

しかし、ジロウはおびえてはいなかつた。

こんなふうにいたぶられて殺されて当然なことを、自分は、この人にしたのだ。むしろ、この人の手で：
：、愛する人の手で殺してもらえただけ、幸せという

ものだ。

そう、俺は……あたしは、まちがいなく、この人を愛している。

そう感じることで、不思議とおびえはなくなっていた。

——と、ジロウの口の中の銃が、静かに引き抜かれた。

驚いて目を開けると、湯木沢は、銃を持っていた手

をだらりと垂らし、ジロウの視線から目を背けた。

「……できねえ。おめえは、かつらをとつてても女に見える。女を殺すことは、俺にはできねえ」

湯木沢はそう言うと、ジロウに背を向けた。

そして、今度は、吐き捨てるように言った。

「消えろ！　もう二度と俺の前に現れるな」

ジロウは、その後ろ姿を呆然と見つめた。

と、湯木沢は、階段の方へ向かって歩き出した。

なんだか、ひどくあつけない気がした。

自分が生き延びることができたというのに、これではいけないと、ジロウは感じた。

このまま湯木沢が階段を降り、そのあと自分がここを去る。それですべてが終わる。

でも、さっき自分が感じていた気持ちは、そんなことで終わっていないはずはない。

「……待って、耕さん」

湯木沢が階段を降りようとする瞬間、ジロウは呼びかけていた。

その声に、湯木沢は足を止めた。だが、こちらを振り向こうとはしなかった。

「これだけは聞いてほしい……の」

「……」

「あたし、耕さんをだましてきたけど、でも、耕さんといっしょにいるとき、あたしはうそをついてなかつ

た」

「……黙れ。おめえも男なら、これ以上みつともねえまねをさらすんじゃないやねえ」

湯木沢は、やはり、ジロウの方を向かずに言った。

「でも、あたし、耕さんの前では……」

「うるせえ、今さらそんな猿芝居をつづけてどうなる」
「耕さんの前にいるとき、あたしは女だった。自分のことを女だと……」

「てめえ、やめろって言っただろうが」

湯木沢は声を荒らげ、振り向いた。

「あたし、女として、耕さんのことを……。これまで生きてきて、こんなに人のことを大事だと思ったこと、なかった。だから、ゆうべ、あんなに世話になった榎本の兄貴が目の前で命を落としたっていうのに、あたし、耕さんの前に、自分の姿をさらせなかった」

「まだ言うか！」

「耕さんが信じられないのは、わかってる。でも、これだけは言っておかないと、あたし、死ぬに死ねない。あたし、耕さんと知り合えたことで……、いつときでも耕さんに愛されたと感じられたことで、初めて自分が生きてる価値のある人間だって思った。それだけは、うそじゃない」

「……」

湯木沢は、ジロウを黙って見ていたが、その眼差し

は、ジロウのことをまだけっして許してはいない、冷たいものだった。

やはり、湯木沢には伝わらなかった。ジロウはそう感じ、肩を落とした。もちろん、悪いのは自分なのだ。今さら、うそで固めてきた自分の言葉を、信じろという方が無理だろう。

と、そこで、湯木沢は鼻で笑うような声を立てた。

「けっ、俺をこけにして喜んでたにちがいねえてめえ

が、なんで今さらそんなことを言う。よおし、そんなに言うなら、証拠でも見せてもらおうじゃねえか」

ジロウがふたたび見上げると、湯木沢は、先刻よりさらに冷酷な表情でジロウを見返した。その目に、野獣じみた残酷な翳りがさしていた。それは、これまで湯木沢がジロウの前ではけっして見せたことのなかった、極道の顔だった。

「……証拠？」

「ああ……」

湯木沢はそう言うと、ふたたびつかつかとジロウのそばに歩み寄った。

「てめえが、自分は女だと言うなら、その証拠をな」

「……え？」

湯木沢の言いだしたことがわからず、ジロウは、目の前に立ったその顔を真下から見上げた。

「俺のチャカを、もう一度くわえてみるよ」

「……？」

さらに湯木沢の意図することが理解できず、ジロウは、目を泳がせながら、湯木沢の右手を見た。その手には、まだ銃が握られていたが、だらりと下げたままで、ジロウに向けてはいない。

と、湯木沢がまた言った。

「そうじゃねえよ。『俺のチャカ』って言っただろ。女なら、好きな男のものをくわえるくらい、誰だって

するぜ」

「え？」

ふたたびジロウが見上げると、湯木沢はまた、鼻で笑うようにして見下ろした。

ジロウは、その目をまっすぐに見た。

今度こそ、湯木沢は自分をいたぶろうとしている。

そう感じたジロウは、その視線を、湯木沢の体にそってゆっくりと下げていった。

立て膝気味に座っているジロウの、ちようど目の前に、湯木沢のズボンの腰の部分があつた。

ジロウは、もう一度湯木沢の顔をちらりと見てから、今度は、畳の上に目を戻し、なにかを探す目をした。

そして、そこにあつたウィッグを見つけると、ふたたびそれをかぶり、形を整えた。

「……？」

そんなジロウの行動を見て、湯木沢の冷酷な目つき

に、とまどいの色が混じった。

自分自身の気持ちを確認めるかのようにかすかにうなずいたあと、ジロウは、湯木沢のベルトに手を伸ばした。

「……て、てめえ、ほんとに、する気か」

ベルトをゆるめ、ズボンのウエストボタンをはずすジロウを見て、湯木沢がつぶやいた。

ジロウは、それには答えず、ジツパーを降ろした。

ジッパーの間から片手を差し入れ、トランクスの上から触れると、それは、まだ軟らかなかたまりという感じだったが、その存在を確かめるように手を這わすと、急速にはつきりした形になり、やがて、トランクス生地を持ち上げるほどに堅くなってきた。

「お、おい……」

動揺する湯木沢のトランクスの上の部分に手をかけ、引き下ろす。

ジロウの顔の前に、先刻の拳銃と同じように、湯木沢のものがつき立った。

ジロウは、両手を剛毛でおおわれたその根本に添え、握った。ジロウの手の中で、それは、急速に太さと堅さを増していった。

そこに流れ込む血液の鼓動が、ジロウの手のひらに伝わってくる。

光を反射するほど赤黒く張りつめたその先を、ジロ

ウはじつと見据えた。

すると、そこから、とろんとした透明な液体がにじみ出てきた。

ジロウは、ゆっくりと体を前に傾けていき、その液体を唇で受けた。

ジロウの唇が先に触れると、湯木沢の全身がぴくりと震えた。

唇を開きながら、ジロウがそれを口の中に入れてい

くと、強い臭いが鼻腔に達した。それは、いつもキスするときにかすかに感じていた「湯木沢の臭い」だった。

ジロウは、その怒張したペニスを口にふくんだまま、ちらりと目を上げ、湯木沢の顔をうかがった。湯木沢は、未だ驚いたような表情でジロウの顔を見下ろしていた。

それで、ジロウは目を閉じ、ゆっくりと首を前後に

動かし始めた。

口の中のものが、さらに大きくなったのがわかった。と、耐えられなくなったらしい湯木沢が、腰をつきだした。

ジロウは、それに応えるように前後の動きを速めた。舌の上にさらに液体が漏れたのを感じ、ジロウは、それを舐め取るように舌を這わした。

「……うっ」

湯木沢がうめき、さつきより強く腰をつきだしてきた。

湯木沢のものが突き刺さるようにのどまで達し、ジロウはむせそうになった。

そのせいで、閉じたジロウの目に涙がにじんだ。

そして、その最初の涙をきっかけにして、左右の目からつづげざまに涙が溢れ出た。

湯木沢のものをくわえ、首を前後に振りながら、ジ

ロウは泣いていた。頬を伝った涙が、あごの先から、次々に畳の上に落ちた。

「も：：もういい、：：わかった」

激しくなる息づかいの中で、湯木沢が言った。

それでもジロウは、その動きをやめなかった。

と、湯木沢は、自然に動いてしまう腰の動きを必死に抑えるように顔をゆがめながら、ジロウの頭を両手でつかんだ。

湯木沢の手には、まだ拳銃が握られていたが、湯木沢は、その銃尻がジロウの首筋に強くあたらないように、手のひらの丘の部分でジロウのあごをはさみ、自分のものから引き離れた。

それで、ジロウはやっと、涙で潤んだ目を開け、湯木沢の顔を見上げた。

「なにも、泣いてまですることあ、ねえだろう」

湯木沢は、わけがわからないという口調で言ったが、

さつきまでの冷酷な声音は薄らいでいた。

と、ジロウは、湯木沢の目を見つめたまま、首を振った。

「ううん、そうじゃない」

「……？」

「そうじゃないの。あたし……、あたし、うれしかった。あたしの口で、耕さんが、こんなに……」

そこまで言ったところで、ジロウの目に、ふたたび

新たな涙があふれ出した。

「おめえ……」

湯木沢は、そんなジロウの顔を呆然と見つめた。

湯木沢の手の力がゆるんだので、ジロウはふたたび、湯木沢のペニスに頬ずりし、唇を寄せた。

頬や唇に感じるその強い力が、ジロウに、なにか生きる意志のようなものを注ぎ込んでくれる気がした。

そして、その「強い力」が、「女としての自分」によ

つて引き起こされているということが、ジロウには大きな喜びに感じられた。

「……樹里、おめえは……」

湯木沢が言った。

そして、次の瞬間――

湯木沢の体が、倒れ込むように、ジロウの上に覆い被さってきた。

座っていたジロウを後ろに押し倒し、湯木沢は、ジ

ロウの唇に自分の唇をかぶせた。

背中にまわしてきたその手には、すでに拳銃は握られていなかった。

「樹里……」

きつく抱きしめながら、乱暴とも言えるキスをしたあと、湯木沢はいったん唇を離し、ふたたび言った。

「……お前は、俺の……、女だ」

「……！」

ジロウは、驚いた顔で湯木沢を見つめたあと、その手を、すがるように湯木沢の背中にまわした。

二人は、ふたたび、激しいキスを交わした。

しばらくそうしていたあと、湯木沢は、その唇を頬から首筋へと這わせながら、ジロウの着ているワンピースを脱がしていった。

「耕さん：：、ああ：：耕さん：：」

そのあいだ、ジロウは、まるでうなされたように湯

木沢の名前を呼びつづけた。

ジロウをブラジャーだけに剥くと、湯木沢は、自らもジャケットやセーターを脱いで、裸になった。

二人は、それぞれの肌の暖かみを確かめ合うように、ふたたび抱擁し合った。

そして、湯木沢は、ジロウの股の間から後ろに手をまわし、きいた。

「ここで……いいか？」

ジロウはちよつと恥ずかしそうにしながらも、湯木沢の目を見つめ、うなずいた。

ジロウの両脚を抱え込んだ湯木沢は、そこに、いきり立つものを突き立てた。

「あああ：：」

それが体の中に入ってくる時、ジロウは、これまで一度も感じたことのないほどの痛みを味わった。

子供の頃、家の中で感じていた孤独の痛みも、ぐれ

ていた時、心の中にあつた空疎な痛みも、さらに、この世界に入つて、そんな痛みをごまかすために自分に課した「義理」の痛みも、それらすべての痛みを消し去るほど、その痛みは、ジロウの心をえぐり、そして、
：：
満たした。

まどろみから覚めると、ジロウは、自分が布団の中で寝ているのに気づき、一瞬、今のは夢だったのかと

思い、不安になった。

しかし、目の前に、かすかに胸毛の生えた湯木沢の胸板があるのを見つけ、ほっとした。

そこで、ジロウは、意識を失う前、自分たちにしてきたことの記憶をたどり、ひとり頬を赤らめた。

一度目の激しい交わりの後も、二人ともお互いの体から離れがたく、ジロウと湯木沢は、布団を敷いて、もう一度その中で抱き合っただ。

布団と湯木沢の腕に包まれた、ゆったりとした二度目の交わりは、ジロウの心をさらに満たすものだった。湯木沢に身を預け、揺れているうち、ジロウの精神は、これまで経験したことのない高みに何度も昇った。おそらく、ジロウは、大きな声を上げていたにちがいない。

そして、何度目か、そんな高みに昇りつめた瞬間、ジロウは気を失ったのだ。そのあとのことはまるで覚

えていない。ただ、湯木沢という存在に包まれ、安心してしまった感覚だけがあった。

「ふふ、目が覚めたか」

頭上から、湯木沢の声が聞こえた。

寝たままで顔を上げると、そこに湯木沢の顔があった。湯木沢は、両腕でジロウの頭を包み込むようにして寝ていた。

「ずっと、見てたの？」

「ああ、ゆうべ、寝てないんだろ。ガキみたいに、すやすや眠ってたぜ」

湯木沢の言葉に、ジロウは、ちよつと口をとがらせるようにした。

と、その唇めがけて、湯木沢が唇を押しつけてきた。

「ううん……」

ジロウは思わず鼻声を漏らし、湯木沢の大きな背中を抱きしめた。

また長いキスのあと、ジロウは湯木沢の胸に頬ずりしながらきいた。

「今、何時くらい？」

「さあな。たぶん、そろそろ暗くなる時分だろう」

湯木沢の答えに、ジロウは、その胸板をなでるようにしながら、ちよつと考え込んだ。

ずっとこうしていたい気持ちは強かったが、そうも言っていない。

湯木沢との関係が大きく変わったとは言え、自分が置かれている客観的状況は何ら変化していかないのだ。ここにも、長い間とどまってはいられないだろう。

では、どうしたらいいのか？

：：自分にとって、今いちばん大事なのはなんなのか？

先刻のその問いに対する答えは、すでに出ていた。さつきまで、追いつめられ、もし殺されるなら、そ

れでもいいと思っていたジロウだが、今は、生きたいと思っていた。湯木沢とともになら……。

しかし、当の湯木沢はどう考えているのだろう。どうしたいのだろう。そして、あたしに、どうしてもほしいのだろう。

ジロウがそんな考えを巡らせていると、まるでそれがわかったかのように、湯木沢が言った。

「樹里、お前、すぐにこの街を出ろ」

「……え？」

ジロウが驚いてふたたび見上げると、湯木沢は、ウイッグの髪をなでるようにしてつづけた。

「ここにいれば、いずれはサツにばれる。早いうちに、できるだけ遠くまで行って、身を隠せ」

「でも……」

「落ち着き先が決まったら、連絡しろ。俺も、すぐにあとを追う」

「えっ？　じゃあ、耕さん……」

「ああ、足を洗う。俺は、お前を離したくねえ。それに、もう、こんな、殺った殺られたって稼業にやうんざりした」

その言葉に、ジロウは、湯木沢の顔を見つめた。

「どっか片田舎の町で、二人で静かに暮らそう。お前が、いやじゃないならだが……」

「耕さん……」

ジロウの目が、また、涙でにじんだ。

——と、その時だった。

「……樹里ちゃん、あんた、上にいるのかい？」

店から美佐恵の声が聞こえたのだ。

「……！」

ジロウは、驚いて半身を起こし、やはり弾かれたように起きあがった湯木沢と顔を見合わせた。

いつの間にか、美佐恵が警察から戻ってきていたら

しい。

一瞬言葉が出ず黙っていると、なんと、足音が階段を上つてきた。

それを聞いてジロウはさらに焦った。こんな姿を美佐恵に見せるわけにはいかない。

「……あ、ママ、い、いま、着替え中なんです。すぐ降りてきますから」

ジロウはとっさにそう答えた。

この間の経験から言えば、そんなことを言っても美佐恵はかまわず上がってくるのではないかと思ったが、美佐恵の足音は、階段の途中で止まった。

「そうかい、ちよつと話があんだ」

どうやらまた降りて行ったようだ。

ジロウと湯木沢は、見つめ合ったまま、いったんため息をついたが、ジロウはすぐに布団を出て、下着とワンピースを身につけた。

湯木沢もまた、音を立てないように用心しながら、服を着ている。

鏡台をのぞき、ウィツグの乱れと、口紅を手早く直し、ジロウが行こうとすると、そこで湯木沢が腕をつかんだ。

「いいか、必ず連絡するんだぜ」

湯木沢は、ふたたびジロウをきつく抱きしめ、耳元にでささやいた。

ジロウは、その目を見つめて、強くうなずいた。

階段を降りる途中で、ジロウはびくりとして立ち止まった。

カウンターの椅子に座っている男の足が見えたのだ。

どうやら、美佐恵が上まで上がってこなかったのは、他に客がいたかららしい。

：：しかし、いったい誰だろう？

そう思いながら、ジロウがふたたび降りていくと、カウンターの男がこちらを向いて椅子から立った。

「まったく今日は、驚かされてばかりだぜ」

その男の顔を見て、ジロウはまた立ちすくんだ。

「ママがなんと榎本の女で、そのママのところにいる美人の娘っ子が、なんと鬼頭撃ったチンピラたっついてい
うんだからな」

須藤だった。

「ジロウ、久しぶりだな。いや、今朝、会ったばかりか」

須藤は、にやにや笑いを浮かべてそう言った。

act.9 Mourning Daughter

そのがらんとした火葬場には、すでに、美佐恵とジロウの他、誰もいなかった。

後かたづけをしていた係の男は、釜の扉を閉めた残

響も消えないうちに、さっさと事務所に戻った。読経を終えた坊主も、布施を受け取ると早々に引き上げてしまった。

タイル張りの壁に造りつけられた木製ベンチに座った美佐恵は、和装の喪服の膝の上で、骨壺を納めた箱を白布でていねいに包むと、両手でそれをなでるようにした。

「こんなに、小さくなっちゃまって」

黒のツーピース姿で位牌を持って立つジロウも、ただ無言でうなずいた。

美佐恵は、昨日のうちに遺体を引き取れるつもりでいたようだが、戸籍上のつながりのない美佐恵に渡す前に、警察は、榎本の籍をたどり、青森にいる兄弟に問い合わせたらしい。そのあと、十数年前に別れた前妻にも連絡を入れたという。そして、そのすべてから受け取りを拒否されたあげく、やっと今朝になって美

佐恵に引き渡したのだ。

それで、通夜もできないまま、今日の葬儀になったというわけだ。参列者は、美佐恵とジロウの二人きり。

この火葬場のある市営斎場を借りた簡単な式だった。

美佐恵が言っていたとおり、葬儀に関して、組からはなんの申し出もなかった。

組は今、抗争の真っ最中だとはいえ、いくら何でも冷たすぎると、ジロウは思った。

本流からはずれていたにしろ、榎本は前組長時代からの幹部組員である。その上、相手の組長の命をとつた人間なのだ。本来なら、組が仕切つて、最後の花道を飾つてやるべきだろう。

美佐恵は、「私とあんたが見送つてやれば、それでじゅうぶんさ」と言ったが、ジロウの心には、やるかたない無念さと虚しさが残った。

「さあ、行こうか」

美佐恵は、そう言って立ち上がった。

美佐恵について出口に向かうと、火葬場の床に、ジロウの黒い靴のヒールが悲しく響いた。

「気をつけな。デカが見てるよ」

出口を出ようとした時、美佐恵が言った。

それでジロウは、手に持っていた黒いつば広の帽子を目深にかぶった。

外に出ると、確かに、庭の松の木の陰に刑事らしい

コートの方が立っていた。顔をはつきりと見られないためにも、早く車に乗った方がよさそうだ。

ところが、ジロウが車寄せに停まっているタクシーの方に行こうとすると、そこで美佐恵は、ふと立ち止まり、庭の一方を見た。

「悪いね。ちよつとだけ待ってくれ」

そう言うと美佐恵は、車寄せとは反対の方に歩いた。

この市営斎場は、市の北東の高台に建っている。そ

のせいで、庭のこちら側からは、街の全体がよく見渡せた。美佐恵は、榎本に、それを見せてやろうとしているにちがいない。

そう思い後に従うと、やはり美佐恵は、庭のはずれの花壇のそばに遺骨を抱いて立った。

春もそろそろ終わり。沖合は多少靄もやっていたが、港の景色はよく見える。

かすかなカモメの声に混じって、五号埠頭を今出て

行くところらしい外国船の汽笛の音が聞こえた。

「子供の頃から根無し草のこの人が、いちばん長く住んで、いちばん好きだった街だ。さみしい人間にやあ、港町が似合ってるのかもしれないね」

美佐恵は、独り言のようにつぶやいた。

どこか潮の匂いを感じる微風に、ジロウの喪服のスカートが揺れた。

美佐恵の言葉に、ジロウは、湯木沢のことを考えて

いた。

あの人も、さみしい人だ。できれば、昨日約束したように、あの人のさみしい心に寄り添って、その心を満たしてあげたい。

あんな形で別れたきりの湯木沢はきつと、ジロウはすでにこの街を出たものと思っっているにちがいない。そして、ジロウから入るはずの連絡を待っているのだ。

それなのに、自分はまだこの街にとどまり、その上、

昨日の約束を台無しにしてしまいかもしれないことを、しようとしている。

もしかするとそれは、すべての憎悪や嫌悪を乗り越え愛してくれた、あの人に対する裏切りかも知れない。

でもそれは、ジロウが、この港町ときっぱりと別れを告げるために、そして、榎本への義理に決着をつけるために、どうしてもしなければならぬことなのだ。

ジロウは、迷いを吹っ切るように、そう思った。

美佐恵は、しばらくそんなふうには街を見ていたあと、
やっと振り返り、車寄せへと向かった。

と、それを見ていた刑事が、車の方に走った。

美佐恵も、それに気づいたようだ。あきれたように
言った。

「ご苦労なこった。でも、やつらが見張ってるのは、
私の動きだろう。すぐにあんたを引っ張ってかないと
こをみると、須藤は、ちゃんと約束を守ってるようだ

ね」

美佐恵の言葉にうなずき、ジロウは、昨日の須藤との会話を、もう一度、心の中で反芻はんすうした。

「樹里ちゃん、落ち着きな。須藤のだんなは、あんたを捕まえに来たってわけじゃないんだ」

須藤の出現に呆然としているジロウに、カウンターの中の美佐恵はそう言った。

ジロウは、逃げることもせず、階段の上がりがまちにたたずんでいた。先刻までの湯木沢とのこともあり、混乱し、すぐには状況が把握できなかつたのだ。

「ま、いいから。とにかく、こっち来て座りな」

美佐恵に言われ、いまだ呆然としたまま下に降り、ジロウが、カウンターの椅子に腰掛けると、隣に座つた須藤はジロウの顔をまじまじと見て、言った。

「なるほど、言われてみりやあ、たしかに、あのとつ

ぽい感じだったジロウの顔だが、こうまで女のかっこが似合っていると、まず、誰にもわからんだろうな」

どこかにやけた須藤の視線はいやだったか、美佐恵の言うように、すぐどうしようというわけでもなさそうなのに、多少気持ちが悪くなり、ジロウは美佐恵の顔を見た。

なぜ須藤を連れてきたのか——しかも、なぜ、ジロウの正体をしゃべったのか——を、ききたかったのだ。

「取り調べでは、私、あんたのことはなにも話さなかつただけどね、警察を出たところで、須藤のだんなから声をかけられたんだ」

美佐恵は、まず、そう説明した。

「でね、この人は、折り入ってききたいことがあるって言った。私や、これもきつと、なにか聞き出すための、サツの手にちがいないと思ったんだ。だから、そのまま振り切って帰ろうとした。ところが、この人が、

とんでもないことを言い出したんだ。あの人は、じつは、横手組にはめられて殺されたんじゃないかってね」

「ああ、もっと正確に言やあ、若頭の坂木にな」

「……え？」

ジロウは驚いて、須藤の顔を見た。

「俺の見たところ、榎本が鬼頭をやったのは、榎本自身の判断でじゃなく、坂木に命じられたからだろ」

誘導尋問じみた須藤の言葉に、ジロウはうなずかな

かったが、須藤はその表情を見て、そのままつぶけた。

「横手組長が生きてりやあ、榎本に対して、そんな無茶なことは言わなかったにちがいねえ。いくら坂木に肩入れしてるからって、横手は、榎本のことをそんな鉄砲玉みたいには扱えなかったはずだ。だが、横手が死んだ今となっては、坂木は、なんでも好きにできる。で、榎本に鬼頭殺しを命じた。ヤクザの義に堅い榎本は、若頭の命令なら甘んじて受け入れる。坂木はそう

踏んだわけだ」

それは、榎本自身も感づいていたことだ。しかし、それは、組の中で榎本の権威を失墜させるためで、命をとることが目的ではないだろう。いくら反目し合っていたとはいえ、同じ組の兄弟分なのだ。

ジロウがそう思っていると、須藤がつづけた。

「でな、ちよつと面白えことがあるんだ。榎本をやつた鬼頭組の男な。あいつを締め上げたら、おかしなこ

とを吐きやがった。あいつらは、他の連中とちがって、上からの直接の指示で遊撃隊として動いてたんだが、どうも『榎本を見たらすぐ殺れ』と言われてたらしい」「えっ？」

ジロウは思わず声を上げていた。

「な、奇妙だろ。ゆうべのあちこちのいざこざで、横手組の連中も何人かあげたが、誰も、鬼頭を撃つたのが榎本だってことさえ知らなかった。ところが、鬼頭

組のサンピンは、組長の命とりに来るのが榎本だつてことを、最初から知ってたつてんだ」

「……」

ジロウは考え込んでしまった。

榎本は坂木から直接命令されたのだから、あの時点で、組の他の連中がその事実を知らなかったのはわかる。でも、どうしてもしてそれが、事前に鬼頭組に漏れているのか。誰かが鬼頭組に通じているとしか思えない。

「坂木にしてみりやあ、榎本が本当に鬼頭を殺れるとは思ってなかったんだろう。まあ、いずれにしろ、坂木にやあ、鬼頭の命なんてどっちでもよかったんだ。

なぜなら、鬼頭がもう植物人間になつてゐるってことを、たぶん聞いてただらうからな」

たしかに、あの病室でジロウが見た鬼頭は、すでにまともな人間の体ていを成していなかった。たとえば、もう一度目を開けたとしても、組長に復帰できるとはどう

てい思えない。

でも、坂木がそれを知っていたとは……。

「坂木のねらいは、唯一、榎本を消すことだった。おそらく、鬼頭を殺る前に鬼頭組の連中に発見されて、撃ち殺されることを想定してたんだろう。ま、榎本は、看護婦に化けた共犯者を使ったおかげで、たまたま、本懐を遂げることだけはできたわけだが。つまり、ゆうべの事件は、そもそもが榎本をはめる罠だったって

わけさ」

須藤の言葉に、カウンターのの中の美佐恵がうつむいた。思わず悔し涙が出てしまったのだらう。

須藤はそれをちらりと見てから、さらにつづけた。

「この間の成り行きを見てて、俺は、どうもおかしいと感じてた。ふつう、ヤクザの抗争ってもんは、もつと下どうしの殺し合いがあるもんだ。それがどうだ。

今度の一連の抗争で死んだのは、横手と鬼頭の両組長、

それに榎本だ。機関銃使ったり、爆弾積んだ車ぶつけたり、やってることは派手だが、実際、命落としてるのは幹部だけだ。こんなのは聞いたことがねえ。それに、どれもこれも、妙にできすぎてる気がする。お前が最初にやった鬼頭狙撃は、まあ、勇み足にしても、あれもどうせ、坂木あたりの言葉に煽られてのことだろう」

ジロウは、思わずうなずいていた。実際ジロウは、

組の総会の時、坂木が言ったひとことに動かされ、手柄を立てるつもりで鬼頭を撃つたのだ。

「そのあとの横手組長にしても、なんであんな時期にホテルのロビーで一人になるのか。あの時、組長についてた斉藤は、坂木の腰ぎんちやくだ。で、ゆうべの榎本殺しだ。なんだか仕組まれてる感じがするだろう。要するに、その三人が死んで得をするのは誰かってことだ」

「……坂木」

「ああ。横手組の方はな。そして、鬼頭組では、やっぱり若頭の海江田だ。二人が手を結んでるとしか思えねえ」

「……あ！」

須藤の言葉に、ジロウは、いつか遊園地の観覧車で、坂木と海江田が奇妙な接触をしていたのを思い出し、声を上げた。

「なんだ？」

ジロウの反応に、須藤がきいた。

しかし、須藤がなぜこんなことを話すのか、その本心がジロウにはまだわからず、話していいものかどうか迷った。

と、須藤が、また話をつづけた。

「俺の考えはまちがってねえと思う。組長と榎本が死んで、実際、横手組にはもう、坂木にたてつけるやつ

はいなくなつた。しかし、鬼頭組には、海江田の思い通りにならないやつが、まだ一人残つてる。見てろ、今度死ぬとすりゃあ、そいつのはずだ。お前も知つてんじやねえか、この店にもよく顔出してるようだし。

湯木沢つていう……」

「……え、耕さん！」

ジロウはまた、思わず言つていた。

「やつはまだムシヨから出てきたばっかだから、よく

わかってねえが、その気になりやあ、海江田以上に組の中に影響力がある。海江田にとつちやあ、目の上のたんこぶってわけだ。今度、罫にはめられるのはやつだらうな」

須藤の言葉に、ジロウは衝撃を受けていた。

須藤の本意はまだわからなかったが、今、須藤が言ったことは、おそらくまちがっていないだらうという気がした。湯木沢の命が狙われているのだ。

それで、例の遊園地の出来事を話してみる気になった。

少なくとも、話の方向からすれば、須藤のねらいは、坂木と海江田だ。それを裏付けることは、湯木沢にとっても、また自分にとっても、不利になることではない。

「須藤のだんな、じつは……」

ジロウが、観覧車の一件を話し出すと、須藤は興味

深そうに聞いた。

話の途中で、美佐恵が「あんた、なんで、そんなとこ行つたんだい？」と口を挟んだが、ジロウはそれには答えず、その時の坂木と海江田の様子を話した。

「……そうか、そんなことがあつたか。そりや、時期から考えて、横手を殺る算段だな」

ジロウの話に、須藤はそう言ったあと、ちよつと考えてからつづけた。

「どうやら、その時にはまだ、お互い、信用しきってはいなかったんだろう。さしで、しかも、直接には接触せずに会う必要があったってことだ。もちろん、組の他の連中には気づかれないような方法でな。そこで坂木は、海江田に要求したんだろう。機会をつくるから横手組長と榎本を、鬼頭組の手で殺ってくれとな。海江田の方は、湯木沢って存在はあるものの、実質的には鬼頭組の実権をもう握ってた。あとは、坂木が横

手組を押さえりや、この街の裏の世界は二人の思うままだ。で、結果は思い通りになった。これで、坂木と海江田の同盟は確立されたってことだ」

「でも、どうして……？」

ジロウがきいた。

縄張りを巡って対立する組の若頭どうしが密約を結ぶからには、単に実権を握るためだけではないそれなりの理由があるはずだ。特に、海江田の方は、すでに、

実質的には鬼頭組を手中に収めていたわけだから、坂木の言うことをきく理由はない。

「さて、そこだ」

須藤はそう言つて、腕組みした。

「俺は、その陰には、二人を結びつけた黒幕がいると思つてる。単に、裏の世界のシマ争いじゃねえ、もつと大きな力が働いているつて気がする。で、じつは、榎本は、それを感じていたんじゃないかと思つてるん

だ。だから、やつは組長二人の次に殺されたってことじゃねえかってな」

ジロウは、榎本が最初にジロウを隠したとき、「お前を政治に利用させたくない」と言っていたのを思い出した。それ以降も、榎本は何度か「政治」という言葉を使った。ジロウは、それを「ヤクザどうしの駆け引き」という意味にとっていたのだが、もしかすると、あれは、言葉どおりの意味だったのかもしれない。

「その黒幕が誰なのか。もしかしたら、榎本がママに、手がかりになるようなことを話してるんじゃないかねえかと思つてな、それで俺は、署を出てきたママを呼びとめたんだ」

須藤のその言葉を受けると、美佐恵がつづけた。

「でも、あの人は、私には、そんなことはなににも言つてなかった。だけど、須藤のだんなの話聞いてたら、無性に悔しくつてね。私にや、ヤクザの意地なんて、

どっちでもいいけど、そんなことのために、あの人がだまし討ちにあつたつてのが許せない気がしたんだ。

それで、あんたなら、なにか知ってんじやないかと思つた。あんたを見逃してくれるつて約束するなら、あんたに会わせてもいいつて言つたんだ」

たとえそうだとしても、美佐恵はうかつだとジロウは感じた。相手はデカなのだ。殺人未遂犯で、殺人の共犯者でもあるジロウを簡単に見逃すはずはないでは

ないか。

ジロウがそう思っていると、それを見透かしたように須藤が言った。

「まあ、待てよ、ジロウ。今、俺を動かしてるのも、たたき上げのデカの意地ってやつでな。横手射殺事件以来、署には本部が設置された。本庁から来たキャリアどもが、わが物顔で肩で風きってやがる。俺たち所轄のデカは、どっちでもいい聞き込みや裏付けばっか

りだ。まあ、それだけだったら、いつものことだから、しようがねえなつて話だ。でもな、どうも今回は、その本部の中に、おかしな風が吹いてやがんだ。本庁の連中、特に本部長あたりは、今回のことを、単なる暴力団の抗争事件って範囲に納めたがつてるふしがある。具体的にや、前の鬼頭狙撃事件の犯人と、ゆうべの事件の共犯の女をあげて……まあ、両方とも、お前なんだろうが……、とにかく、それで手を打とうとし

てんだ。俺が、坂木と海江田の密約の話を臭わしたとたん、主力からはずされた。だからよけいに、俺は、黒幕の存在を確信したんだがな。どっちにしても、この港は、俺のシマだ。あんな自分の出世しか考えてねえようなやつらの思うままにはさせたくねえ。お前みてえなチンピラ一人しよつ引いて、それでちゃんちゃんなんてことには、絶対にしたくねえんだ。だから、お前が、もつとでかい捕り物のために力貸してくれる

つてなら、取り引きしてもいいと思ってる。少なくとも、今すぐしよつ引く気はねえ」

「……でも、俺も……」

ジロウがそう言うと、意気込んで話していた須藤は動きを止めた。

「……そうか。やっぱりきいてねえか」

「思い当たる節は、少しはあるけど、具体的にはなにも……」

「……そうか」

須藤は、さらに肩を落として言った。そして、美佐恵の方を見た。

「ママ、悪いが、一杯もらえねえか」

と、美佐恵は、まるでそれがわかっていたかのように、すでに氷を入れ用意していたグラスにウイスキーを注いだ。

須藤はそれを受け取り、一口飲むと、黙り込んだ。

そして、しばらく手の中のグラスをもてあそんだあと、ぼそりとつぶやいた。

「とすると、あとはあの線だけか……」

独り言のようなその言葉に、美佐恵とジロウは、須藤に見入ったが、須藤はそれ以上なにも言わなかった。

と、美佐恵が、こらえきれないというふういきいた。

「なんだい、あの線て？」

「いや、ママに言ってもしよのねえことだから」

「よしなよ、思わせぶりは」

「べつに、じらしてるわけじゃねえよ。……じやな、ママ。そんなら言うが、どっかに、誰とでも寝る、若くてきれいな女はいねえか？」

「なんだよ、それ？」

「な。無理な話なんだよ」

「そんな、魚の生煮えみたいな言い方しないで、言いたいことがあるなら、さっさとお言いよ」

「いや、あっちがしつぽ出さねえなら、こっちから乗り込んでって、しつぽを捕まえられねえかって、思っ
てな」

「どういうことだい？」

「これも、話せば長くなるが……」

「いいよ。どうせ、ここまで聞いたんだ」

「じつはな……」

そんな漫才のかけあいのようなやりとりのあと、須

藤はやつと本題に入った。ジロウは、そのじらし方から考えて、須藤にはきつと、なにかのたくらみがあるにちがいないと感じた。

「港栄企画って会社があるの、知ってっだろ」

須藤がジロウにきいた。

「ああ、斉藤の兄貴が仕切ってる……？」

「そうだ。さつきも話に出た、坂木の腰ぎんちやくの斉藤が社長やってるモデルクラブだ」

「モデル……？」

美佐恵がきくと、須藤はウイスキーをもう一口飲んでから答えた。

「登記上の業務内容はそうなってるが、実際は、いわゆるパーティコンパニオンの派遣会社、要するに、体のいい女衞せげんだ。でな、あの会社には、何人か筋もんじやない社員もいる。そのうちの一人が、俺の情報屋なんだ。そいつから入った情報なんだが、じつは、これ

までだったら絶対考えられないような客から、明日の晩、コンパニオンを派遣してくれって注文が入ってるって言うんだ」

「考えられないような客？」

「ニューポート・エンタープライズって会社だ。これも、登記上は、港の観光開発ってことになってて、遊覧船を持ってるんだが、このクルーザーが、不思議なことにも月に一回の定期点検の時しか、波止場に帰ってこ

ない。港湾水域外の沖合にずっと浮かびっぱなしなんだ。燃料や食料は、ときどき、ボートで運んでるようだ。それ以外にも、夜になると、客らしい人間を乗せたボートが、何度か行ったり来たりする。つまり、陸地離れて、よくないことをやってるってわけだ」

「よくないことってなんだい？」

「さあな。高級カジノか、海の上の売春宿か、もしかしたら、ヤクやハジキのせり市か、ま、おおかたそん

なとこだろう。もうわかったと思うが、この会社が、鬼頭組の筋なんだ。もつとはつきり言やあ、海江田の会社だ。そこに、事実上の坂木の会社から、女を送るって言うんだ」

「まだ、よくわからないけど、つまり、どういうことだい？」

「裏の手打式だよ。まだ表だつては戦争つづけるんだろうが、ここらで、誰にも見られない場所で、同盟を

きっちり固めようってな。で、そこに、明日の晩、派遣されることになってるコンパニオンが三人だ。海江田と坂木ともう一人のためか、それとも、もしかすると、三人とも特別な客たちのためなのか、いずれにしても、海江田と坂木以外に、重要な男がいるってことだ。俺の見たところ、そいつが黒幕だろう。そこに乗り込めば、それが誰なのか、わかるはずだ」

「なるほどね」

「ところが、簡単に乗り込むわけにやいかねえ。なにしろ海の上だからな。水上警察が何隻かで急襲すりやあ、だいじょぶだろうが、令状取るほどの裏付けはねえ。なににより、本部がさつき言ったような状態なんだ。目の前にうまそうなごちそうがあるつてのに、指くわえて見てるしかねえつてわけだ」

そこまできいて、美佐恵も、悔しそうな顔をした。

「でな、唯一、入り込む隙があるとすりやあ、その女

たちだ。社長の斉藤からは、とにかく、とびきりの美人をそろえろと指令が飛んでるらしい。だから、今、港栄企画の社員たちは、必死になって、美人で、しかも、金さえ積みばなんでもするってねえちゃんを捜してる」

「そういうことかい」

「ああ、その女に、黒幕は誰なのか、そこでやつらがどんな話をしてたのかを探ってきてもらやあ、あとは、

こつちでどうにかできる。だがな、そんな女はいねえ。危険だし、俺が勝手にやってることだから、もちろん婦警を使うなんてこともできねえ」

須藤は、そう言つて、あきらめ顔で首を振つた。

その顔を見て、ちよつと考えていたジロウが言った。

「俺じゃあ、だめですか？」

「……え、樹里ちゃん……」

美佐恵が驚いたように、ジロウの顔を見た。

「おめえ、なに言ってるんだ？」

須藤も、そう言った。

「美人かどうかは知らねえけど、そこに潜り込むくらいは、できると思うんですが……」

「でもよ、ジロウ。そいつああ、危ねえよ。女だったら、まあ、一発か二発やられるだけだが、いくらべっぴんだって言っても、おめえは男だ。ことに及びやあ、正体はばれる。そうになったら、命はねえぞ」

その須藤の言葉に、ジロウはかすかに笑った。

「なんだよ？」

「須藤のだんな、もういい加減、そんな猿芝居はよしましようや。ママから俺のことをきいて、逮捕もしねえでこんな話をしたのは、榎本の兄貴のことをきくためじゃねえ。そもそも最初から、俺に、その役をやらすことが目的だったんでしょ」

「いや、……」

「もういいですよ。須藤のだんなに知られたんじゃあ、どうせ、逃げ出すことはできねえんだ。どころんでも、俺は、その役をやらざるをえねえ。それが、あんたの仕掛けでしょう」

ジロウがそう言うと、須藤は急に表情を変え、「ふふ」と笑った。

「樹里ちゃん、あんな……」

二人の会話をぽかんと見ていた美佐恵にも、やつと

須藤の思惑がわかったらしく、申し訳なさそうに言った。

「いいんですよ、ママ。今、須藤のだんなが言ってた坂木と海江田の話は、うそじゃないでしょ。それを知った以上、俺だって、兄貴の仇をとってやりてえですから」

と、須藤が、ジロウの方へ身を乗り出した。

「いいか、ジロウ。俺は、やつらに見つかからないよう

に、船の近くにボートを出してる。危なくなったら、海に飛び込め。すぐ、俺が助けに行く」

その言葉に、ジロウはまた、皮肉な笑いを浮かべて答えた。

「たとえ撃たれても、死ぬ前に黒幕の名前だけは教えろってことですね」

「樹里ちゃん、ほんとに許しとくれよ。須藤なんかの

おためごかしにだまされたりして」

火葬場からの帰りに寄ったファミリーレストランのテーブルで、美佐恵は、また同じことを謝った。

「いいの、ママ。これは、あたしが、自分からやろうと思ったことなんだから」

ジロウは、昨日の須藤の前とはまるでちがう女言葉で答えた。満員のレストランで、すぐ隣の席に人がいることもあったが、この頃では、美佐恵と二人の時も、

こんな話し方の方が自然なのだ。

「でも、私のせいで、あんたにまで、死ぬかもわからないことをさせるはめになっちまって……。この人になんて言い訳したらいいのか……」

美佐恵は、そう言つて、隣の席に置いた骨壺の包みに目をやった。

「いいってば。あたしだって、兄貴とおんなじで、どつちにしろ、ろくな死に方はできない人間なんだから」

「でも、あんたには……」

そこで美佐恵は、ちよつと言ひよどんだ。

「……ん？」

ジロウが首を傾げると、美佐恵は、ジロウから目をそらせ、かすかに笑ったようだ。

「……なに？」

ジロウがきくと、美佐恵は、あらためてジロウの目を真正面から見据えて言った。

「おかしな話だけど、あんたと毎日いっしょにいて、私や、なんだか、あんたのことが自分の娘のような気がしててね。あんた、最初の頃とちがって、こうしてると、ほんとに女そのものだもの。そんなふうには、女物の喪服さえよく似合ってたさ」

「なにが、言いたいなの？」

「あんたには、……死んじやいけない理由があるんだろ」

「……え、どういうこと？」

「ヤクザとしてのあんたが考えてることはさっぱりわからないけど、娘としてのあんたの気持ちだったら、私にや、よおくわかるんだよ。……いるんだろ、好きな人」

「……！」

ジロウは、声もなく、美佐恵を見返していた。いつたい美佐恵は、何を知っているのか？

「きのう、二階から降りてきたあんたの顔見て、ぴんときたんだ。あんた、根っから女の顔してた。あれは、須藤を見て驚いただけの顔じゃなかった。それに、階段の下に置いてあった男物の靴、あたしが気づかないとでも思ったのかい。見覚えのある靴だったし」

「……ママ、それは、つまり……」

突然、美佐恵にすべてを見抜かれ、ジロウは顔を赤らめて、しどろもどろになった。自分が男に惹かれ、

抱かれまでしたこと。しかも、その相手が湯木沢だったこと。それを美佐恵に、どう説明したらいいというのか……。

と、そんなジロウを微笑むように見ていた美佐恵が言った。

「いいんだよ。そんなこと、言い訳してる暇なんてないだろ。そこまで女らしくなったあんたに、好きな男がいたって、おかしい感じはしないよ。ただね、それ

ならなおさら、もし、あんたが、この人やあたしへの義理立てで命捨てる気なら、そんなこと、やめちまつたほうがいい。女が命かけなきやいけないのは、好きな人のためだけなんだから」

ジロウは、まだしばらく、美佐恵の言葉に動揺して目を泳がせていたが、やがて、なにかを決意したように、美佐恵の目を見返した。

「……ううん、ママ。これは、あたしにとっても必要

なことなの。たぶん、どっちにしても、ヤクザで馬鹿な男のあたしは、今日で死ぬんだと思う。もし、そこから生きのびたら、あたし、本当に、あの人のために生きていけそうな気がするの」

そう言ったジロウの顔を、美佐恵は見据えていた。そして、みじかく「そうかい」とうなずいた。

「じゃあ、そろそろ行かなきゃね。ここのトイレで着替えな。その喪服と靴は、捨てちゃっていいよ。どう

せ、若い時なので、今の私にやサイズだつて合わないんだ。着替えて、髪おろしちまえば、外で張ってる刑事たちもきつとすぐには気づかないから。でも……これで、あんたともお別れなんだね」

最後まで自分のことを気づかってくれようとするそんな美佐恵の言葉に、ジロウは、涙が出そうになった。

「……ママ、いろいろ、ありがとう。あたし、ママのこと……」

ジロウが言いかけると、美佐恵は、急かせるようにした。

「そんなこといいから、早く行っちまいな」

顔を背けるようにして言った美佐恵を少しの間見ていたが、ジロウは意を決するようになり、脇に置いた大きな黒のシヨルダーバッグを取ると、テーブルを立たした。

美佐恵に言われたとおり、ジロウは、そのファミリーレストランのトイレで、例のクリーム色のワンピースに着替えた。

シヨルダーバッグの中には、それに合う靴やバッグも持ってきていた。かわりに、脱いだ喪服や靴をそのシヨルダーにしまい、個室を出ると、それをシンクのところにあったゴミ箱に押し込んだ。

鏡の前で、アップ気味にまとめていたウィッグの髪

をほどき、口紅を、グロウの入った明るい色のものに
変えた。

鏡の中の姿は、入ってきたときとはまるで違う感じ
になっていた。

トイレを出ると、ジロウは、テーブルの美佐恵を見
て、かすかにうなずくようにしたあと、そのまま、そ
の脇を通り過ぎようとした。

美佐恵も、ジロウのことを目で追ったりはせず、コ

「ヒーを飲むふりをしていたが、それでも、ジロウにだけは聞こえる声で、言った。

「いいかい。絶対に死ぬんじゃないよ。……耕さんの、
ためにもね」

act. 10 Trapped Bunny

港栄企画の入ったビルは、旧港の中ほど、明治時代に建ったという赤煉瓦の倉庫のすぐ隣にある。

倉庫の方は、今度の再開発で、外観を残し港湾記念

博物館になるという話だ。景観のじやまにしかなくて
いないこのすすけたビルは、いずれ近いうちに取り壊
されるのだろう。

ビルの前でタクシーを降りたジロウは、しばらくの
間、そこに立ち、今来た方向をうかがっていた。時折、
大型トラックが通るだけのその港湾道路には、どうや
ら、それらしき車の姿はない。刑事たちが尾けてくる
様子はなかった。

それで、ジロウは、コンクリートにとろどころひびの入っているそのビルの玄関を入った。

リノリウム張りのふちがめくれ上がった階段を二階へと上がると、ジロウは、社名の書かれたドアをノックした。

と、一人の気の弱そうな男がドアを開けてくれた。

須藤から聞いた名を告げると、その男がそうだったらしく、それ以上言うなというように手で制した。そ

して、「じゃ、すぐ社長に」と、ジロウを案内した。

殺風景な事務室内には五人の人間がいたが、机で事務を執っているらしいのは、その男を含め三人だけ。

あとの二人は、奥のソファにだらしなく寝そべって、テレビを見ていた。

この二人は、ジロウもよく知っている横手組の構成員だ。いずれも、坂木の筋の準幹部である。

そのうちの一人が、入ってきたジロウに気づき、ソ

ファから身を起こして、露骨にいやらしい視線を送ってきた。

ジロウは、内心びくびくしながら、部屋の中を進んだ。

案内してくれた男が、神経質そうに「社長室」と書かれたドアをノックすると、中から「入れ」という斉藤の声が聞こえた。

「社長、今朝話した女の子が来ましたが」

「うむ」

男に連れられてドアを入ると、事務室とはまるでちがう贅沢な内装の中、斉藤はデスクに足をのせ、ふんぞり返っていた。以前より恰幅よく見えるのは、その新品の高級スーツのせいばかりではないだろう。坂木が組の実権を握ったことで、おそらく斉藤は、事実上の若頭としての地位を手に入れたにちがいない。

「どうでしょう？」

ジロウをデスクの前に立たせ、男がびくびくした様子できくと、斉藤は、品定めするような目で、ジロウの頭からつま先までを見た。

その視線に、体を堅くしていると、斉藤がきいた。

「あんだ、いくつだ？」

「二十一です」

「そうか。こんなことに慣れてる女には見えねえが、ほんとにやる気はあんだらうな？」

ジロウがうなずくと、斉藤は、片手にはめた角張った金の指輪をなでながらつぶけた。

「一晩で二十五万出す。そのかわり、二つのことを守ってもらわねえと困る。ひとつは、相手の男に何をされても文句は言わねえこと。もうひとつは、今晚あんなが見たり聞いたりしたことは、口が裂けても口外しないことだ。明日から、いつも誰かが見張ってつからない。もし、約束破ったら、そのかわいい顔が台無しに

なるぜ。いいな」

最後の部分にすごみをきかせて言った斉藤の言葉に、ジロウはふたたびうなずいた。

「名前は？」

「樹里です」

「樹里ちゃんか。よし、ちよつとそこに座って待っててくれ」

斉藤はそう言ってソファを示すと、立っていた男を

手招きした。

男がデスクに近づくと、斉藤は耳打ちするようにつた。

「もうじき例の女たちが三人来るが、リエは因果ふくめて帰してくれ。代わりにこの子を入れる。それから、今日は大事な客だから、俺が連れていく。車を用意し
といてくれ」

男は、また臆病そうにうなずいた。

男が出ていくと、斉藤は、ソファに座ったジロウを、ふたたび、なめるように見た。

その好色で意味ありげなにやにや笑いに、ジロウはさらに体を堅くした。

と、その時、ドアが勢いよく開き、先刻、事務室のソファに寝そべっていた男の一人が飛び込んできた。

「兄貴、大変ですぜ」

「馬鹿野郎、ここにいるときは、社長と呼べと言って

つだらう」

「へ、へえ……」

斉藤に怒鳴られ、その組員の男は、勢いをそがれたように小さくなった。

「どうしたんだ？」

「……へえ。今、テレビのニュースで言ってたんですが、例の看護婦に化けてた女の正体が、指紋から割れたそうです」

それをきいて、ジロウは、びっくりとそちらを見た。

「誰だっただけだ？」

「それが、とんでもない話で。ジロウだっただけですよ」

「え？ あの、榎本んとこにいたガキ……？」

そう言いながら斉藤がちらりとこちらを見たような気がして、ジロウは、あわてて目をそらせ、無関心を装った。

「へい。やつが女装してたらしいんで。吉井滋郎って

名も、はつきり言つてやした。前の鬼頭狙撃事件と合
わせて指名手配されたつてことで。いくら探しても見
つからねえはずだ。やつは、女に化けて隠れてたんで
すぜ、きつと」

男がつづけると、斉藤は口の端を引きつらせるよう
に笑つた。

「ふ、榎本の馬鹿が考えそうなこつた。もう、いい。
あんなガキはほつとけ。女に化けてるなら、鬼頭の連

中に手込めにされるのがオチだ」

齊藤のその言葉をきいていないようなそぶりをしながらも、ジロウは、ミニスカートの膝に置いた手を握りしめていた。

そのあと、ジロウはそこで、四十分近く待たされた。

その間、齊藤は、事務室に出入りしたり、ときどきかかってくる電話に対応したりしていたが、その合間

に、例の嫌らしい笑いを浮かべてはジロウの体に目を走らせた。

それに耐えながら、ジロウは、自分の置かれた状況について頭を巡らせた。

指名手配されたということは、いよいよ自分にかけられた網が狭まったということだ。今夜、いわば敵陣に飛び込み、もし生きのびたとしても、この街にはとどまっていられないだろう。警察の追っ手をかいくぐ

り、すぐにも逃げなければならぬ。しかも、もう、女装していることがなんの保障にもならないのだ。

いや、それ以前に、須藤にしても、本当のところ、どこまで信用できるかわかったものではない。ことがすめば、つまり、黒幕の名を告げたとたん、その場で逮捕されないとも限らなかつた。

命を長らえ、その上、逃げおおせる可能性は限りなくゼロに近いということだ。

ジロウは、湯木沢の顔を思い浮かべていた。

湯木沢は今頃、ジロウからの連絡を待っているにちがいない。そして、須藤の推論が正しければ、その湯木沢もまた、この街にいるかぎり、命の危険にさらされているのだ。

それならいっそのこと、坂木たちのたくらみを暴くことなどきっぱりとあきらめ、今すぐ、湯木沢と二人で街を去った方がいいのではないか。

ジロウがまた、そんな思いに迷い込んだとき、ジロウとともにコンパニオンとして連れていかれるらしい、あと二人の女たちが現れた。

「おう、遅いじゃねえか。五時には来いと言つといたろうが。この子なんて、もう一時間も前から来て、待ってんだぞ」

「今夜は大事な客だつて言うから、めいっぱい体磨いてたのよ」

「ふーん、この子なの？　リエの代わりって。なんか
ウブそうな子じゃない」

二人は入ってくるなり、斉藤の言葉に悪びれる様子
もなく、そう言った。

二人とも、どこか崩れた感じの女だったが、たしか
に美人ではあった。

「じゃ、でかけるぞ」

斉藤は、ジロウとその二人を連れて階下に降りると、

ガレージに用意されたBMWに乗せ、自らハンドルを握った。

車は、暮れかかった港湾道路をしばらく走ったあと、古い倉庫の間の脇道に入った。

今は使われていない臨港鉄道の踏切を越えると、そこは、この街を貫いて港に注ぐ川の河口になる。川沿いに並ぶ穀物倉庫に囲まれるような形で、はしけ用の

船着き場があつた。斉藤は、その荷さばき用の広場の
ような場所に、車を停めた。

見ると、船着き場の端に水面に向かつて降りる階段
があり、そこに、六・七人乗りらしいトレジャーボ
トが泊まっていた。

「ちよつと、そのまま待つてろ」

一人車を降りた斉藤は、トランクを開け、そこから
大きなスーツケースをひとつ取り出すと、それを引き

ずるように運んで、ボートに乗り込んだ。

車に乗ったまま、ジロウと女二人が見ていると、斉藤は、手ぶらで階段を上がってきた。

どうやら、スーツケースを中に置きに行ったらしい。と、ちやうど斉藤が車のそばまで戻ったところで、その広場にパールメタリックのベンツが現れた。

あれは、ついこの間まで、横手組長が乗っていた車だ。

ジロウが、そう思って見ていると、広場の中央に停まったそのベンツの後部座席から、案の定、坂木が降り立った。

B M Wの脇に立った斉藤は、そちらに向かって、うやうやしく頭を下げた。

と、坂木は、ゆっくりと斉藤に近づいた。

「俺の手みやげがわりだ。いい女をそろえたるうな」
ドスの利いたその声は、車の中にもよく聞こえた。

「へい」

齊藤は、ふたたび、最敬礼するようにならずくと、ドアを開け、ジロウたちに向かって、「降りろ」と言った。

降り立ったジロウと女二人は、坂木を前に、自然に横一列に並ぶような形になった。

と、坂木は、一人一人の前に立ち、検品するともいうように、その顔を見た。

いちばん最後の位置に並んでいたジロウの前に立つと、坂木は、口の端に下卑た笑いを浮かべ、見つめてきた。笑っていても、目つきだけは、蛇のように冷たい。

その視線に耐えきれず、ジロウがうつむくと、坂木はいきなり、片手をジロウのあごの先にあて、ぐいと顔を上げさせた。

「……ふ、なかなか上玉じゃねえか。いいだろう。よ

し、ボートに乗せろ」

坂木がそう言うのと、斉藤はジロウたちを追い立てるようにして、例の階段へと導いた。

「乗りな」

ボートには、狭いデッキがあり、その前方にコックピットといっしよになったキャビンがあつた。中は、ちよつとしたリビングのようなつくりで、右舷側にテーブルが造りつけられ、左舷の壁に五人掛けのソファ

ーのようなシートがあつた。その奥がコックピットになつてゐる。

立ったままでは天井に頭が着きそうだったが、女たちと並んでシートにかけると、思った以上に余裕があつた。

あとから入つてきた斉藤は、ミニスカートのジロウたちの脚をまたぐようにして、コックピットに入り、坂木はいちばん入口側にかけた。

運転席に座った斉藤が、エンジンをかけたあと、体をひねるようにして後ろを向き、言った。

「衣装はその中に入ってる。サイズやかっこのちがうのを何着かそろえさせたから、好きなのを選べ」

見ると、先刻、斉藤が運び込んだスーツケースが、テーブルの上に置かれていた。

女の一人が中腰になり、そのスーツケースを開けた。

「えーっ、こんなの着るのお」

女は不服そうに声を上げた。

と、斉藤は、にやにや笑いを浮かべ、「文句は言わねえって約束だぜ」と言い、前に向き直ってスロットルレバーを倒した。

船が動き出した反動でよろめきながら、女はスーツケースの中の衣装を引っ張り出した。それを見て、ジロウは息をのんだ。

表面が黒いスパンコールで飾られたそれは、オープ

ントップの水着のようなものだった。ヒップの位置には、しっぽのようなピンクのポンポンが着いている。のぞき込むと、スーツケースの中には、ピンヒールのパンプスや、ウサギの耳のついたカチューシャまで入っていた。これは、バニーガールの衣装だ。

今夜、どこかの時点で正体がばれ、そのことで危険な目に遭う覚悟はしていたが、これでは、相手の秘密を探り出す前に、こちらの秘密を知られかねない。こ

んな衣装では、胸や股間をごまかすのは、かなりむずかしいだろう。

そう思って、ジロウがひとり考え込んでいると、ボートは、すでに暗くなり始めた港の中に進み出た。

港から二キロほど沖につくられた高潮防波堤の間を抜け、しばらく行くと、そこに、一隻のクルーザーが浮かんでいた。

来た方を見ると、漆黒の空の中、コンビナートの煙突の先で燃える火だけはわかったが、それ以外の港の灯りすべてがひとつにかすんで見える。それほどの距離だ。

ボートが近づいていくと、そのクルーザーがずいぶん大きいのがわかった。遊覧船にすれば、定員五十人以上はありそうだ。

船尾脇から鉄階段が降り、その下の海面に、両側に

ボートが一隻ずつ泊められる鉄製のフロートがつけられ、揺れていた。

そのフロートに横付けされたボートから、まず、坂木が降り立った。

二人の女につづいて、ジロウがフロートに足をかけようとすると、坂木が、その手を取った。たしかにそうでもしてもらわないことには、揺れて、波のしぶきで濡れているその上に——表面には滑り止めのゴムが

張つてあるとはいえ——、パンプスで立つのはむずかしいだろう。

フロートについたもやい鉤にボートを繋いでいた斉藤が、例のスーツケースを持って、最後に降りてきた。

斉藤は、そのつもりではなかったようだが、女たちに、「サイズが合うかどうかなんて、着てみなきやわかんないわよ」と反撃され、しぶしぶ、スーツケースごと運び込むはめになったのだ。

夜の海風の寒さにも震えながら、坂木と女たちにつづき、手すりにしがみついて数段の階段を登ると、クルーザーのデッキにたどり着いた。

デッキは、さほど広くない。漁船や釣り船などとはちがう、キャビンを大きく取った客船用の構造だ。

そのデッキに、海江田がひとりで待っていた。

坂木と海江田は、いったんにらみ合うように視線を交わしたあと、ゆっくりとうなずき合った。

「先生方は？」

「まだだ」

短い会話のあと、海江田は先に立ってデッキを歩き、キャビンのドアを開けた。

キャビンの中は、手前側、つまり船尾側が、それなりに広いラウンジのようなスペースになっていた。中央にシャンデリアまで吊されているその内装は、高級クラブにも劣らない豪華な感じのするものだ。左手前

には十人ほどがかけられるソファセットがあり、右手には、バカラテーブルが設置されていた。ソファの向こうのコーナーにはスタンドバーがあり、その向こうに、さらに船室があるようで、スタンドバーの横にドアがついている。反対の右舷にも、同様のドアのある部屋がある。つまり、キャビンがラウンジと二つの船室で構成されているようだ。さらに、その二つの部屋の間には挟まれるように通路があり、その向こうに操舵

室があるようだった。

「ほお、海江田のお。噂には聞いてたが、なかなかのもんじゃねえか」

部屋の中央に立って眺めていた坂木が感心したように言うと、海江田が得意げに答えた。

「坂木のお。これからの極道は、世の中のフィクサーの役目を果たすサービス業だったのが、あんたの持論だろ。そんなら、これくらいの設備投資は必要だぜ」

「ああ、せいぜい見習わしてもらおう。どのくらいかかるもんか、あとで教えてくれ」

「いや、こうなった以上、もつと親密な事業提携といこうじゃねえか。ここも、必要なときは、好きに使ってもらっていいぜ」

「ふふ、うちにも提供できるもんはあるだろうしな。お互い経費節減になるってわけだ。コスト意識のねえヤクザは生き残れねえってか」

坂木と海江田は、そう言つて笑い合つた。

と、その時、操舵室に通じる通路から足音が聞こえた。

坂木と斉藤が、一瞬、それに警戒した顔を向けると、海江田があわてて言った。

「心配いらねえ。この船のキャプテンをさせてる男だ」
通路を通つてやつて来たのは、がっちりした体に、
乏しい表情の男だった。ただ、船長と言うには似つか

わしくない服装をしている。蝶ネクタイにラメ入りのグレーのベストを着ているのだ。

「いつもは何人か乗ってんだが、今日は、こいつ以外のクルーはみんな陸おかに揚げたんでな。似合わねえバーテンやバカラのディーラーも兼ねなきやなんねえってわけだ」

「船長も自前なのか」

「ああ、二級船舶を取らせた。うちの構成員の中で、

いちばん口の堅えやつなんだ。今夜みたいな場には打
つてつけだろう。まあ、人材育成は事業の基本だから
な」

海江田は坂木に、また笑いながら答えたあと、その
船長をやっているという組員に、「なんだ？」ときい
た。

「客の乗ったボートが、今しがた港を出たと連絡が入
りやした」

「そうか。じゃ、お前も準備を始めてくれ」

「へい」

海江田の言葉に、その船長の男は、スタンドバーのカウンターの中に入り、グラスや皿の用意を始めた。

「じゃあ、お前たちも着替えてもらおうか」

坂木が、手持ちぶさたに立っていたジロウたちの方を向いて言った。

「おう、奥の部屋を使ってくれ。しかし、坂木のお。

なかなか美人ぞろいじゃねえか」

海江田はそう言いながら、坂木にソファをすすめ、自らもそこに座った。

顔を寄せてなにか話し始めた坂木と海江田を横目で見ながら、ジロウは、女たちとともに、奥の右手の部屋に入ろうとした。

と、バーカウンターにいた船長が「着替えなら、こっちで」と、左の船室を示した。

「ベッドが二つあるじゃん。また、3Pとか4Pとかやらされんだ、きつと」

「先生とか言ってたけど、医者かなんか？」

「どっちにしても、どうしようもない色ぼけじじいでしょ」

「ゴムなしでやれとか言われたらたままないから、エイズ持ちとか言っちゃおか」

その部屋のベッドの上に斉藤が置いていった例の
ーツケースから、それぞれに自分用のものを取り出す
と、女たちはぺちやくちやしやべりながら、さっさと
着ているものを脱ぎはじめた。

派手な下着を臆面もなく脱いでいく女たちに気後れ
して——それに、もちろん、どうしたらばれずに着替
えられるかと考えていたせいで——ジロウがぽかんと
立っていると、女の一人が「あんだ、なにやってん

の？」ときいてきた。

「え、ええ……」

それでジロウは、さっきボートの中で目星をつけておいた衣装をとりだした。

バーニーガールといっても完全なオープントップではなく、細いストラップで吊る形だ。胸のカットもそれほど深くなく、しかも、カップの上の部分に、ヒップのポンポンと同じような綿毛のモールがついている。

これなら、パッドを入れても見えないだろう。

Tバックのショーツだけになった女たちが網タイツをはいているのを横目で見ながら、ジロウもワンピースを脱いだ。

幸い、女たちは、着替えながらも、あれこれ話をつづけていた。ジロウの方を気にとめている様子はない。それでジロウは、ショーツの中の自分のものを股間に強く押し込み、股を開かないように注意しながら、網

タイトをはいた。

女たちに背を向け、シリコンパッドが見えないようにブラをはずすと、手早く、そのバニーの衣装に脚を通して引っ張り上げた。腰のあたりを強く引っ張ると、なんとか股間は落ち着いた。

ストラップを肩に掛け、女たちの隙をうかがって、ブラから抜き取ったパッドを胸のカップに入れ、形を整えた。

と、そこで女の一人に見られたようだ。

「あれ、あんた、パッド入れてんの？」

「……え、ええ。胸、ちっちゃいから」

「脱がされた時、男が、上げ底だって怒り出すかもわかんないわよ」

自らは豊かな胸の谷間をのぞかせながら、そうからかった女も、どうやら、それ以上のことには気づかなかったようだ。

女たちは順に、ドアの脇にひとつだけかけられた鏡の前で、シャツの襟の形をしたチョーカーとカフスの形をしたブレスレットをつけ、ウサギの耳をつけた。

女たち二人が、さらに髪と化粧を直したあと、やっと順番がきて、ジロウは女たちとおなじ作業をした。

鏡で見ると、股間だけは、下への出っ張りが目立つ気がしたが、全体として、そんなに違和感はない。あとの二人のようにセクシーとはいかないまでも、生硬

な体の線にそんな衣装を着ていることで、かえって、いたいけな危うい色気のようなものさえ感じられた。

十センチ以上ありそうなピンヒールの真っ赤な靴にちよつとよたつきながら、脱いだ服やバッグを持って部屋を出ると、例の船長の男が、「ここに置いときな」と、バーカウンターの裏を示した。

荷物をそこに置いたあと、斉藤がふたたび部屋から運び出したスーツケースをカウンターの横に置くのを

見ながら、ジロウは、なんだか落ち着かない感じで立っていた。

他の二人の女は、カウンターにもたれ、平然と最前からのおしゃべりをつづけていたが、ジロウは、こんな格好で、とても平生ではいられないのだ。

不安定なヒール、脚の線をどこか秘密めかして強調する網タイツ、腰のあたりまで切れ上がったハイレグの衣装、むき出しの肩や背中……。よく考えてみると、

いくら女装に慣れたと言っても、これまでこんな見せるための———というか、見られることだけを目的とした——服など着たことがなかった。

ソファの坂木と海江田が、小声でなにか話しながら、こちらを見てにやにやしていることも、気になった。

ジロウがそんなふうにもじもじしていると、カウンターのなかから窓の外を見ていた船長が、坂木と海江田に声をかけた。

「いらしたようですぜ」

「お、そうか」

それをきくと、坂木と海江田はあわてて席を立ち、
デッキに出るドアに向かった。

「お前たちは、ここでお迎えしてくれ」

斉藤が、テーブルのそばを指し示してから、坂木た
ちの後を追った。

ボートから船に移るのに手間取っているのか、デッキで海江田たちと挨拶し合っているのか、客たちはなかなか入ってこなかった。

ジロウは、はやる心を抑えて、その入口を凝視していた。須藤が言っていた「黒幕」が、今、そこから現れるのだ。

と、やっとドアが開き、海江田の「どうぞ、お入りください」という声とともに、男たちが入ってきた。

最初に現れたのは、高級な背広姿の太った男だった。どこか高慢な態度とジロウたちを見たときの大仰な身振りに、ジロウは、「どこかで見たことがあるな」と感じた。

つづいて入ってきたのは、ジロウにはまったく見覚えのない男だった。いかにも一流企業の重役という感じで、この男も、根は高慢にちがいないのだが、それを人当たりのよいソフトな衣でおおっている感じだ。

三番目の男は、はつきりと見たことのある顔だった。以前、組長が出席したなにかのパーティー——ジロウは、組長の護衛メンバーの一人としてそこにいたのだが——で、挨拶していた。たしか、この市で一番か二番の土建屋の社長、山崎なんとかというはずだ。

山崎は、前の二人にくらべるとどこか卑屈な感じで、二人に気をつかっているようだ。ホストである海江田を差し置いて、この船のことを説明したりしている。

三人を中に入れたあと、海江田と坂木が入ってきて、つづけて、斉藤ともう一人の男——この男は、いつも海江田についている日比野という鬼頭組の組員だと思——が、大きなジュラルミンのケースを引きずるように持って入ってきた。日比野は、おそらく、先の三人の男たちをボートに乗せて送ってきたのだ。

「さあさ、今川先生と長瀬専務は、どうぞそちらへ」
山崎と海江田にすすめられ、太った男と重役ふうの

男が奥側のソファに座った。太った方が今川で、重役ふうが長瀬というようだ。

山崎と坂木、海江田が対面するソファに座り、五人の男たちが対座した。

斉藤と日比野は、ソファの後ろに、五人を護衛するようになっている。

「君たち、先生方のお飲物をおききして」
坂木がジロウたちに声をかけた。

ジロウが動こうとすると、それより先に、女の一人がソファに近づいた。

それでジロウは、例の船長の男がカウンターの上面におしぼりを用意しているのに気づき、それをとりに行って、トレイにのせて運んだ。

「海江田君、こんな海の上だというのに、なかなかいい子たちを置いてるじゃないか」

おしぼりをテーブルに置いたジロウの顔をにやけて

見上げながら、山崎が言った。

「いえいえ、これは、この坂木の兄弟が用意してくれ
たんで」

「今川先生と長瀬専務が、わざわざ足を運んでくださ
るといふので、海江田の兄弟と相談して、今夜はいろ
んな趣向を用意させていただきやした」

海江田と坂木が答えると、今川がソファにふんぞり
返りながら、「いろんな趣向？」ときき返した。

「ま、それはあとのお楽しみということ。こんな場所だからこそ、誰の目もはばからず、無礼講もできるというもんです」

坂木の言葉に、今川と山崎は、ジロウたちバニーガールの方をちらりと見てから、にやにやと顔を見合わせた。

そこに酒が来て、それぞれに配られた。

「今川先生、ま、どうぞ。今夜は、先生の運輸政務次

官就任の祝いも兼ねさせていただいていますんで」

海江田がそう言つて今川にビールをついだ。

男たちが今川に向かつて「おめでとうございます」と言いながら乾杯したのを見て、ジロウは、やっと今川の正体に思い至つた。選挙の時に、見慣れた顔だったのだ。この地域のそこらじゅうに貼り出されるポスターで、いやでも目に焼きついている。

「さ、じゃあ、酔っぱらう前に、やっかいな話を片づ

けてしまおうか」

グラスを置くと、今川が山崎にそう言って促した。

「ええ。坂木君、海江田君、今川先生のご尽力もあつて、長瀬専務が約束通りのものを用意してくださった」

山崎はそう言うと、立っていた日比野に目配せした。

と、日比野は傍らに置いていたジュラルミンのケースを運び、重そうに持ち上げるとテーブルの上に置いた。

山崎は、その留め金をはずし、ふたを開けた。

「とりあえず二億ある」

男たちの目を気にしながら、ジロウがそつとのぞくと、ジュラルミンケースの中には、全体が透明なビニールで包装されて札束が並んでいた。

「もちろん、実際の土地の購入費や営業権の譲渡金は、うちや不動産屋を通して振り込まれる。だから、これは、地権者への撒き餌や疑似餌として使えばいい。ま、

とはいえ、なによりこれは、これまでの礼ということだから、今後、もっと必要になれば、そこは、魚心あればなんとやらというのでやつで。……ということですよ、よろしいですね、長瀬さん」

山崎にそう振られ、長瀬は苦笑しながら答えた。

「最近は、世論もマスコミも、公共事業にはなにかとうるさい。できることにも限りはあるがね。それに、今川先生の選挙への抛出もあるし」

「おう、それを言われると私も辛い。しかし、まあ、今は、港灣総合開発計画が、当初の規模通りすんなり離陸できるかどうかの正念場だからね。ここを、どんな手を使ってでも乗り切らんことには、君んとこだつて大損害だろう」

今川は、そう言つて長瀬をけん制したようだ。と、さらに山崎がそれにつけ加えた。

「それについては、来年の市長選についても、長瀬さ

んや今川先生に、ぜひ今のうちから考えておいていた
だかないとなりませんな。現市長は、推進反対派に対
してどうも弱腰で。そろそろ首のすげ替え時でしょう」
「ふふ、市長もまさか、一番の後援者がこんなことを
言つとるとは、思っていないだろう」

「バブル崩壊以降、これまでのやり方じゃあ、生き残
っていきませんからね。いくら義理のある人間でも、
切るべきものは切る。なあ、君たち」

山崎は、そう言って、坂木と海江田の方を向いた。

「……へ、へい」

今度は二人が苦笑した。

「で、どうなんだ。予定通り、半年うちには、旧港周辺の掃除はすむんだらうね」

今川が、坂木たちにきいた。

「ええ、今はまだ、それらしく見せるために、主に街の方でぶつかってますが、これから徐々に騒ぎを旧港

の方に移していこうと、兄弟とは話がついてます」

「今後、なかなか立ち退かねえ強固な反対派のいる地域で、派手なことが起こるはずです。もう、それに嫌気がさして、引越しを考え始めたやつらも出てるよ
うで」

「うちも兄弟んところも、若いもんたちは頭に血がのぼってますから、あとは、ほかつといてもなりふり構わずやるでしょう」

「そうなりや、山崎さんとこと協力しながら、土地を
まとめていくだけです」

「ま、効率よくやってくれよ。警察を押さえるのも、
それはそれで大変なんだからな」

「若いもんが多少引っ張られた方が、おたくらも、リ
ストラできていいってもんだらう」

男たちの話に、ジロウは衝撃を受けていた。

横手組と鬼頭組の衝突は、極道どうしのシマ争いな

どではなく、そもそもが、再開発をスタートさせるための地ならしだったというのか。

両方の組長や榎本は、衝突の理由をつくるためと、そして、山崎たちの意を受けた坂木と海江田が実権を握るために、一石二鳥を狙って消されたのだ。

それでは、榎本たちはもちろん、踊らされている下の者たちも救われない。

ジロウがそう思っていると、山崎がこちらを向いた。

「ま、物騒な話はそれくらいにして、そろそろどうです。今夜の趣向とやらを……」

その言葉に、坂木が目配せし、斉藤がジロウたちにテーブルに着くように促した。

日比野があわててテーブルの上のジュラルミンケースを片づけるのを待ち、ジロウが女たちとともにソファに座ろうとすると、坂木が、「お前は長瀬専務の隣へ」と言った。

言われたとおりに、ジロウが長瀬の隣に座ると、すぐにその場の雰囲気は、クラブかキャバレーのようになった。

今川と山崎についたあとの女二人は、それぞれ男たちにしなだれかかり、他愛ない話をしている。男たちも、あれこれ言いながら、露出した女の体のあちこちにタッチし、気分を高めていつているようだ。

ところが、長瀬は、どうもその雰囲気になじめない

ようで、酒をつぐジロウに見向きもしない。

ジロウは、それにどこかほっとしながらも、迷っていた。

怪しまれないためには、他の女たちと同じように、もつと積極的に「サービス」した方がいいのだろうか？

それとも……。

もう、ここまでの会話で、男たちのたくらみのおおよそのことはわかった。黒幕の正体も知れた。この長

瀬は、おそらく、どこかのゼネコンの重役なのだろう。ここまでわかれば、もうあとは、逃げ出す算段を考えた方がいいのかも知れない……。

と、そこで、そんな雰囲気に場が持てないこともあったのだろう。多少酒に酔ったらしい長瀬が、坂田と海江田に話しかけた。

「しかしね、君たち、いきなり鬼頭組の組長が撃たれた時は、正直、肝を冷やしたよ」

「へ、へい」

「のちのち、そういうこともあるだろうと、山崎さんから聞いてはいたが、ちよつと早すぎた。国の審議会
の最終答申はまだ出ていない時期だったからね。総合
開発の利権がらみだって臭わしてたマスコミもあつた
し、スキャンダルを嫌って、補助金対象の重点事業か
らはずされるのではないかとひやひやした」

と、それを耳にはさんだ山崎も、隣の女の胸に手を

入れながら言った。

「まあ、それについてちやあ、私もあのあと苦勞したんですよ。せつかくこの二人を結びつける話がまとまりかけてたのに、あんなことになって、海江田君は『約束がちがう』って、息巻くし」

「いえね、ちようどあの時期に、一人、ムシヨからうるさいのが戻ってきたんでさあ。あそこで組長に死なれちやあ、組ん中は、正直、どう転ぶかわかったもん

「じゃなかった」

海江田がそう言うのと、坂木は、首をすぼめるようにした。

「いやあ、面目ねえ。組ん中で抗争の下ごしらえをしようとして、若い連中をちよつと煽ったら、一人、馬鹿が先走りやあがって。俺自身も、あれにやあ驚いたんですから」

「ま、どこの世界にも、そういうおつちよこちよいは

いるもんだ」

今川も、その話に口をはさんできた。

「わが党にも、やたら威勢のいい言葉を吐いては、野党の連中を逆なでする馬鹿がいる」

今川が、政治家らしいポーズで、片手を振りかざしてそう言うと、今川の相手をしていた女が、その手をつかんだ。

「もう、先生ったら、怖い話はおしまいにしようって、

さつき言つたばかりでしょ。もつと楽しいことしようよ」

女は、そう言いながら、今川の手を、股間近くの網タイツの上に持つていった。

それにまた相好くずした今川を見て、坂木が言った。「ふふ、そうですね、先生。そんな先走りへのお詫びも含めて、せつかく用意した趣向だ。思いつきり楽しんでつてくだせい」

「なんなら、あっちにお部屋も用意してありますから、使ってください。船の上で、二部屋しかねえから、今川先生と山崎さんには、同じ部屋でがまんしていただかなきゃいけません。ま、その方が、お二人で、二度おいしいってわけで」

海江田が言うと、今川が、その言葉ににやけながらも、ちよつと心外だという感じで言った。

「長瀬君は、一人で一部屋使うのかい」

「ええ、長瀬専務には、またちがう趣向もありまして」
坂木が言うと、長瀬は、ちよつと身を引くようにした。
た。

「いや、私は……」

「まあ、そうおっしやらずに。この女は、長瀬専務のために用意したようなもんですから」

坂木は、ジロウの方をあごでしゃくるようにして言った。

「いや、私は、女は……」

長瀬は、さらに固辞した。

「ええ、そうお聞きしています。ですから……」

坂木はそう言つてにんまり笑つた。

「長瀬専務、その女の体、よく見てやっってください。
特に股間のあたり」

「……え？」

長瀬が聞き返すのとほぼ同時に、驚いたジロウは、

同じ言葉をつぶやいていた。

「ま、どう見ても女に見えるかも知れませんが、そいつは、じつは男なんでさあ。長瀬専務がそういう高尚な趣味をお持ちだときいて、こんな趣向を考えたわけ
で」

坂木の言葉に、ジロウを見た長瀬の視線が、これま
でになかった異様な光を帯びた。もちろん、長瀬だけ
でなく、他の人間たちも驚いた顔でジロウに注目した。

ジロウは、その集中する視線と、坂木の突然の言葉に冷静な判断ができなくなり、やはり呆然とした表情のまま、硬直した。

「こんな美人は、女でもなかなかお目にかかれねえでしょう。たつぷりとお楽しみくださいませ。しかも面白えことに、こいつ、じつは、今話に出てた、そのおつちよこちよいの馬鹿なんでさあ」

「……え！」

坂木と海江田以外の全員が、また、驚きの声をあげた。ジロウ自身も、その一人だった。

と、海江田がつけ加えた。

「老いぼれたヤクザの組長を一人撃ってるってえ、じやじや馬娘だ。なかなか刺激があると思いますぜ」

∴∴逃げなければいけない。

やっとジロウはそう悟った。

自分は、畏にはめられたのだ。坂木や海江田は、正

体を知った上でジロウをここに導いたのだ。

でも、どうして……？

その答えを考える間もなく、ジロウは席を立って走っていた。

背中から撃たれるかも知れない。

そう思った。

しかし、フロアに立っている斉藤や日比野さえ、にやにや笑って見ている。

それを不審に思いながらも、不安定な高いヒールで、デッキに通じるドアまで走ったジロウは、そこを開けた。

と、その行く手をふさぐように、人が立っていた。

須藤だった。

一瞬、ジロウは、須藤が危険を察知して助けに来てくれたのだと思った。

ところが、須藤もまた、にやにやと笑いながらジロ

ウの顔を見ていた。

「おめえがなかなか逃げ出さねえから、寒い甲板でふるえてたんだぜ」

その手に握られた拳銃は、ジロウが着ているバニーガールの衣装の、胸のモールをずり下げるようにあてられていた。

「……す、須藤、お前……」

ジロウが思わずつぶやくと、背後から坂木の声がし

た。

「ジロウ、おめえも極道なら、デカなんかを信用しちやあいけねえな」

網タイツの編み目からのぞく、ジロウの脚の肌が粒立った。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

ポートタウン・ジュリエット

Porttown Juliet

<公開版>

CopyRight 1999 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500